

八雲村児童福祉センター建設工事  
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

# 禅定寺 遺跡

平成18(2006)年12月

島根県松江市教育委員会

八雲村児童福祉センター建設工事  
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

ぜん じょう じ い せき  
**禪 定 寺 遺 跡**



平成18(2006)年12月

島根県松江市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、八雲村保健福祉課の依頼を受けて、八雲村教育委員会が平成10年度（1998年）に実施した八雲村児童福祉センター建設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査の成果を取りまとめたものである。報告書の作成にあたっては、松江市と合併する以前の平成15年度に作成し、印刷については合併後の平成18年度に行った。従って、本文の一部に合併前の内容の記述があることをお断りしておく。

2. 本書で扱う遺跡の所在地及び調査面積は次のとおりである。

禅定寺遺跡　島根県松江市八雲町東岩坂111-5　　本調査面積　366m<sup>2</sup>

3. 現地調査期間と費用は次のとおりである。

確認調査　平成10年4月13日～4月17日

本調査　平成10年5月25日～7月3日

現地調査費用　2,401（千円）

4. 調査組織は以下のとおりである。

### 〔平成10年度〕 現地調査

調査主体　八雲村教育委員会　教育長　佐原通司

調査指導者　守岡正司（島根県教育庁文化財課）

事務局　長島幸夫（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者　川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員　田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

作業員　安部直義、安部当子、安部益子、石倉恒雄、石倉暁子、石原君子、石原政子  
石原幸恵、近藤仁一、下川久就、高尾万里子、藤原秀子、山根隆、山根利子

遺物整理　武田裕子

### 〔平成15年度〕 報告書作成

調査主体　八雲村教育委員会　教育長　泉和夫

調査指導者　池淵俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）

事務局　三好淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者　川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員　田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

遺物整理　高尾万里子

5. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略。所属は平成15年当時。）

高橋克彦（大阪大学大学院文学研究科）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）

東森市良（八雲村文化財保護審議委員）、三宅博士（安来市和銅博物館）

平尾政幸（財團法人京都市埋蔵文化財研究所）、廣江耕史（島根県教育庁文化財課）

西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、内田律雄（同）、椿真治（同）、林建亮（同）

丹羽野裕（島根県古代文化センター）、園正雄（勝央町教育委員会）

6. 本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。
7. 本書で使用した方位は磁北を示す。
8. 本書に掲載した「第1図：八雲町位置図（1:400,000）」は島根県松江土木建築事務所の管内図を浄書して使用し、「第2図：位置と周辺の遺跡（1:25,000）」は「八雲町管内図」を使用した。
9. 「第2図：位置と周辺の遺跡（1:25,000）」の遺跡番号は島根県教育委員会発行の「増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ」（出雲・隠岐編）2003年3月と対応している。
10. 土壌および遺物の色調には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人口色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年版を参考にした。
11. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SB…掘立柱建物跡 PT…掘立柱建物跡に伴うビット P…ビット SK…土坑  
SD…溝 T…トレンチ
12. 本遺跡出土遺物及び調査記録は松江市教育委員会で保管している。

## 本文目次

第1章 位置と環境 .....	1
第2章 調査に至る経緯 .....	7
第3章 調査の経過 .....	7
第4章 遺跡の概要 .....	8
第1節 第1遺構面の調査 .....	10
1. SB-01 .....	10
3. SB-03 .....	12
5. SK-01 .....	19
7. SK-03 .....	22
9. SK-05 .....	24
11. ピット内出土遺物 .....	25
2. SB-02 .....	12
4. SB-04 .....	16
6. SK-02 .....	20
8. SK-04 .....	23
10. SK-06 .....	25
12. 遺構外出土遺物 .....	26
第2節 第2遺構面の調査 .....	42
1. SK-07 .....	42
3. SD-02 .....	42
5. SD-04 .....	42
2. SD-01 .....	42
4. SD-03 .....	42
6. 整地層出土遺物 .....	44
第5章 まとめ .....	47
第6章 自然科学的分析	
押定寺遺跡出土木製品の樹種調査結果 .....	63
第7章 追補 (昭和58年度調査の押定寺遺跡) .....	65
第1節 調査に至る経緯 .....	69
第2節 調査の経過 .....	69

第3節 遺跡の概要 .....	70
1. A区の調査 .....	71
1. SB01 .....	72
3. SB03 .....	72
2. B・C区の調査 .....	75
1. 第1加工段 .....	75
3. 第3加工段 .....	83
5. 第5加工段 .....	87
7. B・C区出土遺物 .....	89
3. 出土地点不明遺物 .....	91
第4節 まとめ .....	94

## 第1章 位置と環境

八雲村は島根県の東部、松江市の南にあたり、北と西を松江市（北：旧大庭村・西：旧忌部村）、南西部は雲南省大東町（旧海潮村）、南東部は安来市広瀬町（旧山佐村・旧広瀬町）、北東部は八束郡東出雲町（旧意東村・旧出雲郷村）に囲まれている。松江駅よりバスを利用して約26分で八雲村役場に、34分で熊野大社前に到着する。松江市街地への利便性に恵まれ、そのベッドタウンとして近年急速に宅地化が進み、県下市町村の中で高い人口増加率を示す村である。

村の規模は東西8km・南北10km・面積約55.41km<sup>2</sup>で、総面積の80%以上が山林で占められている。この山間に谷が形成されているが、これらはすべて意宇川本支流の浸食堆積作用によるものである。大きな谷に意宇川、桑並川、東岩坂川、川原川が形成した谷がある。その谷筋の沖積地には余すところなく水田が開かれている。平野はあまり発達をみせず、川が合流する村の北側（意宇川の中流域）部分に盆地状に展開している。

遺跡はこの谷と平野を取り囲む部分に集中し、下流に向かうほど密集している。今回調査を行った押定寺遺跡もこの平野の南東部に位置する。以下、調査遺跡の報告にあたり、周辺の代表的な遺跡について時代毎に概略を記す。

旧石器時代の遺跡としては、空山遺跡（F62）<sup>注1</sup>が熊野空山山頂に位置する。1971年に実施された学術調査により、前期旧石器時代と考えられる握鎌、握斧、整状石器、削器が出上した。しかし、これら石器の剥離痕が自然に生じる破碎痕とする意見もあり、この石器が果たして人為的に加工されたものなのか、自然石であるのかの結論は出ていない。この他、真ノ谷遺跡（106）や折原上堤東遺跡（88）からも旧石器時代にさかのばる可能性のある石器が出土している。

縄文時代になると遺跡の調査例は増加するが、遺構に伴うものは少ない。その中にあって、西ノ谷遺跡（F73）からはサスカイト製ポイント形石器、黒曜石の二次加工のある剥片石器とともに82個のビット状の落ち込みが検出されている。これらのうち、P-1～P-15は長軸5m、短軸3.5mを測る楕円を描き、その中央にP-16～P-20が方形に配置され、上屋構造を推定することも可能である。また、前田遺跡（97）では、川辺から晩期のドングリの貯蔵穴が見つかっている。実際にドングリが出土した土坑は4個であったが、立地や規模から貯蔵穴と考えられる土坑が多数検出されている。この他、底部中央に小さなビットをもつ土坑も発見された。遺物は出土していないが、形態などから縄文時代の落とし穴と思われるものであり、折原上堤東遺跡、折原峠遺跡（101）、青木遺跡（98）、谷ノ奥遺跡（36）、恩部遺跡（63）、真ノ谷遺跡からも同様の土坑が検出されている。

弥生時代の遺跡は縄文時代に比べると少なく、各遺跡から出土する遺物の量も僅かである。前期の遺物としては、前田遺跡から壺と甕の破片が数点出土している。但し、河川堆積層からの出土であり、遺構は見つかっていない。後期の遺跡としては折原峠遺跡が存在する。後世の掘削により大部分が失われているが、第2加工段の床面から後期前葉～中葉の草田2期に含まれる甕が出土している。また、同丘陵上には折原上堤東遺跡（第II調査区）が位置し、弥生時代後葉から古墳時代前期初頭の堅穴住居跡5棟が見つかっている。この他、村内からは熊野大社々地出土と伝えられている銅鐸がある。しかし、正確な出土場所は特定できていない。外縁付紐式に属するものであり、現存する高さ19.9cm（身高16.4cm、鉢高3.5cm）、鉢厚2～3mm、重量648gを測る。文様は

全体に不鮮明であるが、紐は絞杉文、鱗は鋸歯文、身は4×4画となる袈裟襟文（四区袈裟襟文）で飾られている。

古墳時代になると、遺跡数が増加し、7割以上がこの時期のもので占められる。前期の古墳としては、3基の方墳からなる小屋谷古墳群（22）が存在する。埋葬主体は箱式石棺と楠棺及び組合式木棺であり、副葬品としては3号墳の組合式木棺内から刀子1本と四神鏡1面が出土している。

中期以降になると、小規模な古墳群が丘陵上に造られるようになる。谷ノ奥遺跡の北東には、増福寺古墳群（42）、土井古墳群（19）、増福寺裏山古墳群（41）が分布している。増福寺古墳群は、一辺6.0～14.5mの方墳26基によって構成されている。特筆すべきは、20号墳から出土した須恵器子持壺の親壺と、前田遺跡から出土した子壺とが接合できることである。本来は親壺の肩部に1個の子壺が取り付けられていたものであり、このうちの1個が前田遺跡の河川内から、もう1個が親壺と一緒に20号墳の西面平坦面からつぶされた状態で出土している。残る2個の子壺は発見されていない。土井古墳群は、増福寺古墳群の北側に位置する古墳群で、一辺7.0～11.0mの方墳13基によって構成されている。増福寺裏山古墳群は土井古墳群と同じ丘陵に立地し、一辺10m前後の方墳8基からなる。これらは尾根により便宜上3つに分けられているものの、本来は同一の群と考えられる。総数47基を数えるこれらの古墳群は、密集度において、松江市大草町にある西百塚山古墳群と同一の群をなしていたと考えられる八雲西百塚山古墳群（21）に次ぐものである。この2つの古墳群が村内では密集度の高いものである。この時期の住居跡には、折原上堤東遺跡（第I調査区）があげられる。方形の堅穴住居跡4棟が見つかり、このうちSI-03からは多数の土師器に混じり住居内祭祀に用いられた泥岩製有孔円板4点が出土している。

古墳時代後期に入ると、出雲地方東部に多い石棺式石室をもつ池ノ尻古墳（5）、雨乞山古墳（1）が築かれる。池ノ尻古墳は東岩坂川が造り出した谷の水田中に位置する。墳丘は水田耕作の際に削られ、現在では石室がむき出しになっている。原位置から動いている石材もあるが、現状での石室の規模は内法で幅1.9m、奥行き1.3m、高さ1.6mを測る。雨乞山古墳は平野北東にそびえる雨乞山南麓に築かれたものである。墳丘は現状で一辺7.5×8.0m、高さ2.5mを測り、方墳と考えられる。意宇川下流域の古墳の影響を受けたこの古墳は八雲村最大規模の石室を有し、この地域の有力な豪族の存在を想定させる。一方、同時期の横穴墓は丘陵斜面に数基から十数基の単位で営まれている。密集度の高いものに四歩市横穴墓群（3）がある。増福寺古墳群の南側の丘陵山腹に分布するものであり、確認できる横穴だけで28穴を数える。玄室の平面プランは、大部分が方形で天井は丸天井形をなしているが、非常に丁寧な四注式正整家形のものも数穴見られる。この他、後期の遺構として前田遺跡から検出された貼石遺構がある。川辺に自然石を並べたものであり、遺構周辺からは、勾玉、切子玉、土鈴、手摺ね土器、木製の琴、白玉が入った須恵器の壺、赤色顔料が塗布された土師器の高杯、瓢箪、多量の桃核等が出土している。また、付近の河川内からは頭椎式の木製刀把装具や木製刀形、赤色顔料により優美な文様が描かれた木片などが出土していることから、有力首長を中心に行われた川辺の祭祀遺跡と考えられる。

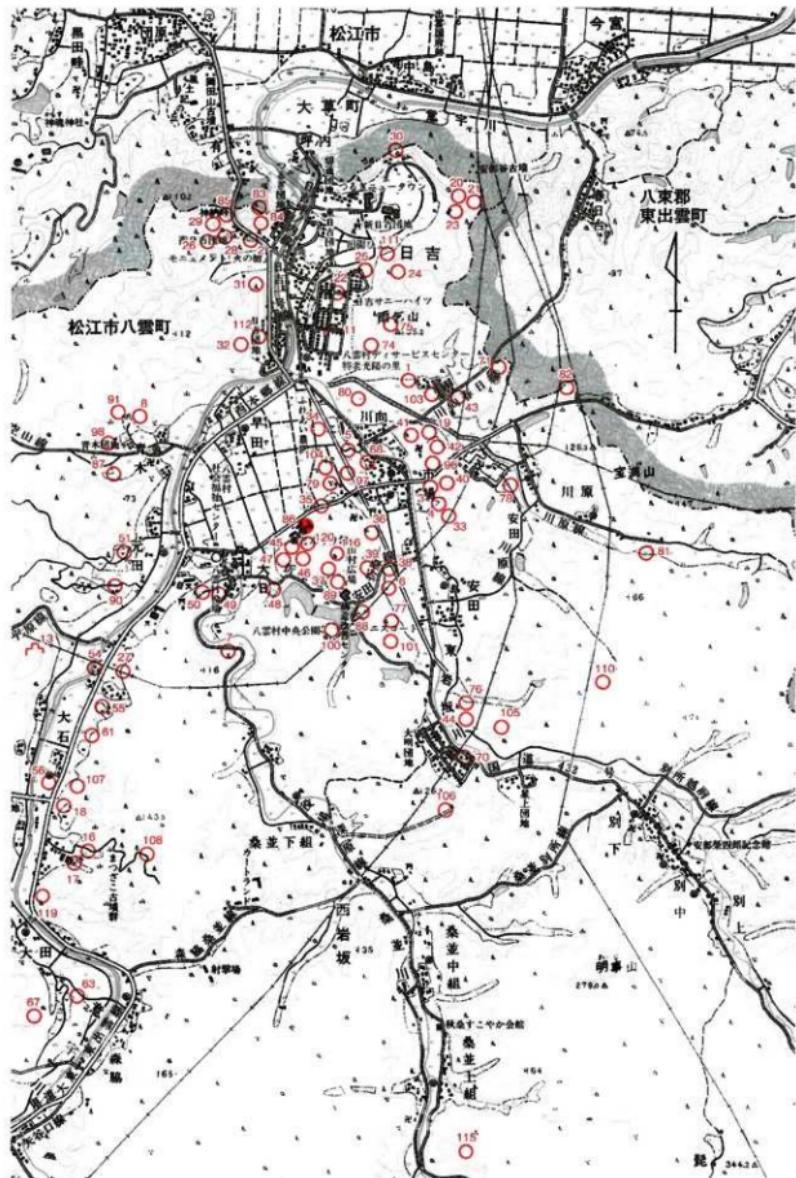
奈良時代の遺跡としては青木遺跡があげられる。第I調査区で発掘された掘立柱建物跡の床面からは須恵器の壺蓋内面に「社辺」と刻まれたヘラ書土器（転用硯）が出土している。付近からは須恵器の灯明皿、「林」と書かれた墨書き土器2点なども見つかり、注目される。八雲村は、733年に編纂された『出雲國風土記』によると、出雲国府や意宇郡家が置かれていた「意宇郡大草郷」に含ま

れ、八雲村域だけで1つの郷を形成し得ないほど人口は希薄だったようである。それでも当地域には中央の神祇官の神名帳に登録されている官社が10社（熊野大社・久米社・布吉瀬社・宇流布社・前社・田中社・詔門社・樅井社・速玉社・石坂社）、出雲国序で登録されている国社7社（毛弥社・那富乃夜社・国原社・田村社・河原社・笠柄社・志多備社）が存在していた。このことは、村域の各地に集落が形成され、それぞれが祭祀を行っていたことを裏付けている。

中世以降の遺跡の調査例は僅かである。熊野大社近くにある叶ザコ遺跡（F58）からは瓷器系の壺を使用した鎌倉時代の墓が見つかっている。また、墳頂部より五輪塔の基壇が検出された中山2号墳（35）や、多数の火葬墓が検出された谷ノ奥遺跡が存在する。谷ノ奥遺跡の古墓群は低丘陵上に位置し、25基以上の五輪塔が発見されている。この他にも、村内各所には多くの五輪塔が点在している。本村は尼子氏の居城月山富田城のあった広瀬町と接し、中海・宍道湖が近いという地理的条件から要衝には山城が築かれ、熊野の地には尼子十旗の中に数えられる熊野城跡（F12）が存在する。戦国時代頃の伝承・文化財が数多く残り、今後中世の遺跡の増加と重要な遺構の発見も予想される。



第1図 八雲町位置図 (1:400,000)



第2図 位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	名 称	種 別	概 要	番号	名 称	種 别	概 要
1	雨乞山古墳	古墳	方墳、石棺式石室、一部調査	54	雲陽古墳	古墳	
2	岩坂陵墓参考地	古墳	円墳、古墳周辺一部調査	55	掛合遺跡	散布地	須恵器
3	四歩市横穴墓群	横穴墓群	28穴確認、須恵器	56	田中社跡	神社跡	
4	高丸横穴墓群	横穴墓群	4穴確認	61	大石窓跡	窓跡	須恵器
5	池ノ尻古墳	古墳	石棺式石室、須恵器	63	恩部遺跡	散布地	一部調査・保存、中井宿施設、五輪塔
6	安田横穴墓群	横穴墓群	2穴、平天井型	67	恩部山横穴墓群	横穴墓群	
7	岩屋口横穴墓群	横穴墓群	18穴(2穴消滅、1穴調査)	68	紙原遺跡	散布地	磨製石斧
8	青木横穴墓群	横穴墓群	2穴確認	70	鉢谷遺跡	散布地	消滅、現在の大明団地
11	東岩坂豪吉山城跡	城跡	山城、石垣、消滅	71	穴田遺跡	散布地	円筒埴輪、土師器
13	大石城跡	城跡	山城、郭、豪郭、通称じゅ山城跡	74	雨乞山古墳群	古墳群	方墳2基
16	松廻古墳群	古墳群	方墳4基以上、2・3号発掘調査	75	雨乞山古墳跡	祭祀遺跡	土師器
17	松廻横穴墓群	横穴墓群	8穴以上、1・4号発掘調査	76	綿田古墳群	古墳群	方墳2基確認
18	高野横穴墓群	横穴墓群	2号発掘調査・刀刃、鐵頭、斧把	77	松ノ前古墳	古墳	方墳
19	土井古墳群	古墳群	方墳13基、13号発掘調査	78	浜井場遺跡	散布地	須恵器、土師器
20	大円寺上古墳群	古墳群	円墳2基	79	中山五輪塔群	古墓	五輪塔、石塔は原位置移動
21	八戸西百塚山古墳群	古墳群	方墳47基	80	芦渡遺跡	住居跡他	土器・漆器・埋没、須恵器、瓦器
22	小屋谷古墳群	古墳群	方墳3基、発掘調査・消滅	81	尾敷谷五輪塔群	古墓	五輪塔
23	大円寺遺跡	散布地	土師器	82	善三郎谷横穴墓群	横穴墓群	8穴
24	大谷古墳群	古墳群	方墳2基、子持塗	83	落井古墳群	古墳群	方墳10基
25	御崎谷遺跡	散布地	須恵器、土器類、発掘調査・一部調査	84	落井東横穴墓群	横穴墓	1穴開口
26	神納遺跡	散布地	須恵器、土師器	85	落井西横穴墓群	横穴墓群	11穴以上
27	桧廻遺跡	散布地	須恵器、土師器他	86	禪定寺遺跡	住居跡	陶磁器、須恵器、石器
28	神納横穴墓	横穴墓		87	青木谷遺跡	散布地	須恵器、土師器、黒曜石
29	神納古墳群	古墳群	5基	88	折原上堤東遺跡	住居跡	- 漢字・篆刻、整地作業、土器・土器
30	和田平横穴墓群	横穴墓群	3穴、櫛段	89	折原中堤北遺跡	散布地	須恵器
31	岩瀬古墳群	古墳群	方墳1基、円墳1基	90	上元川遺跡	散布地	須恵器、土師器、黒曜石
32	勝負谷古墳群	古墳群	方墳2基、円墳2基、1号発掘調査・消滅	91	椎木谷遺跡	散布地	須恵器、土師器
33	高丸古墳群	古墳群	円墳2基	96	増福寺横穴墓群	横穴墓群	2穴確認、瓦面に玄室の跡が残在
34	山崎遺跡	散布地	一部発掘調査・理窟、瓦器類、3・4号石斧	97	前田遺跡	祭祀遺跡	調查・堆積、自然河岸川、木製琴
35	中山古墳群	古墳群	方墳5基、2号発掘調査・消滅	98	青木遺跡	住居跡	- 鉛字・篆刻、部分的削除・新規土壁作業
36	谷ノ奥遺跡	古墳・古墓群	方墳3基、円墳1基、火葬龕、土器類	100	折原中堤遺跡	住居跡	一部瓦・消滅、堅土住居跡、土器等
37	北折原遺跡	古墳群	方墳1基、横穴2穴、1号調査・消滅	101	折原寺遺跡	住居跡	- 一部瓦・消滅、堅土住居跡、土器等
38	安田古墳群	古墳群	円墳2基、1号調査・消滅	103	赤道遺跡	散布地	須恵器、土師器
39	外輪谷横穴墓群	横穴墓群	13穴、12号調査・消滅、鉄鏃跡	104	中山遺跡	散布地	須恵器、土馬
40	四歩市古墳群	古墳群	方墳6基	105	官谷遺跡	生産遺跡	調査・消滅、製炭跡
41	増福寺裏山古墳群	古墳群	方墳8基	106	貞ノ谷遺跡	住居跡	調査・消滅、加工段、薪と土穴
42	増福寺古墳群	古墳群	方墳26基、一部調査・消滅	107	反田遺跡	散布地	須恵器
43	原ノ前横穴墓群	横穴墓群	調査・消滅、須恵器、鐵鏃、刀子	108	轟谷奥遺跡	散布地	土師器
44	細田横穴墓群	横穴墓群	半人冢形	110	館滑道路	住居跡?	- 一部調査・消滅、須恵器、青木石斧
45	禪定寺横穴墓群	横穴墓群	6穴	111	大谷遺跡	散布地	調査・発掘、田代川、須恵器、土師器
46	禪定寺古墳群	古墳群	方墳10基	112	勝負谷遺跡	散布地	須恵器、土師器、石鍬
47	折原横穴墓群	横穴墓群	3穴	115	桑並城跡	城跡	
48	折原下堤遺跡	散布地	須恵器、土師器	116	禪定寺城跡	城跡	郭、土壘、塹切、連続壁塀
49	大日堂横穴墓群	横穴墓群	4穴確認、須恵器	119	大田山神社跡	神社跡	調査・消滅、加工段、社殿の基礎
50	岩坂神社横穴墓群	横穴墓群	須恵器	120	禪定寺五輪塔群	古墓	基底岩盤の八輪塔群が多数散在
51	古城遺跡	散布地	- 一部調査・消滅、須恵器、萬文土器				

## [註]

- 註1 「増補改訂島根県遺跡地図」(出雲・隠岐編) 島根県教育委員会 2003年3月 (P-1)
- 註2 赤澤秀則「1.出土遺物・時期」「南講式草田遺跡 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5」鹿島町教育委員会 1992年3月 (P-1)

## [参考文献]

- ・八雲村文化財調査報告1 『空山遺跡発掘調査概報』八雲村教育委員会 1972年3月
- ・八雲村文化財調査報告3 『八雲村の遺跡』八雲村教育委員会 1978年3月
- ・八雲村文化財調査報告4 宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う  
『土井13号墳発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1979年3月
- ・八雲村文化財調査報告7 昭和55年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う  
『増福寺古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1981年3月
- ・八雲村文化財調査報告8 吉吉台サニーハイツ造成工事に伴う『御崎谷遺跡・小屋谷古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1981年3月
- ・八雲村文化財調査報告10 昭和56年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う『増福寺古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1982年3月
- ・八雲村文化財調査報告11 県道人東・東出雲線改良工事に伴う『中山2号墳・中山五輪塔群』八雲村教育委員会 1982年3月
- ・八雲村文化財調査報告13 新山村振興農林漁業対策事業に伴う『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1994年3月
- ・八雲村文化財調査報告16 『一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』『山崎遺跡・前田遺跡(第1調査区)発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1999年12月
- ・八雲村文化財調査報告17 西岩坂地区一般農道整備事業に伴う『真ノ谷遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会 2000年3月
- ・八雲村文化財調査報告19 『一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』『前田遺跡(第2調査区)発掘調査報告書』八雲村教育委員会 2001年3月
- ・八雲村文化財調査報告20 『一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』『谷ノ奥遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会 2002年3月
- ・八雲村文化財調査報告22 『折原峠遺跡・折原中堤遺跡・古城遺跡』八雲村教育委員会 2003年3月
- ・『青木遺跡第1調査区終了報告』八雲村教育委員会 1996年8月
- ・『八雲村誌』八雲村 1998年12月
- ・『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会 1987年10月
- ・『神々の国 悠久の遺産』－古代出雲文化展－ 島根県教育委員会 1998年3月
- ・『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(西の谷遺跡) 島根県教育委員会 1987年3月
- ・勝部 昭「出雲・隠岐発見の青銅器」「古文化談義8」1981年
- ・宮本徳昭「八雲村・叶ザコ遺跡出土の常滑窯」「松江考古第8号」松江考古学談話会 1992年12月

## 第2章 調査に至る経緯

近年、核家族化や少子化の進行、地域の結びつきの希薄化などにより、子育てに対する不安や孤立化が増大している。また、子どもたちは仲間遊びの不足などによる心身の未発達が問題になりつつある。このような状況下、八雲村では社会福祉センターの一室で子育て相談を行うとともに、施設の一部を遊び場として解放しているが、他の施設利用者との関係もあり十分な対応ができるといえない。また、放課後自宅に帰っても誰もいない、いわゆる放課後児童の増加が予想されている中、放課後児童クラブを既存のプレハブ施設で実施しているが、老朽化のため施設及び環境面の改善が必要となってきた。

八雲村では、これら子育てに関するニーズを把握するため、平成7年度に実態調査を行い、子育て中の家族の現状と意向をふまえ、平成8年度にエンゼルプランを策定した。この中で、子どもの遊びを通じた体力増進の場、異年齢間児童の交流の場、情操を育む場として、また、児童の健全育成活動のネットワークの中心となる施設の必要性が示された。こうして、八雲村保健福祉課では、この方針に基づいて八雲村児童福祉センターの建設を行うこととなった。建設場所としては、児童福祉ゾーンとしての整備を図るため、八雲幼稚園と保育園に挟まれた水田が選定された。

この事業に先立ち、平成9年12月24日、八雲村保健福祉課から八雲村教育委員会あてに八雲村児童福祉センター建設工事予定地内における埋蔵文化財有無についての照会がなされた。工事予定地内には禪定寺遺跡が存在していたことから計画変更が可能かどうかの協議を行ったが、福祉ゾーンとして体系的な整備を行う関係もあり、ここ以外の場所では計画自体が成り立たなくなるとの結論に達し、八雲村教育委員会が主体となり調査を行うこととなった。

## 第3章 調査の経過

調査はまず、遺跡の範囲と性格を把握し、本調査に備える意味での試掘調査を実施することとした。工事用基準杭を利用して直線を設け、これと直交するように $5 \times 5\text{m}$ のグリッド組み、グリッド毎に $2 \times 2\text{m}$ トレンチを設定した。平成10年4月14日から掘削作業に取りかかり、隨時遺構の精査を行った。必要が認められた場合は試掘トレンチを拡幅、増設し、最終的には14個のトレンチを設定している。この後、4月17日に全体写真の撮影とトレンチの配置図を作成し、試掘調査を終了した。調査により、開発予定地の約半分にあたる $350\text{m}^2$ の範囲で遺物の散布と柱穴等の遺構が確認されたため、引き続き八雲村教育委員会が主体となり本調査を実施することとなった。

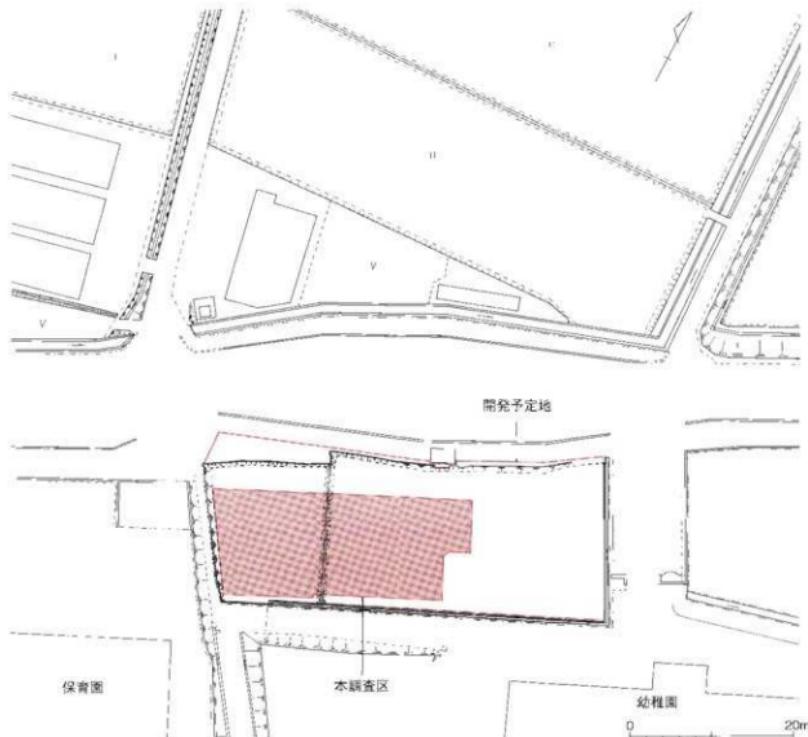
本発掘調査は試掘調査結果を基に調査区を設定し、平成10年5月25日から耕作土層を重機により除去することから始めた。この後、5月27日より手掘りによる掘削作業を開始し、隨時遺構の精査、写真撮影を行った。7月1日に全体写真の撮影、7月2日に地形測量、7月3日に撤収作業を行い現地での調査を終了した。上期の関係等で現地説明会は行わなかったが、調査期間中に幼稚園・保育園児の送迎に来られる保護者を対象として出土遺物の展示、説明会を開催した。限られた短い時間ではあったが、沢山の方に見学していただけたのは成果であった。

## 第4章 遺跡の概要

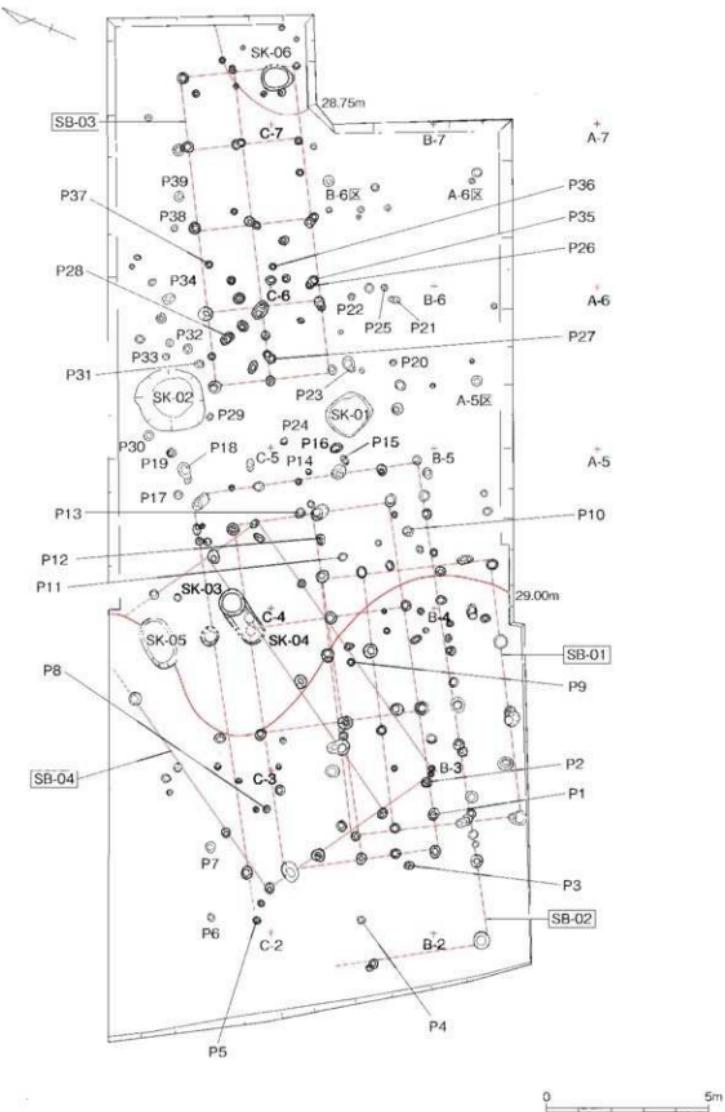
今回調査を行った押定寺遺跡は標高29.00～29.50mを測る水田中に位置する。遺跡の北西には八雲第一の早田平野が展開しており、県道を挟んだこの水田との比高差は約1.5mを測る。早田平野の耕作土下からは拳大の疊層が検出されるのに対し、調査地からこのような疊層は検出されていない。このことから調査地は、早田平野を北流する意宇川の浸食堆積作用を受けない場所であったと考えられる。南から東側にかけては平野に舌状に突き出した丘陵が伸びる。ここは非常に見晴らしが良い場所であり、遺跡の密集地帯として知られている。特に、南東の山頂は『雲陽誌』にも記載があり、意宇郡東岩坂の条に「古城山 城主年晦しれす俚民此山を押定寺といふ」と記されている。

今回の調査では、第1遺構面から掘立柱建物跡4棟(SB-01～04)、土坑6個(SK-01～06)と多数のピットを検出した。また、第1遺構面を更に掘り下げた第2遺構面からは土坑1個(SK-07)と溝4本(SD-01～04)を検出している。

以下、第1遺構面と第2遺構面に分け遺跡の概略を記す。



第3図 調査区配置図 (S=1:600)



第4図 第1遺構面遺構位置図 (S=1/150)

## 第1節 第1遺構面の調査

耕作土層の直下には遺物を多量に含んだ褐灰色土層が堆積していた。この土層は開発予定地の南側部分で確認したが、東側と北側からは検出していない。表上層と水平に10~15cmの厚さで堆積するものであり、これを取り除くと多数の柱穴と土坑を検出することができた。この遺構検出面を便宜的に第1遺構面と呼んでいる。

第1遺構面では、多数の柱穴が遺構の主体をなしており、掘立柱建物跡4棟を復元することができた。切り合ひ関係にある建物跡やピットもみられ、建て替えも行われていたと考えられる。これらの建物跡は基本的に後述の第2遺構面を埋め立てた整地層の上に作られていた。

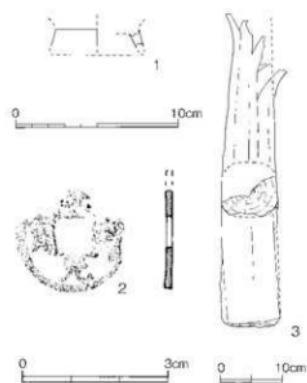
遺物は包含層である褐灰色土層の他、遺構内からも多数出土している。建物を構成するピット内出土の遺物については、それぞれの掘立柱建物跡の項に記載した。また、建物を復元することができなかったピット内出土遺物については「11. ピット内出土遺物」の項にまとめて掲載している。なお、包含層から出土した遺物については「12. 遺構外出土遺物」として記載した。

### 1. SB-01 (第6図、第8・9表)

調査区の標高28.75~29.25mを測る場所で検出された掘立柱建物跡である。梁間2間×桁行3間であるが、北東の梁間中央の柱はやや片寄った場所に位置する。建物の規模は梁間長3.82mと3.96m、桁行長7.84mと7.95mを測る。柱間距離は梁間が1.58~2.40m、桁行が2.15~3.30mである。北西側の桁行には1.19~1.33mの幅で庇か縁状の張り出しが付設されている。南東側にも同様の施設が付随する可能性もあるが、開発予定地外となるため調査を行っていない。建物部分のピットの規模はPT14が最小で26×26cm、PT9が最大で44×47cm、深さはPT7が最も浅く11.9cm、PT9が最も深く62.4cmを測る。張り出し部分のピットはPT16が最小で26×27cm、PT19が最大で35×39cm、深さはPT18が最も浅く16.7cm、PT19が最も深く49.2cmを測る。後述のSB-02・04と切り合ひ関係が認められたが、新旧関係は不明である。主軸はSB-03と同じN-60.5°-Eであり、SB-02ともほぼ同方向である。遺物としてはピット内から繩文土器1点、土師器16点、須恵器4点、土質土器2点、陶器(瓷器系)1点、石器(石鏃)1個、銭貨1枚、柱根1本が出土した。

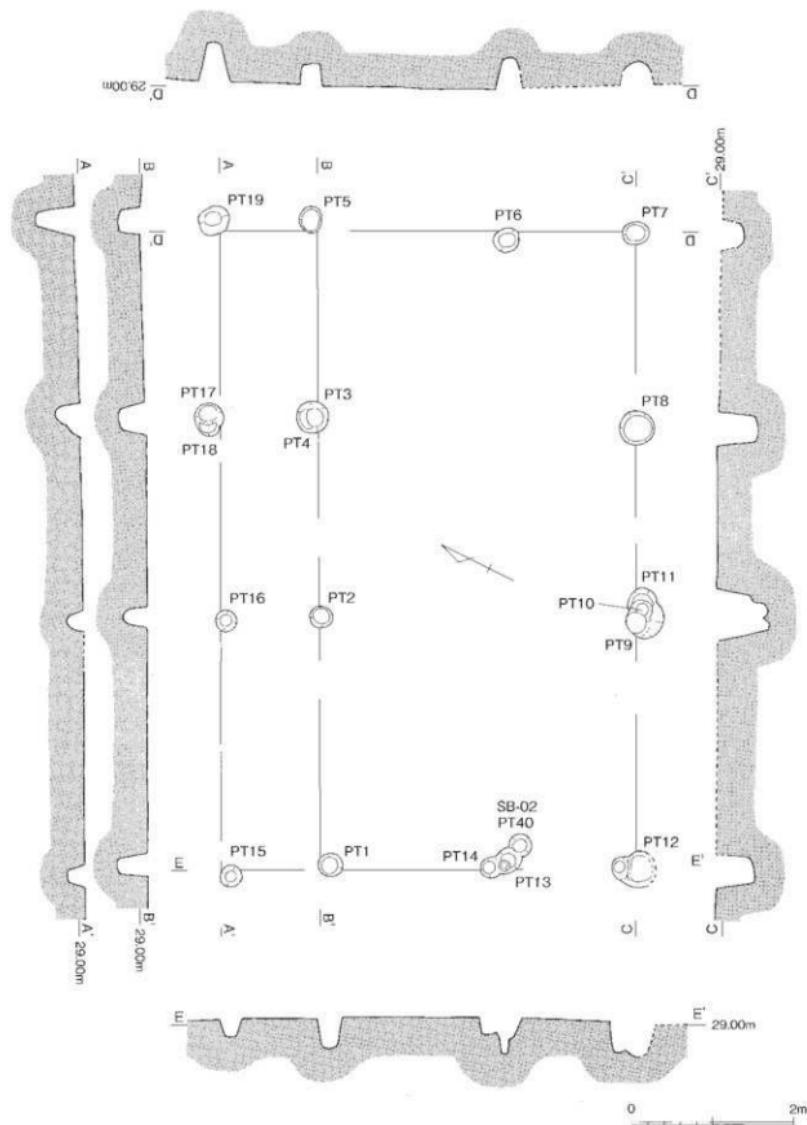
#### SB-01ピット内出土遺物 (第5図1~3)

1は高台をもつ土師質土器底部の破片である。径の復元は小片のため不正確であるが、高台径6cm前後のものである。PT3・4より出土した。2は銭貨である。鋳化のため判然としないが、1068年初鋳の熙寧元寶と考えられる。銭径2.35mm、銭厚1.30mm、残存重量1.4gを測る。1の土師質土器と同じPT3・4から出土しており、出雲市の渡橋沖遺跡SB01でみられるような「地鎮め」の跡と思われる。この他、村内の恩部遺跡T11から検出されたピット内からは銭貨1点が単独で出土している。3は柱根である。劣化が著



第5図 SB-01ピット内出土遺物実測図  
(土器1/3・銭貨1/1・柱根1/8)

しく丸太材なのか角材なのか判らない。材質はクリ材であり、表皮は認められなかった。残存長51.3cm、幅9.6cm、厚さ8.5cmを測る。PT12より出土した。



第6図 SB-01実測図 (S=1/60)

## 2. SB-02 (第7図、第10・11表)

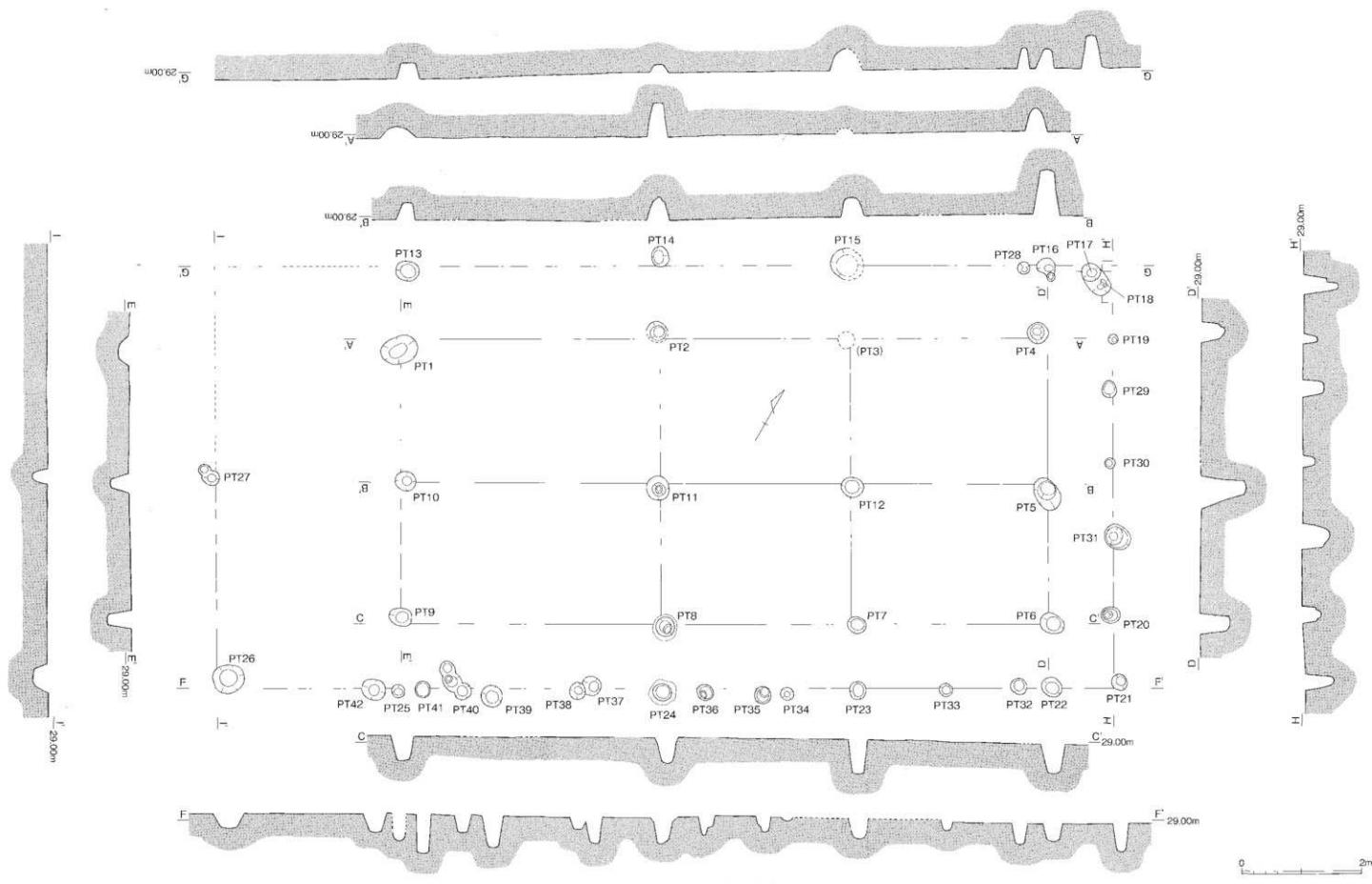
調査区の標高28.75~29.25mを測る位置で検出された総柱の掘立柱建物跡である。梁間2間×桁行3間であり、規模は梁間長4.60mと4.90m、桁行長10.6mと10.86mである。今回検出された建物跡の中では最大のものである。柱間距離は梁間が2.20~2.63m、桁行が3.22~4.40mを測る。四方に底か縁状の張り出しが付設されているものとして復元したが、南西側の張り出し部分のピットまでが他に比べると非常に長く3.25mを測る。この張り出し部分は別の建物跡のピットとする意見もあり、3方に張り出しをもつ建物跡の可能性もある。南西側以外の3方の張り出しは1.00~1.32mの位置に巡る。ピットの規模は、建物部分ではPT7が最小で29×32cm、PT1が最大で47×63cm、深さはPT1が最も浅く20.7cm、PT5が最も深く76.5cmを測る。張り出し部分のピット(PT13~27)はPT19が最小で16×17cm、PT26が最大で49×53cm、深さはPT14が最も浅く14.5cm、PT18が最も深く56.8cmを測る。SB-01・04と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。主軸はN-59.5°-Eであり、SB-01・03とほぼ同方向である。遺物としてはピット内から土師器36点、須恵器17点、土師質土器3点、鉄滓2点、柱根1本が出上した。

**SB-02ピット内出土遺物 (第9図4~8)** 4は須恵器壺である。体部は口縁部に向て内湾気味に立ち上がり、口縁端部外面に沈線を施し、括れ部を作り出す。口径12.3cmを測る。PT15より出土した。5は須恵器壺底部の破片と考えられる。平坦な底部より体部が斜上方へ向け直線的に立ち上がっている。残存する外底面には糸切り痕は観察できない。底径13.5cmを測る。4と同じPT15より出土した。6・7は鉄滓である。6は鉄分が多く含まれているようで磁石に付着する。長さ3.2cm、幅2.4cm、厚さ1.6cm、重量17.3gを測る。PT1より出土した。7は磁石に付着しないものであり、表面には砂粒の付着が認められる。長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ1.65cm、重量9.5gを測る。PT2より出土した。8は心材が用いられた柱根である。幅の広い方が下になり、ピットの中央に据え置かれた状態で出土した。底部には明瞭な加工痕が残るが、側面は劣化が著しく丸太材なのか角材なのか判らない。材質はクリ材であり、表皮は認められなかった。残存長23.7cm、幅9.8cm、厚さ8.4cmを測る。張り出し部と考えられるPT41より出土した。

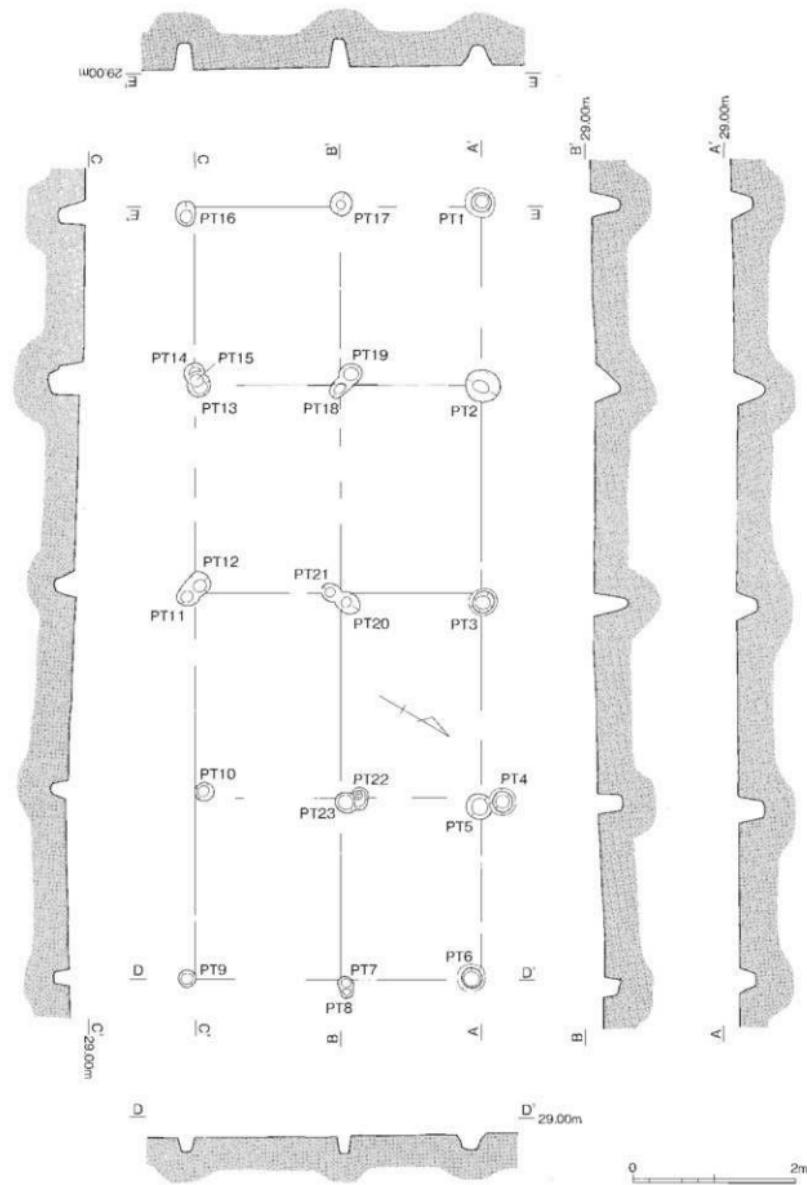
## 3. SB-03 (第8図、第12・13表)

調査区の標高28.50~29.00mを測る場所で検出された総柱の掘立柱建物跡である。梁間2間×桁行4間であり、15個のピットにより建物が構築されている。このうちの7個以上が切り合いをもつピットであるが、各ピット間の新旧関係は不明である。建て替えが行われたと考えられるが、同軸の建物跡が重なっている可能性もある。2間×4間として復元した場合の規模は梁間長3.50mと3.64m、桁行長9.42mと9.58mである。柱間距離は梁間が1.50~1.97m、桁行が1.95~2.80mを測る。ピットの規模はPT8が最小で直径14cm、PT2が最大で39×42cm、深さはPT8・9が最も浅く17.3cm、PT20が最も深く42.3cmを測る。主軸はSB-01と同じN-60.5°-Eであり、SB-02ともほぼ同方向である。遺物としてはピット内から土師器11点、須恵器2点、土師質土器8点が出上した。いずれも細片のため、図化できたのは土師質土器1点だけである。

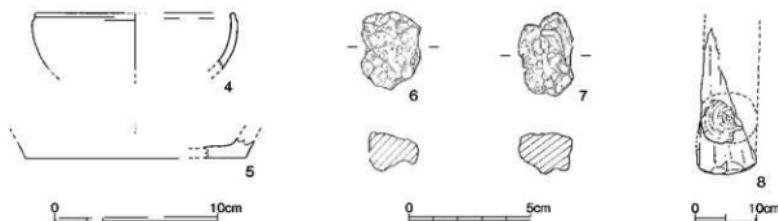
**SB-03ピット内出土遺物 (第10図9)** 9は土師質土器口縁部の破片である。逆「ハ」の字状に立ち上がるるものであり、口縁部を若干厚く仕上げ、端部は丸くおさめる。小片のため径の復元は不正確であるが、口径12cm前後のものである。PT23より出土した。



第7図 SB-02実測図 (S=1/60)



第8図 SB-03実測図 (S=1/60)



第9図 SB-02ピット内出土遺物実測図（土器1/3・鉄滓1/2・柱根1/8）

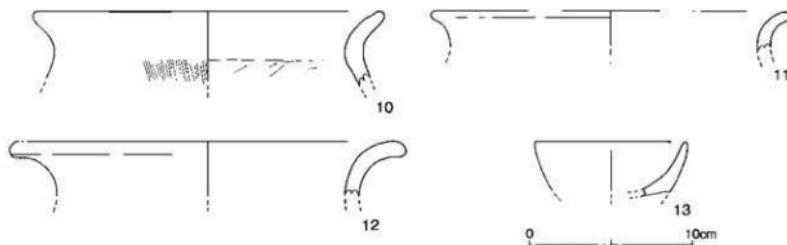


第10図 SB-03ピット内出土遺物実測図（S=1/3）

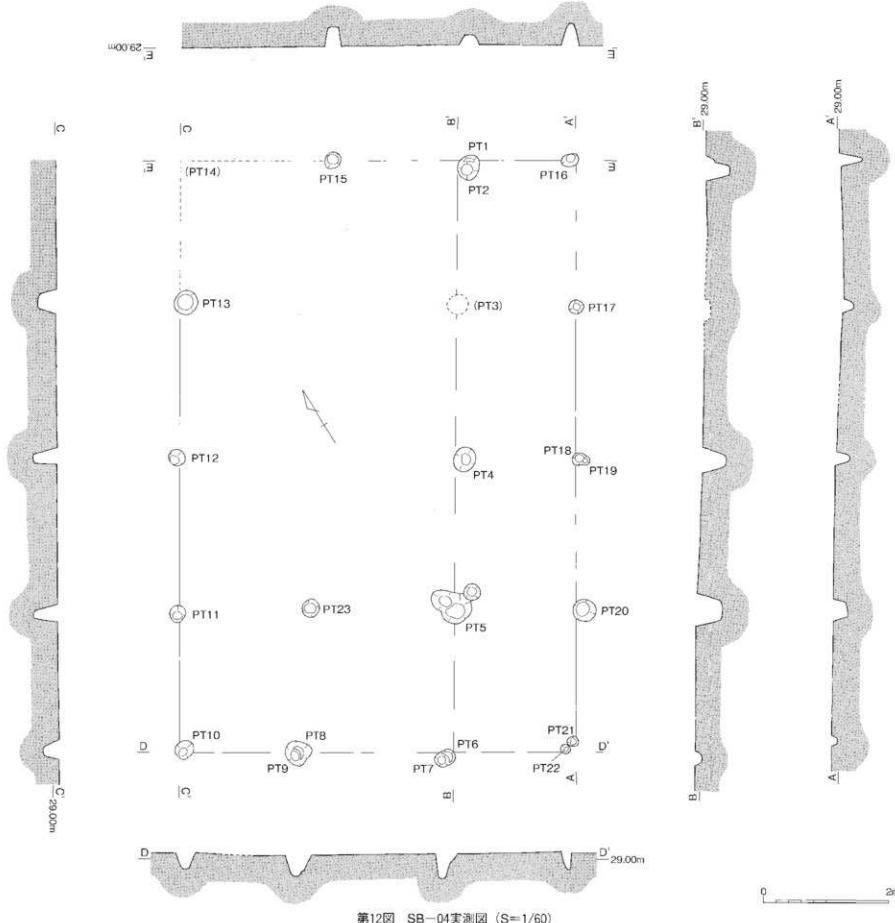
#### 4. SB-04（第12図、第14・15表）

調査区の標高28.75~29.25mを測る場所で検出された掘立柱建物跡である。梁間2間、桁行4間として復元したが、梁間2間、桁行3間としても復元できる。2間×4間として復元した場合の規模は梁間長4.12~4.24m、桁行長9.32~9.50mである。柱間距離は梁間が1.76~2.46m、桁行が2.17~2.50mを測る。南東側の桁行には1.61~2.10mの幅で、庇か縁状の張り出しが付設されている。建物部分のピットの規模はPT 7が最小で22×23cm、PT 5が最大で48cm、深さはPT 6が最も浅く14.2cm、PT 5が最も深く43.7cmを測る。張り出し部分のピットはPT22が最小で14×15cm、PT20が最大で34×38cm、深さはPT21が最も浅く8.9cm、PT16が最も深く36.6cmを測る。SB-01・02と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。遺物としてはピット内から土師器39点、須恵器9点、土師質土器16点が出土した。主軸はN-33°-Eである。

SB-04ピット内出土遺物（第11図10~13） 10・11は口縁が外反する土師器壺である。10は口縁端部内部が若干窪む。口径21.5cmを測る。PT 9より出土した。11は小片のため口径は不明である。PT 4より出土した。12は強く外反する口縁をもち、やや厚手であることから甕・甌・壺の類と考えられる。口径は24.4cmを測る。11と同じPT 4より出土した。13は土師質土器口縁の破片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部の剥離痕から台付きのものと考えられる。小片のため口径の復元は不正確であるが、9cm前後のものである。PT 2より出土した。



第11図 SB-04ピット内出土遺物実測図（S=1/3）



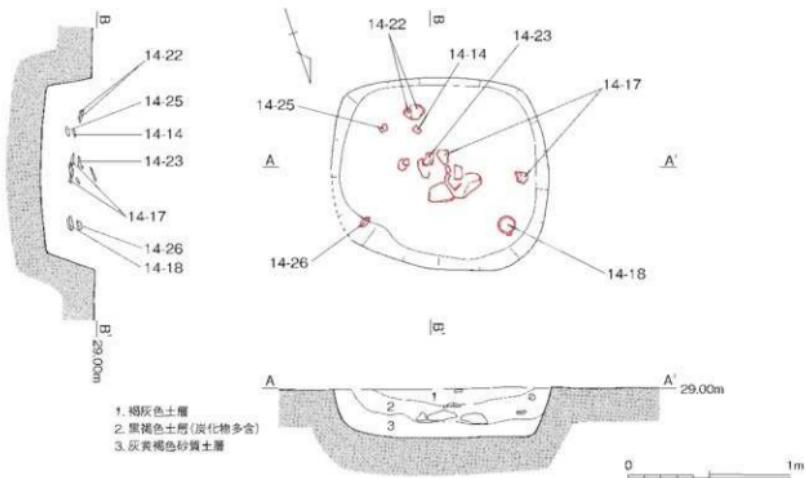
第12図 SB-04実測図 (S=1/60)

## 5. SK-01 (第13図)

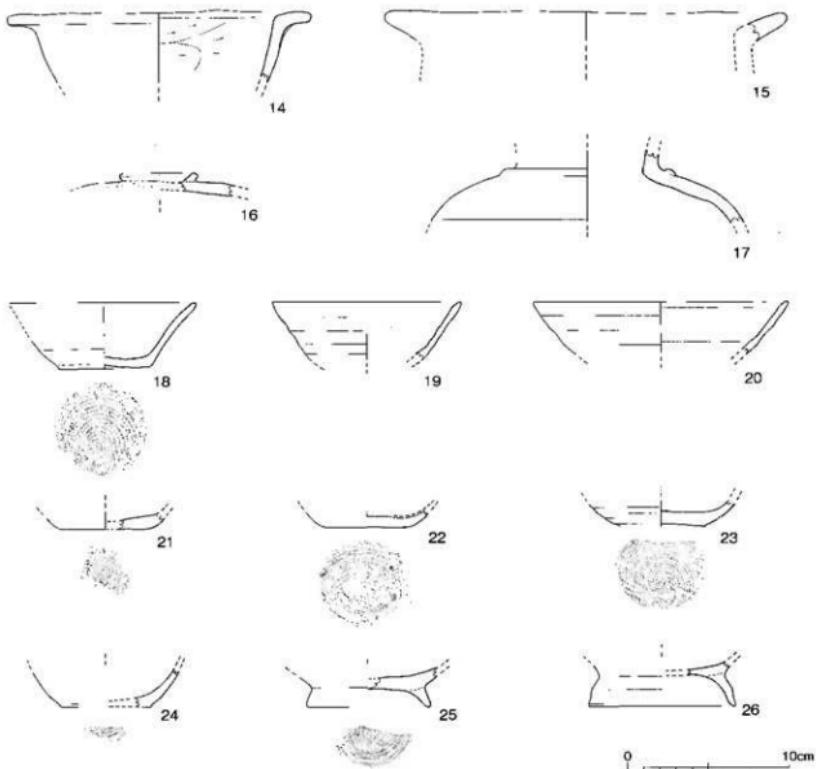
B-5の標高28.75~29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面はやや形の崩れた隅丸方形を呈し、現状での規模は長辺133cm、短辺118cm、深さ最大35.0cmを測る。壁面は平坦な底部より斜め上方に向かって直ぐに立ち上がっている。遺物としては、第2層の黒褐色土層より土師器36点、須恵器9点、土師質土器52点が出土している。

土坑の時期は、出土した土師質土器が10世紀から12世紀前半にかけての特徴を持っていることより平安時代と考えられるが、詳細な時期は不明と言わざるを得ない。

**SK-01出土遺物 (第14図14~26)** 14は土師器の鍋である。胴部の張り出しが口縁以上にならないものであり、口縁部は強く外反し水平方向に伸びる。体部内面には横方向のヘラケズリが施されている。外面全体に炭化物と煤が付着しており、煮炊きに使用されたと考えられる。15は土師器の鍋か甕であり、外面には炭化物の付着が認められる。厚さの不均一な粗製品であり、歪みのため径の復元は不正確であるが、25cm前後のものである。16は輪状つまみをもつ須恵器の壺蓋であり、つまみ部径4.8cmを測る。17は須恵器の壺である。頸部下部に突帯が巡り、肩部には沈線が施されている。調整は内外面回転ナデである。18~26は土師質土器である。18は完形に復元できた壺であり、口縁が残存している部分は体部が反り気味に立ち上がるプロポーションをもつが、他の部分は体部下半に弱い膨らみをもつ。器面は回転ナデによる凸凹痕が目立たず、平滑である。法景は口径11.5cm、底径5.6cm、器高4.1cmを測る。第20図41や第36図137~139と同様の形態になるものと考える。19・20は口縁の破片であり、内外面に回転ナデによる凸凹痕が顕著に残る。口径は19が11.6cm、20が15.7cmを測る。21~24は無高台の底部片である。底径は21が5.3cm、22が5.4cm、23が5.4cm、24が5.5cmを測る。いずれも切り離しは糸切りと考えられるが、風化のためはっきりしないものもある。25・26は高台をもつ底部の破片である。高台径は25が7.6cm、26が9.0cmを測る。底部の切り離しは風化のため判然としないが、25は糸切りと考えられる。



第13図 SK-01実測図 (S=1/30)

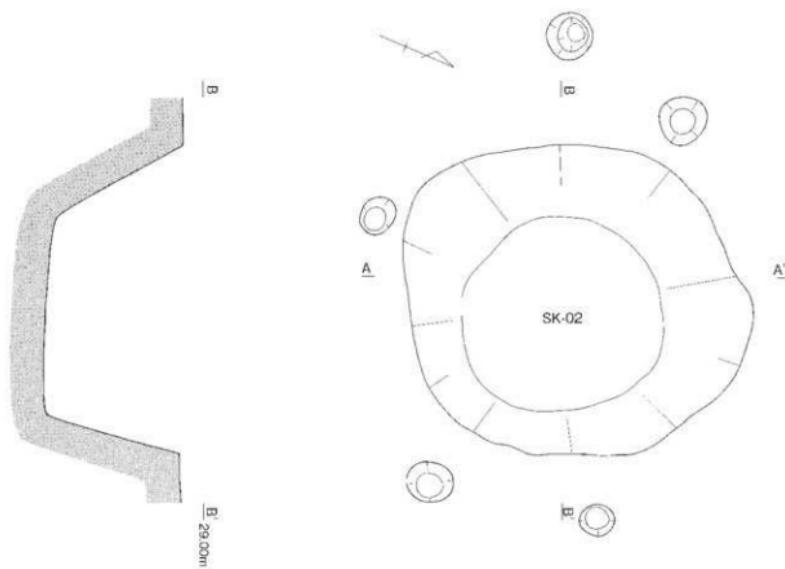


第14図 SK-01出土遺物実測図 (S=1/3)

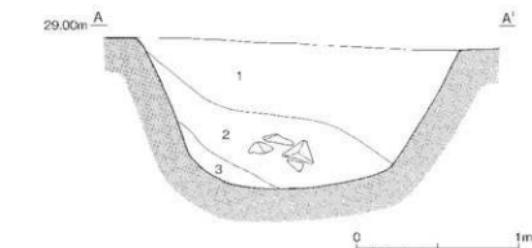
#### 6. SK-02 (第15図)

C-5区の標高28.75~29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は直な円形を呈し、現状での規模は上縁部径190~215cm、底部径120~123cm、深さ最大88.5cmを測る。中央部が浅く窪んだ底部より模面は斜め上方に向け真っ直ぐに立ち上がっている。この土坑を取り囲むように5つの小ピットが検出されている。規模も揃っており、埋土も灰褐色土層であった。何らかの上屋を想定することも可能である。小ピットの規模は長軸径で22~30cm、深さ最大13.4~46.5cm、柱穴間の距離は85~165cmを測る。SK-02出土の遺物としては第1層の灰褐色土層より土師器6点、須恵器13点、土師質土器4点が出土した。

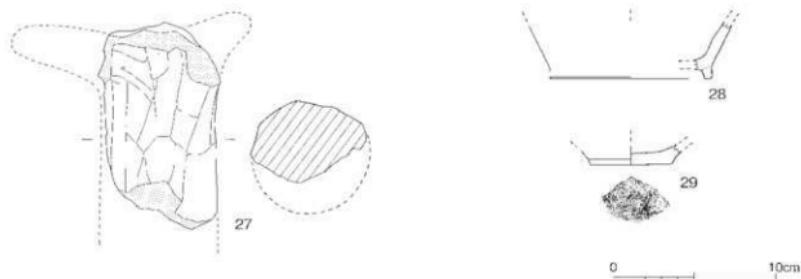
**SK-02出土遺物 (第16図27~29)** 27は土製支脚である。三方向に突起をもつタイプのものであり、強い縦方向のナデにより仕上げられている。28は須恵器底の破片である。高台が底部の外縁につき、体部は斜め上方に向け立ち上がる。高台径10.0cmを測る。29は土師質土器底部の破片である。底部外面は低い高台状を呈しており、底径は5.0cmを測る。



1. 灰褐色土層（礫多含む）  
2. 灰色粘土層（大礫含む）  
3. 2に地山ブロック含む層



第15図 SK-02実測図 (S=1/30)

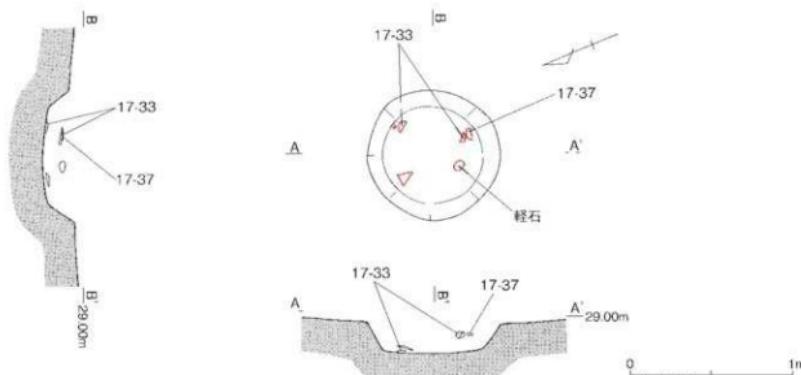


第16図 SK-02出土遺物実測図 (S=1/3)

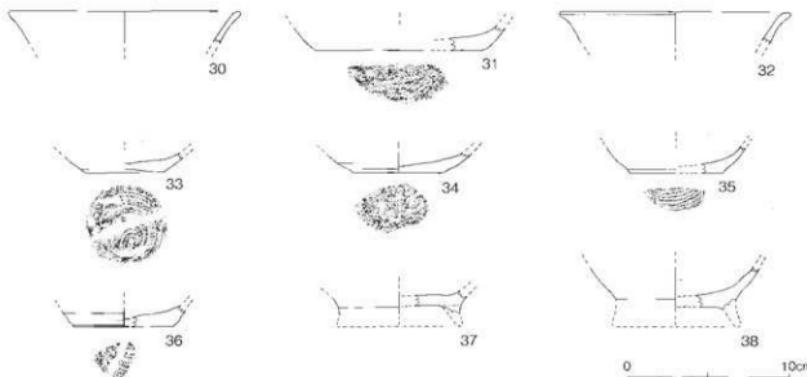
## 7. SK-03 (第17図)

C-4区の標高28.75~29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は円形を呈し、現状での規模は上縁部径80cm、底部径60cm、深さ最大20.7cmを測る。SK-04と切り合っており、新旧関係はSK-03(新) - SK-04(古)である。遺物は土師器24点、須恵器6点、土師質土器23点の他、明瞭な加工痕はないが、他地域から持ち込まれたと考えられる軽石1点が出土した。

**SK-03出土遺物 (第18図30~38)** 30・31は須恵器環である。30は逆「ハ」の字状に伸びる体部をもち、口縁部で外反する。口径14.2cmを測る。31は無高台の底部片である。小片のため径の復元は不正確であるが、10cm前後のものである。底部外面には糸切りの痕跡が観察できる。32~38は土師質土器である。32は外反する口縁部の破片であり、口径14.2cmを測る。33~36は無高台の底部片である。底径は33が4.8cm、34が5.4cm、35が5.6cm、36が6.0cmを測る。いずれも切り離しは糸切りと考えられるが、風化のためはっきりしないものもある。37・38は高台をもつ底部の破片である。高台先端を欠いており、高台径は不明である。



第17図 SK-03実測図 (S=1/30)



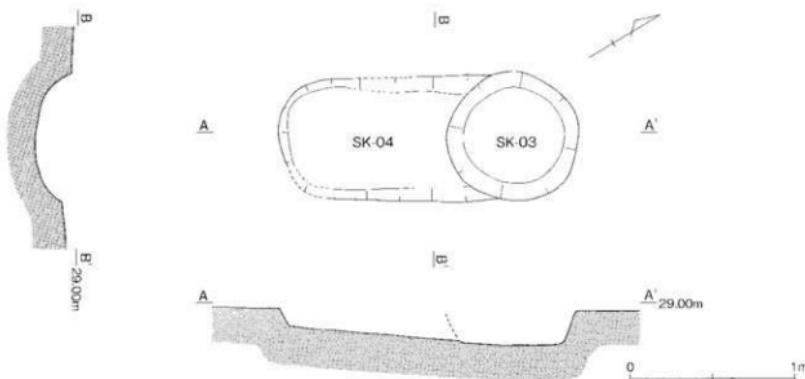
第18図 SK-03出土遺物実測図 (S=1/3)

## 8. SK-04 (第19図)

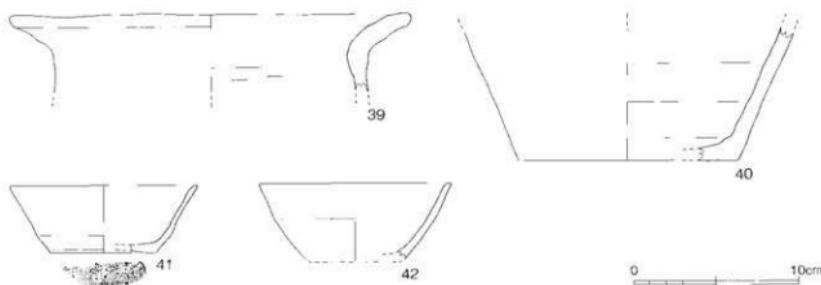
C-3・4区の標高28.75~29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は長方形を呈し、現状での規模は長辺148cm以上、短辺78cm、深さ最大20.7cmを測る。SK-03と切り合いで認められ、新旧関係はSK-03(新)→SK-04(古)である。また、位置関係からするとSB-02・PT3とSB-04・PT3と切り合っているようだが、現地調査時にピットを検出することはできなかった。遺物としては、土師器28点、須恵器8点、土師質土器10点が出土している。

土坑の時期は、出土した土師質土器が10世紀から12世紀前半にかけての特徴を持っていることより平安時代と考えられるが、詳細な時期は不明と言わざるを得ない。

**SK-04出土遺物 (第20図39~42)** 39は土師器の鍋であり、強く外反する厚手の口縁をもつ。厚みが不均一な粗製品であり、径の復元は不正確であるが、24cm前後のものである。40は平底を有する須恵器の壺である。平坦な底部より体部が斜上方に向けて真っ直ぐに伸びる。底部外面はナデ調整である。41・42は土師質土器である。41は無高台の壺であり、上げ底気味の底部より体部が逆「ハ」の字状に立ち上がり、体部下半に弱い膨らみをもつ。法量は口径11.4cm、底径5.6cm、器高4.1cmを測る。42も無高台の壺と考えられる。内湾気味に立ち上がる体部上半に弱い膨らみをもち、口縁端部は若干外反する。口径11.6cmを測る。



第19図 SK-04実測図 (S=1/30)

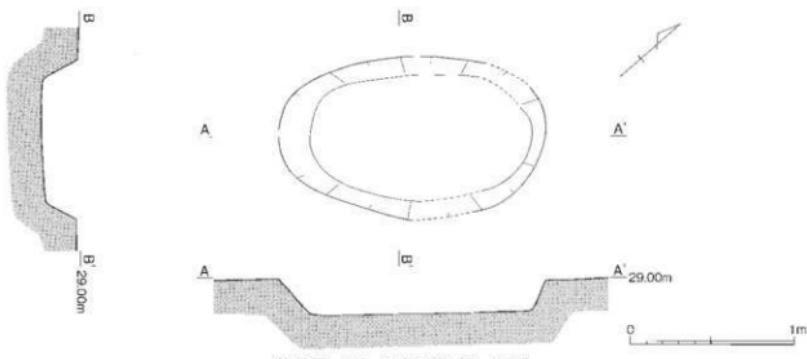


第20図 SK-04出土遺物実測図 (S=1/3)

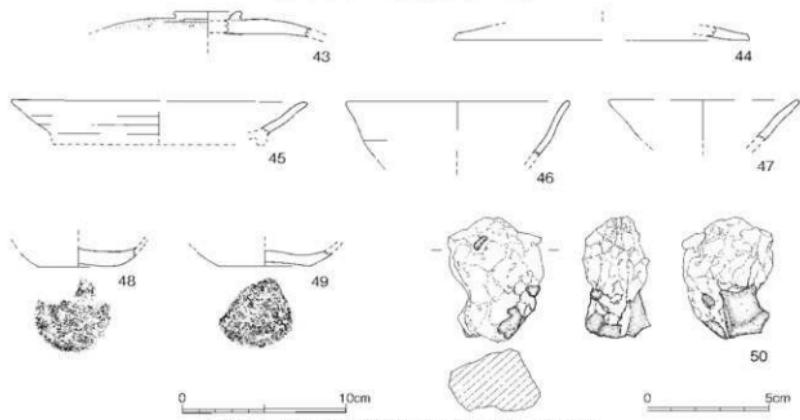
## 9. SK-05 (第21図)

C-3区の標高28.75~29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は楕円形を呈し、現状での規模は長軸162cm、短軸98cm、深さ最大20.9cmを測る。遺物としては、土師器40点、須恵器13点、土師質土器44点、鉄滓1点が出土している。

**SK-05出土遺物 (第22図43~50)** 43~45は須恵器である。43は輪状つまみをもつ壺蓋の破片であり、つまみ部径4.1cmを測る。44は壺蓋口縁部の破片であり、端部が僅かに下方に引き出されている。口径18.0cmを測る。45は皿である。逆「ハ」の字状に大きく開く体部をもち、口縁部で緩く外反する。底部外面には、高台が剥離した痕跡が残る。口径18.2cmを測る。46~49は上師質土器である。46は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。口径13.6cmを測る。47は先端が若干外方に折り曲げられている口縁部の破片。小片のため径は復元できなかった。48・49は無高台の底部片である。底部の切り離しは糸切りであり、底径は48が4.8cm、49が5.6cmを測る。50は鉄滓である。磁石には付着しない。重量50.5gを測る。



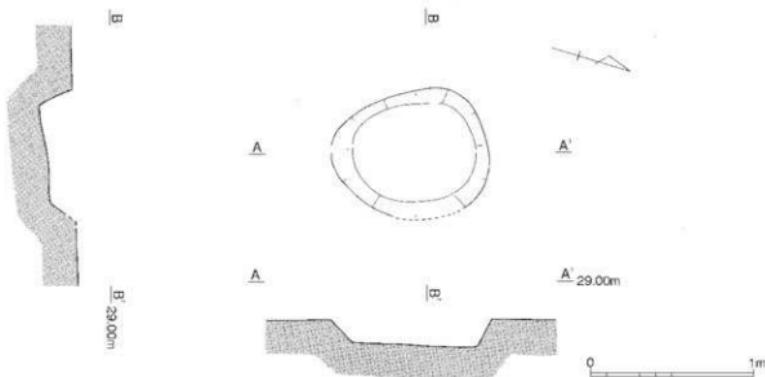
第21図 SK-05実測図 (S=1/30)



第22図 SK-05出土遺物実測図 (土器1/3・鉄滓1/2)

## 10. SK-06 (第23図)

B・C-7区の標高28.75~29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は形の崩れた楕円形を呈し、現状での規模は上縁部長軸97cm、短軸約78cm、深さ最大15.0cmを測る。遺物は出土していない。



第23図 SK-06実測図 (S=1/30)

## 11. ピット内出土遺物 (第24図51~60、第16表)

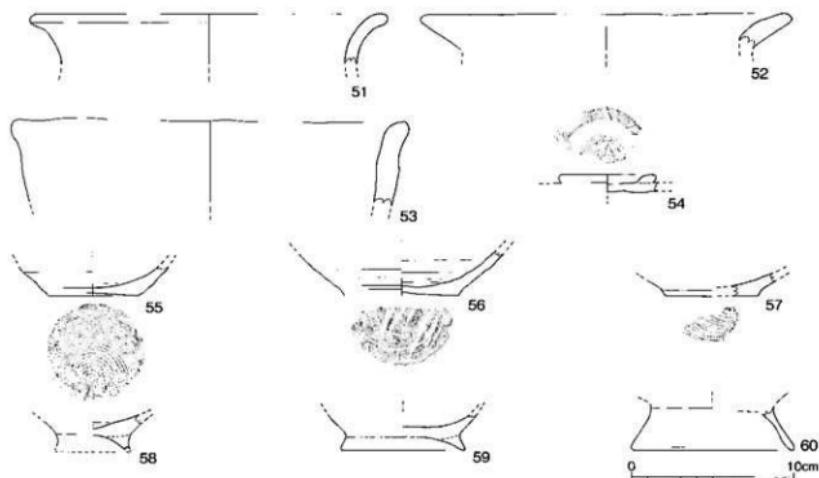
第1遺構面からは、掘立柱建物跡を復元することができなかつたピットが138個見つかっている。この内39個のピット内から遺物が出土しており、ここではこれらのピット内から出土した遺物を取り扱う。出土遺物の内訳は土師器68点、須恵器13点、土師質1器52点である。

51~53は土師器である。51は口縁部が外反するもので、甕・瓶・壺の類である。口径は小片のため復元できなかつた。B 4・5区のP16より出土した。52は口縁部が外方に向け大きく開くものであり、甕か鍋と考えられる。器壁の厚みが不均一な粗製品であり、歪みのため径の復元は不正確であるが、口径23cm前後のものである。外面には炭化物が付着しており、煮炊きに使用されたものと思われる。C 4・5区のP19より出土した。53は器種不明品である。胴部は開き気味に立ち上がり、口縁端部付近にアクセントを付け、若干外反する。器壁の厚みが不均一な粗製品であり、小片のため径の復元は困難であるが、25cmを超えるものである。C 5区のP33より出土した。

54は輪状つまみをもつ須恵器蓋であり、つまみ部径6.0cmを測る。ナデ調整のため判然としないが、つまみ部内に僅かに糸切りの痕跡が確認できる。A・B 2区のP1から出土した。

55~60は土師質上器底部の破片である。55~57は無高台のもの、58~60は高台をもつものである。55は内湾気味に立ち上がる体部下半に弱い膨らみをもつ。底径は5.5cmを測り、底部の切り離しには回転糸切りが施されている。C 5区のP32から出土した。56は斜め上方へ向け開き気味に立ち上がる体部を持つ。底径は7.0cmを測り、底部の切り離しは糸切りによる。B 6区のP35より出土した。57は体部が開き気味に立ち上がるものであり、底径は5.6cmを測る。底部の切り離しには回転糸切りが施されている。53と同じくC 5区のP33より出土した。58は高台径が小さなものであり、径は約4.6cmを測る。B・C 6区のP36より出土した。59は風化のため判然としないが、高台が

もう少し伸びるものかもしれない。現状での高台径は7.6cmを測る。C4区のP18より出土した。60は「ハ」の字状に広がる高台部の破片である。歪みのため径の復元は不正確であるが、高台径は10cm前後を測るものである。B3区のP9より出土した。

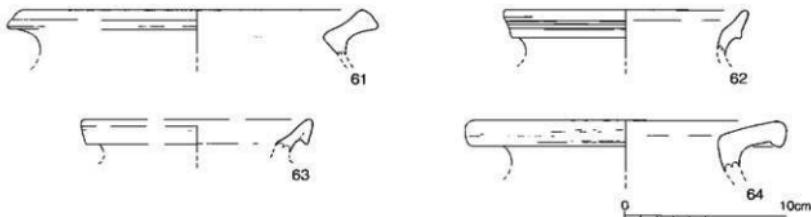


第24図 ピット内出土遺物実測図 (S=1/3)

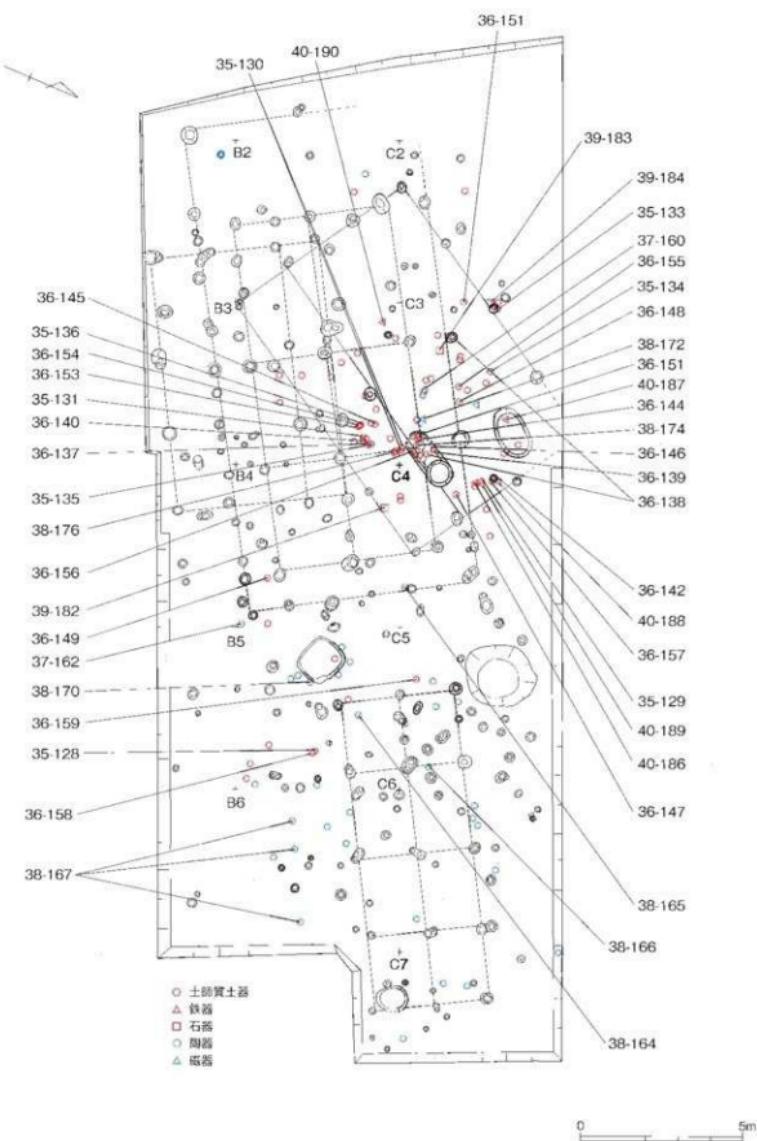
## 12. 遺構外出土遺物（第25図～第36図）

ここでは、掘立柱建物跡やピット検出面上に水平に堆積した褐色土層より出土した遺物を取り扱う。弥生土器も数点出土しているが、量的には土師器、須恵器、土師質土器が主体をなしている。

**弥生土器（第25図61～64）** 61は口縁部が強く屈曲して開く壺である。端部は若干肥厚され平坦面が形成されており、外面に1条の凹線が観察できる。口径22.4cmを測る。62は口縁部がやや外反気味に立ち上がる壺である。口縁部外面には浅い4条の凹線文が施されている。口径14.8cmを測る。63は壺か器台の破片である。単純口縁に粘土紐を貼り付け口縁段部を形成している。口縁部外面には2条の凹線文が観察できる。小片のため口径は不明である。64は壺、或いは壺と考えられる。口縁部が水平に近く大きく開き、端部は下方に拡張されている。拡張部分には凹線文が施されている。口径19.8cmを測る。時期はいずれも弥生時代後期前半のものと考えられる。

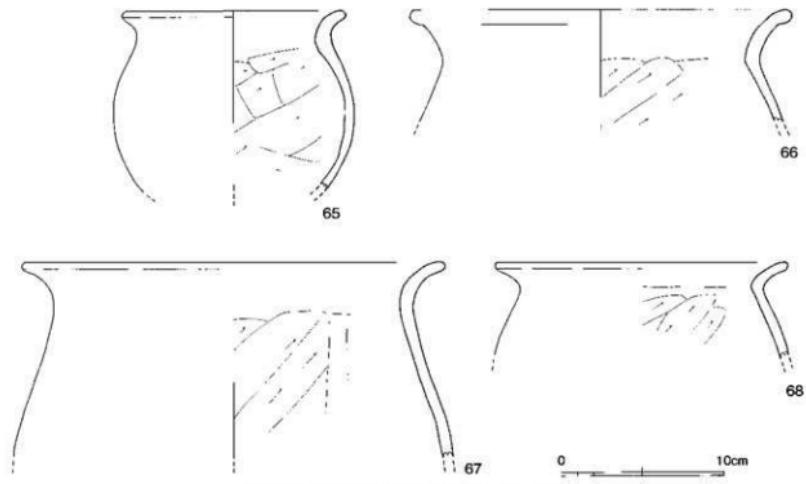


第25図 遺構外出土弥生土器実測図 (S=1/3)

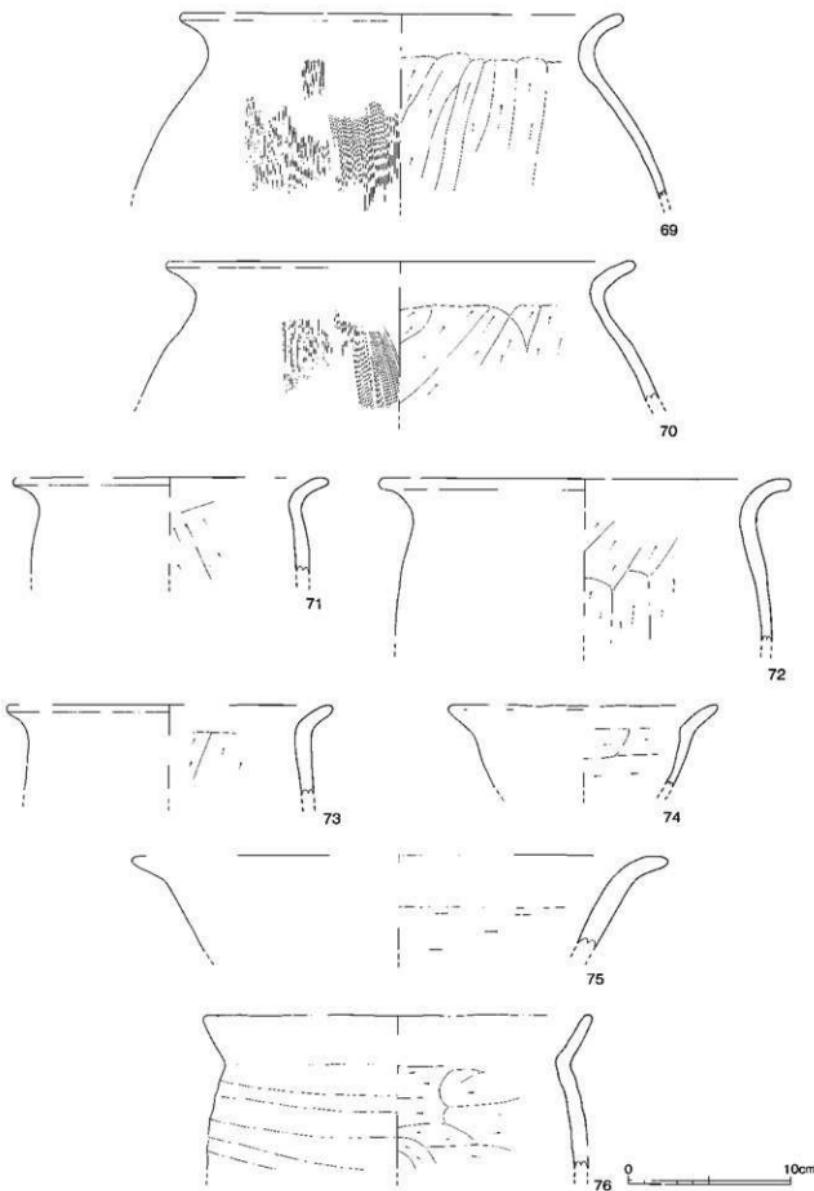


第26図 遺構外出土土師質土器・陶磁器・鉄・石器出土状況 (S=1/150)

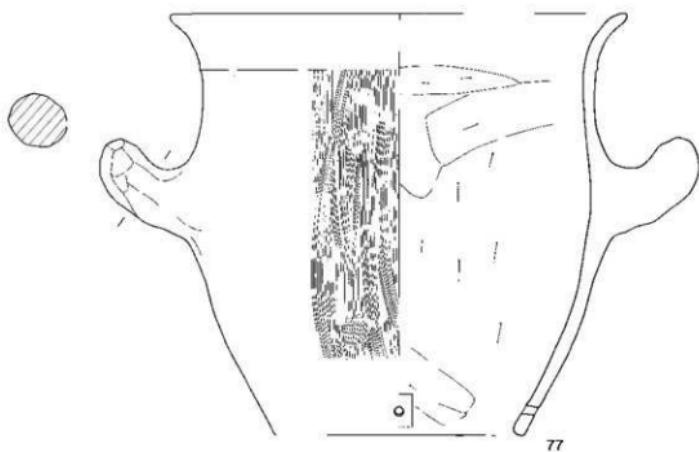
**土師器（第27～31図65～93）** 65は口径13.7cmを測るやや小型の甕である。球形のプロボーシヨンをもち、口縁部は外反する。66～70は外反する口縁をもち、胴部が口縁以上に張り出す甕である。調整は体部内面に縱方向のヘラケズリが施されている。口径は66が<sup>6</sup>23.4cm、67が<sup>6</sup>26.0cm、68が<sup>6</sup>17.9cm、69が<sup>6</sup>27.0cm、70が<sup>6</sup>28.6cmを測る。69・70の外面には縱方向のハケメが観察できる。71～76は外反する口縁をもち、胴部の張り出しが口縁以上にならないものであり、甕か鍋と考えられる。調整は71～73が体部内面に縱方向のヘラケズリ、74～76が横方向のヘラケズリが施されている。体部外面にハケメは観察できなかった。口径は71が<sup>6</sup>19.0cm、72が<sup>6</sup>24.8cm、73が<sup>6</sup>19.6cm、74が<sup>6</sup>16.4cm前後、75が<sup>6</sup>32.6cm、76が<sup>6</sup>23.4cmを測る。76は厚みの不均一な粗製品であり、作りが雑な印象を受ける。77～80は甕である。77は体部が内湾気味に立ち上がり口縁部で緩く外反する。底部付近には径6mmの貫通孔が認められ、体部中央よりや上には、牛角状の把手が取り付けられている。調整は口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、体部外面には縱方向のハケメが施されている。法量は口径27.9cm、底径15.1cm、器高25.9cmを測る。78・79は把手部分の破片である。80は底部の破片であり、底に近い位置に径6mmの貫通孔が認められる。底径14.4cmを測る。81～86は上製支脚である。81・82は上端部の破片であり、三叉突起タイプのものである。83～86は底部の破片であり、上げ底を呈する。底径は83が<sup>6</sup>12.4cm、84が<sup>6</sup>12.6cm、85が<sup>6</sup>11.0cm、86が<sup>6</sup>11.0cmを測る。87～91は移動式の甕である。87は口縁から胴部、88は底部背面、89～91は焚口外縁部の破片である。87の口径は30.8cmを測る。92は製塙上器である。体部は開き気味に立ち上がり、口縁付近で内湾し、端部を内側に括れさせている。外面とも丁寧なナデ仕上げである。口縁部が正なため径の復元は不正確であるが、10cm前後のものである。93は土師質の擂鉢破片である。色調はにぶい黄橙色を呈し、軟質である。3～4mmの間隔で6本の条溝が観察できる。この擂鉢は、14世紀後半以降に当地においても備前焼の擂鉢が流通し始めると次第にその姿を消していく。



第27図 遺構外出土土師器実測図 (S=1/3)



第28図 遺構外出土土師器実測図 (S=1/3)



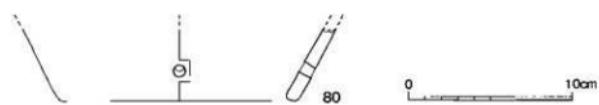
77



78

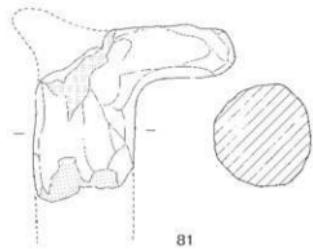
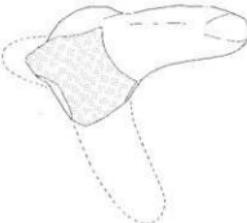


79

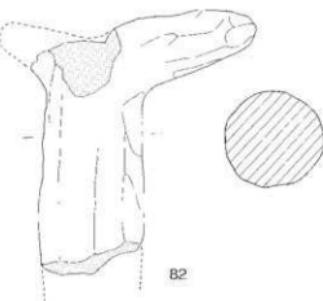


0 10cm

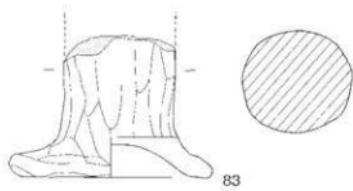
第29図 遺構外出土土器実測図 ( $S=1/3$ )



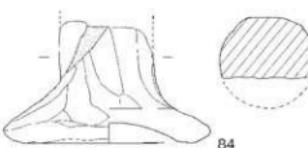
81



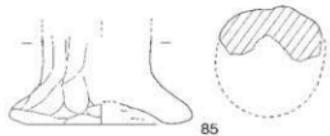
82



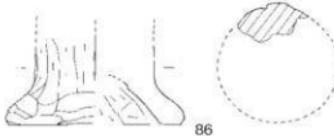
83



84



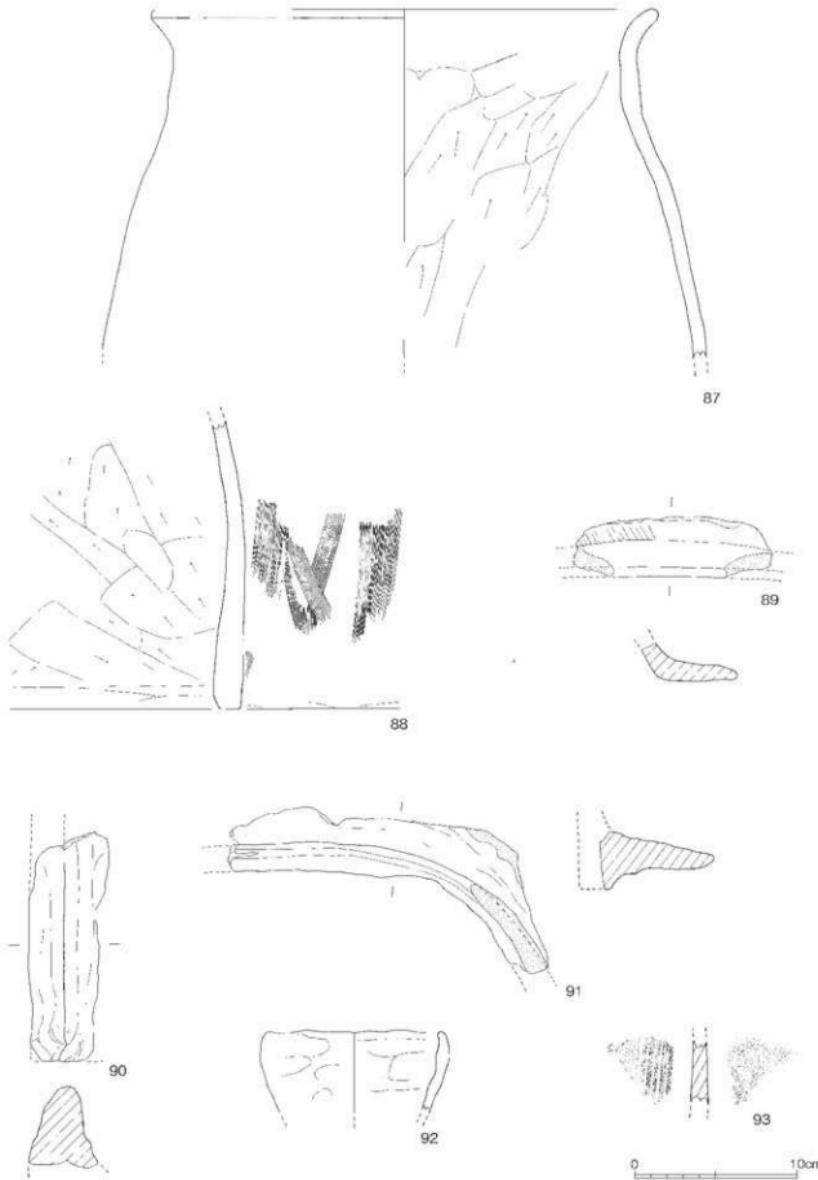
85



86

0 10cm

第30図 遺構外出土土師器実測図 (S=1/3)

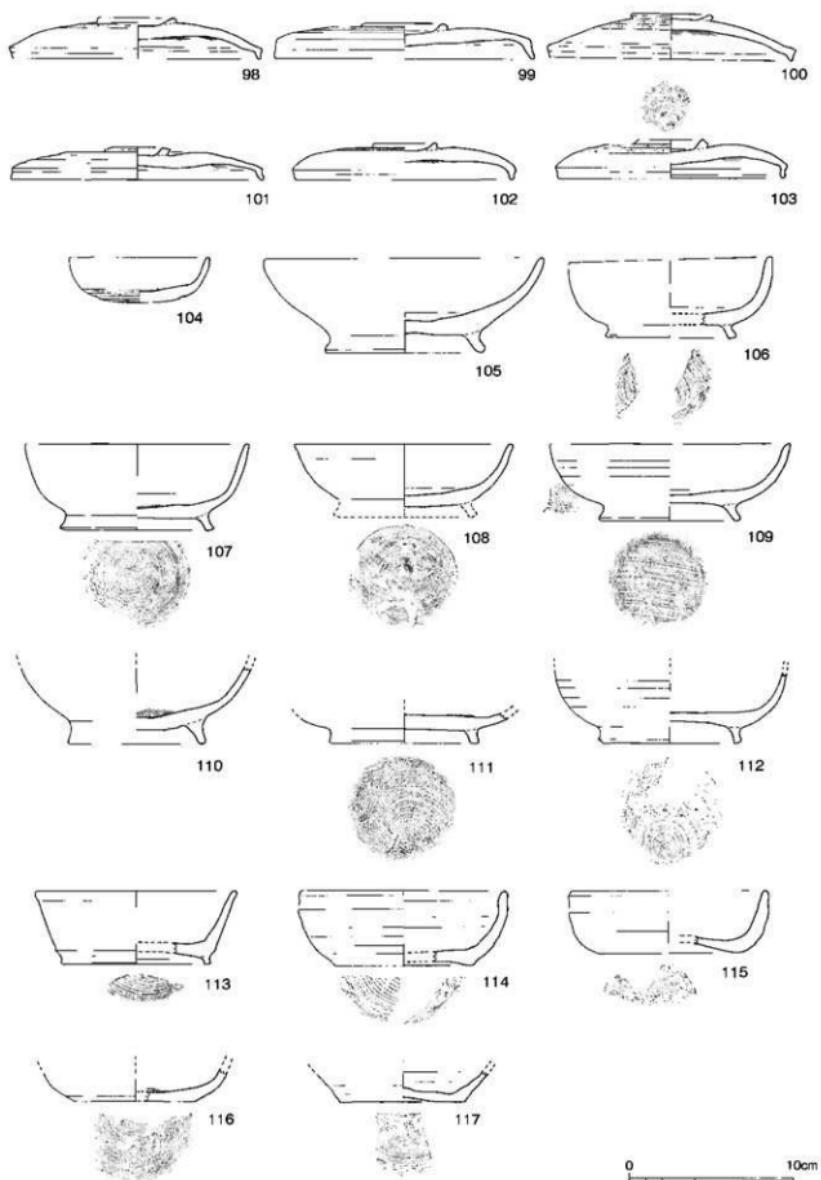


第31図 遺構外出土土師器実測図 ( $S=1/3$ )

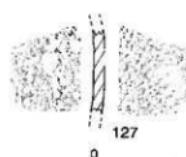
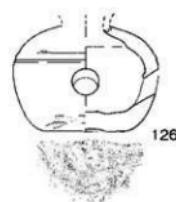
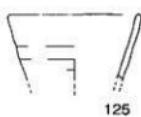
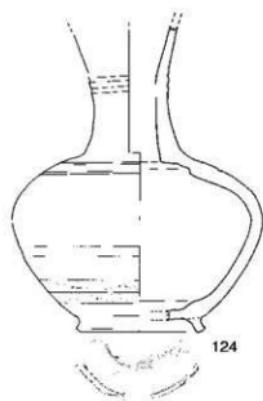
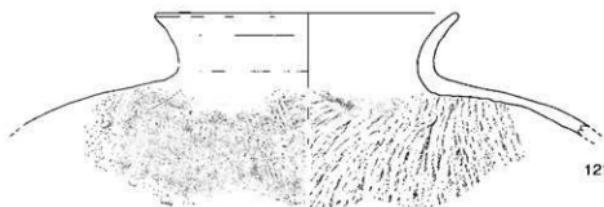
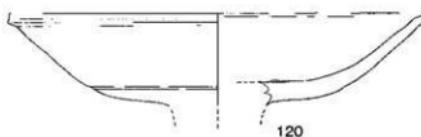
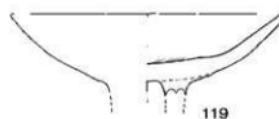
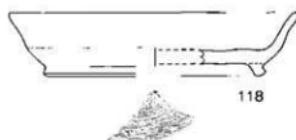
須恵器（第32～34図94～127） 94～97は口縁端部内面にかえりをもつ坏蓋である。この内94～96は頂部に輪状つまみをもつ。つまみ部内面は丁寧なナデ調整が施されており、糸切りをもつものかどうかは判らない。97のつまみ部は、宝珠形のつまみが押しつぶされたような形を呈する。時期は高広ⅢA・B期に含まれるものであり、7世紀中頃から8世紀前半代と考えられる。98～103は口縁端部が下垂し、頂部に輪状つまみをもつ坏蓋である。103のつまみ部内面には糸切り痕が観察できるが、その他のものについては中心部までナデが施されており、不明と言わざるを得ない。高広ⅢB期に含まれるものであり、7世紀末から8世紀前葉のものと考えられる。104は坏身とした。やや丸みをもつ底部より体部が内湾気味に立ち上がり、口縁は斜上方に向かって伸びる。底部外面には回転ヘラケズリが施されている。口径は8.5cmを測る小型のものである。高広ⅡB期に相当し、7世紀前葉から中葉頃と考えられる。105～109は体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部に「ハ」の字状の高台がつく坏身である。底部の切り離しは、105がヘラ切り、106・107が回転糸切り、108・109が静止糸切りである。坏蓋94～103に伴うものであろう。110～112も同様の坏底部と考えられる。底部の切り離しは、110がヘラ切り、111・112が回転糸切りである。113は体部が直線的に外傾して伸びる坏身であり、底部端に低い高台が貼り付けられている。底部の切り離しは回転糸切りによる。高広Ⅳ・V期に同様の形態のものがあり、8世紀から9世紀代と考えられる。114・115は体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がる無高台の坏身であり、底部外面に回転糸切りが施されている。高広ⅣA期に相当し、年代は概ね8世紀代と考えられる。116は同様の坏底部と考えられる。底部の切り離しは回転糸切りである。117は上げ底気味の底部より体部が直線的に外傾して伸びるものであり、無高台の坏身と思われる。底部外面には回転糸切りが施されている。118は高台付の皿である。平坦な底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反し端部を丸くおさめる。底部外面には回転糸切りが施されている。高広ⅣA・B期に同様の形態のものがあり、8世紀から9世紀代と考えられる。119・120は高坏受部の破片である。119は口縁部が内湾気味に緩やかに開き、坏部は浅い。120は口縁が大きく開き、端部付近で屈曲し先端は上下に肥厚され凹面をもつ。121は壺口縁部の破片、122は小型の壺甌類口縁部の破片である。123は胴部に突帯の巡る壺である。124は底部に高台をもつ長頸瓶である。頸部と肩部に2条の沈線が巡り、底部の切り離しは糸切りによる。時期は高広ⅢB期に相当し、7世紀末から8世紀前葉頃と考えられる。125は斜上方に向かって立ち上がる壺口縁の破片である。126は平底の壺である。肩部に2条の沈線が巡り、底部付近には僅かにヘラケズリが観察できる。底部外面には「×」のヘラ記号が施されている。大谷編年の壺A7・8型に相当する。127は中世須恵器の壺甌類胴部片である。5点が出土しており、この内1点を図示した。調整は外面に格子状のタタキをもち、内面はナデである。胎上は2mm前後の砂粒を含み、焼成は不良である。



第32図 遺構外出土須恵器実測図 (S=1/3)



第33図 遺構外出土須恵器実測図 (S=1/3)

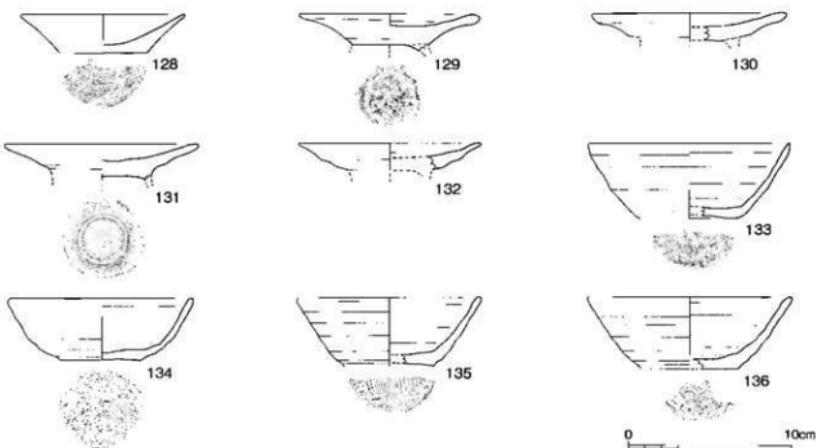


0 10cm

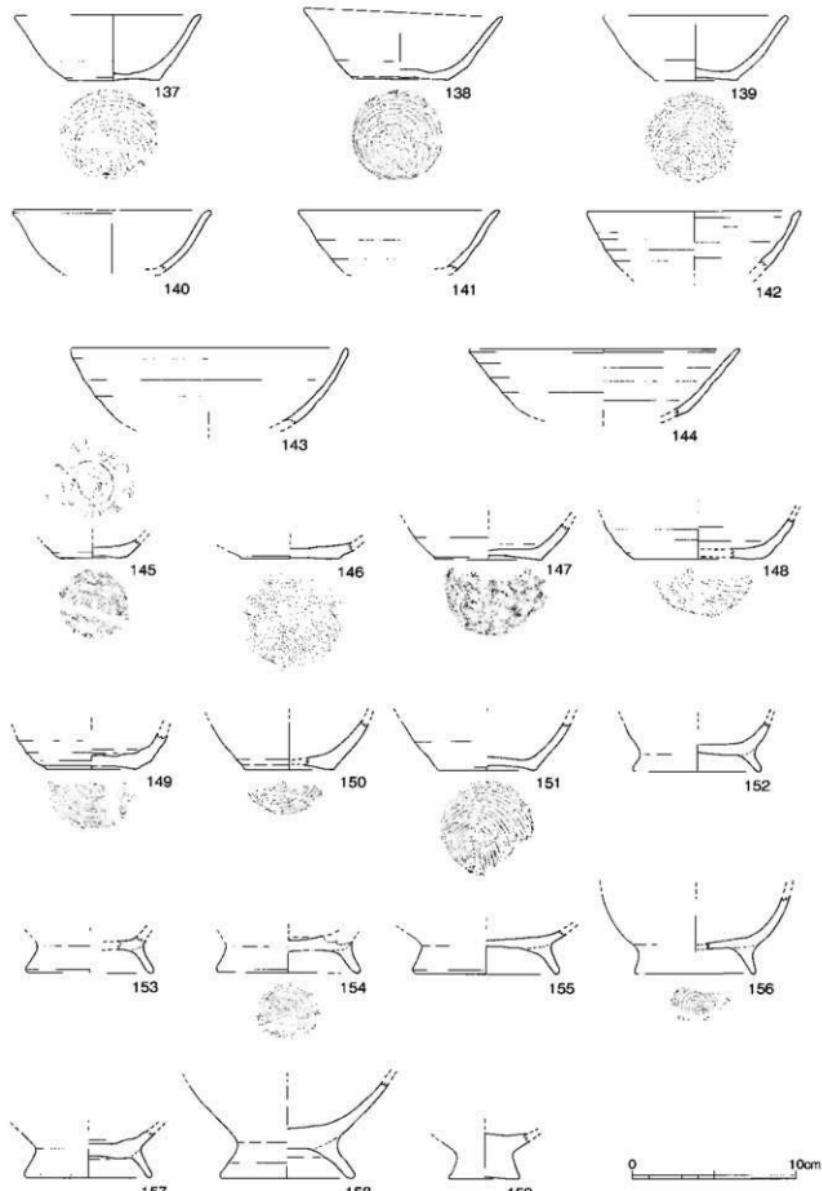
第34図 遺構外出土須恵器実測図 (S=1/3)

**土師質土器 (第35・36図128~159)** 底部に糸切りをもつ中世土師器を便宜的に土師質土器とした。128は無高台の皿である。半円な底部より体部が逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁に向かって細りする。口径10.5cm・底径5.3cm・器高2.3cmを測る。129~132は高台をもつ皿である。体部が横方向に大きく開き受部は浅い。口径は129が11.0cm、130が11.9cm、131が11.8cm、132が11.1cmを測る。133~139は壺である。133は上げ底気味の底部より体部が斜上方へ向け真っ直ぐに伸びる。口径12.2cm・底径6.0cm・器高4.7cmを測る。134は低い高台状となる底部より体部が内湾して立ち上がり、端部へ向けては開き気味に伸びる。口径11.3cm・底径4.8cm・器高3.8cmを測る。135~136は低い高台状の底部より体部が斜上方へ向け真っ直ぐに伸び、端部を丸くおさめる。法量は135が口径11.3cm・底径5.5cm・器高4.2cm、136が口径13.5cm・底径5.8cm・器高4.4cmを測る。137~139は低い高台状の底部より体部が内湾気味に立ち上がり、口縁付近で緩く外反して端部に至る。回転ナデによる凸凹痕は目立たない。法量は137が口径11.4cm・底径5.6cm・器高4.0cm、138が口径12.1cm・底径5.6cm・器高4.1cm、139が口径11.2cm・底径5.5cm・器高4.0cmを測る。140~144は口縁部の破片である。140・141は体部が内湾気味に立ち上がり、先端へ向け緩く外反して端部に至る。前述の137~139と同形態のものと考えられる。口径は140が12.1cm、141が12.2cmを測る。142・143は体部が内湾気味に立ち上がり口縁に至る。口径は142が13.0cm、143が17.0cmを測る。144は口縁部が斜上方に向け真っ直ぐに伸びるものである。口径は16.6cmを測る。145~151は無高台の底部片であり、底径は145が4.1cm、146が6.2cm、147が6.4cm、148が6.8cm、149が5.5cm、150が5.4、151が5.8cmを測る。145の内面は黒褐色を呈する。152~158は高台をもつものであり、「ハ」の字に開くやや長めの高台が貼り付けられている。高台径は152が7.5cm、153が7.8cm、154が8.6cm、155が9.0cm、156が7.2cm、157が7.7cm、158が8.0cmを測る。152の内面は黒褐色を呈する。159は台付きのものである。小型品で底部径4.4cm、脚部高2.7cmを測る。

これら土師質土器の年代は、時期幅は考えられるものの10世紀から12世紀前半の中に含まれるものである。よって、平安時代と考えられるが詳細な時期は不明と言わざるを得ない。



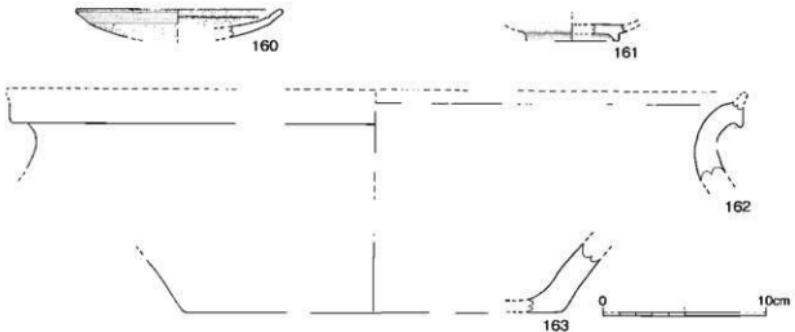
第35図 遺構出土土師質土器実測図 (S=1/3)



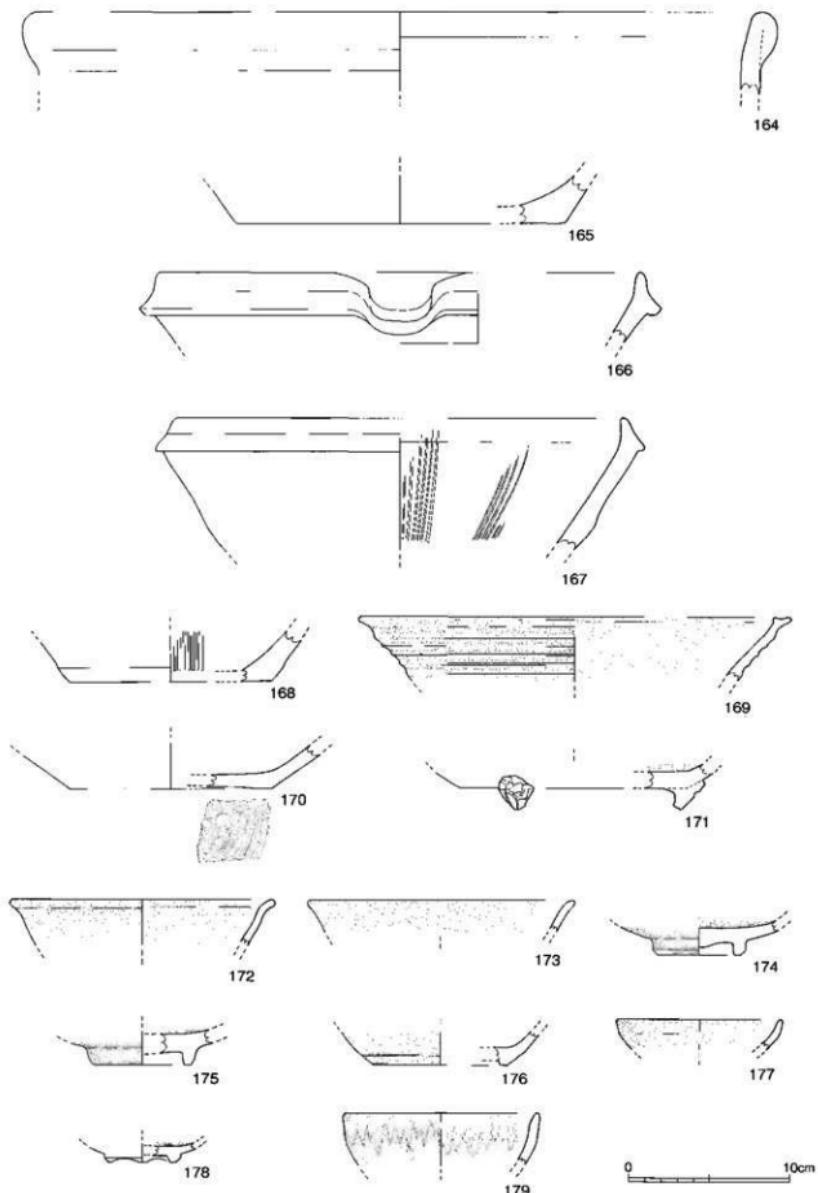
第36図 遺構出土土師質土器実測図 (S=1/3)

**国産陶器**（第37・38図160～171） 160は口縁部付近が屈曲する緑釉陶器の皿であり、端部に切り込んでつくるタイプの輪花が施されている。胎上は硬質の須恵質で灰色を呈し、濃緑色の釉薬が均一に塗布されている。東海系のものであり、時期は9世紀末から10世紀初頭と考えられる。161は緑釉陶器皿底部の破片である。「ハ」の字状に聞く高台が貼り付けられており、濃緑色の釉薬が全面に施されている。160と同一個体と考えられる。県東部（出雲地域）での緑釉陶器の出土は19遺跡<sup>110</sup>81点が報告されている。162・163は壺器系陶器である。162は壺の口縁部であり、いわゆるN字状口縁を呈する。常滑焼の編年では6a型式に比定されているものである。13世紀か。163は平底を有する壺底部の破片である。164～168は備前焼である。壺164は赤焼けの個体である。口縁部は垂直に近く立ち上がり、内面が外方に緩く屈曲する。端部は折り曲げられ玉縁状を呈するが、だれて扁平となっている。乘岡編年の中世4期に含まれるものであり、15世紀前葉～15世紀中葉と考えられる。165は平底を呈する壺類底部の破片である。166は擂鉢の片口部分の破片である。時期は15世紀頃と考えられる。167は擂鉢の口縁部であり、内面には7本1組の放射クシ口条線が刻まれている。乗岡編年の中世4期に含まれるものである。168は擂鉢底部の破片である。169～171は瀬戸・美濃の深皿と考えられる。169は大きく聞き気味に立ち上がり、口縁部は内外につまみ出され凹面を形成する。内外面にオリーブ黄色の釉薬が施されている。170は底部の破片である。平底の底部より体部が大きく開いて立ち上がる。切り離しは糸切りであり、釉薬は観察できなかった。171は底部と体部の境にボタン状の脚が貼り付けられている。外面は無釉であり、内面の一部にオリーブ黄色の釉薬が観察できる。

**貿易陶磁器**（第38図172～179） 172・173は青磁碗の口縁部の破片である。口縁部が外反するものであり、上田D類に相当する。<sup>114</sup>14～15世紀頃のものと考えられる。174・175はしっかりとした高台をもつ青磁碗底部である。内面見込み部分には印花文が施され、高台外面まで釉がかかり、疊付けを含めて外底は無釉である。14～15世紀頃のものと考えられる。176は基衝底を有する青磁碗底部の破片である。外面の底部付近に1条の沈線が巡る。177・178は白磁の皿である。177は丸みをもって立ち上がる口縁部の破片である。178は体部下半部を露胎にしたものであり、見込みに胎上目状の痕跡が残る。高台裏には挟りを入れ、波状を呈すもので森III群に相当する。15世紀代と考えられる。179は中国製黒釉陶器碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で屈曲させ端部は外反する。16世紀初頭までのもの。

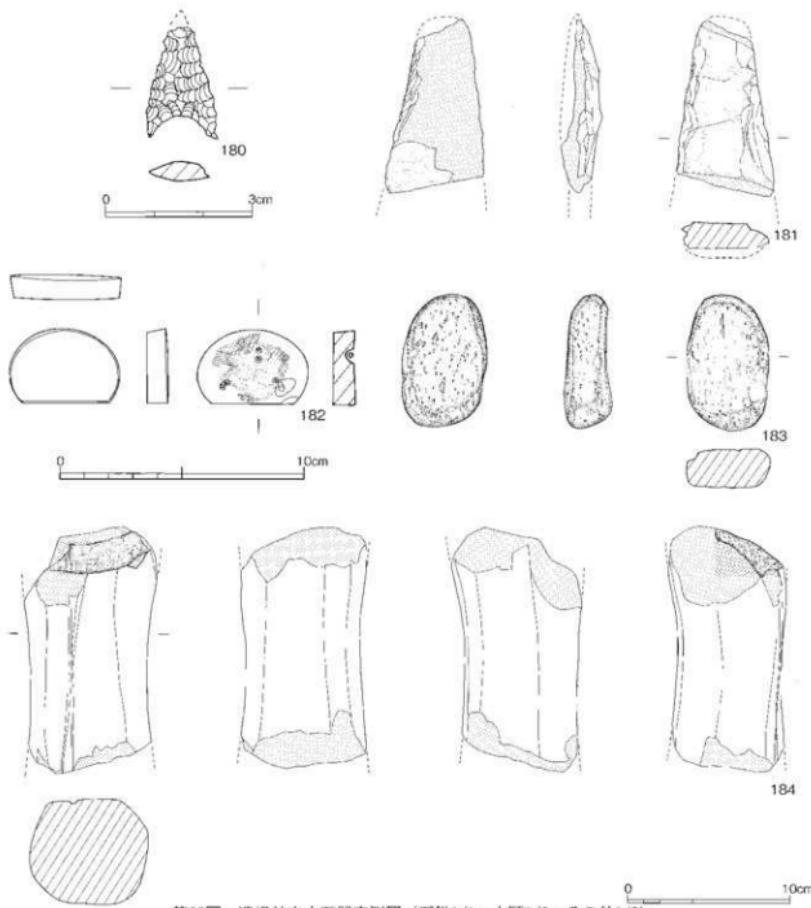


第37図 遺構外出土国産陶器実測図 (S=1/3)



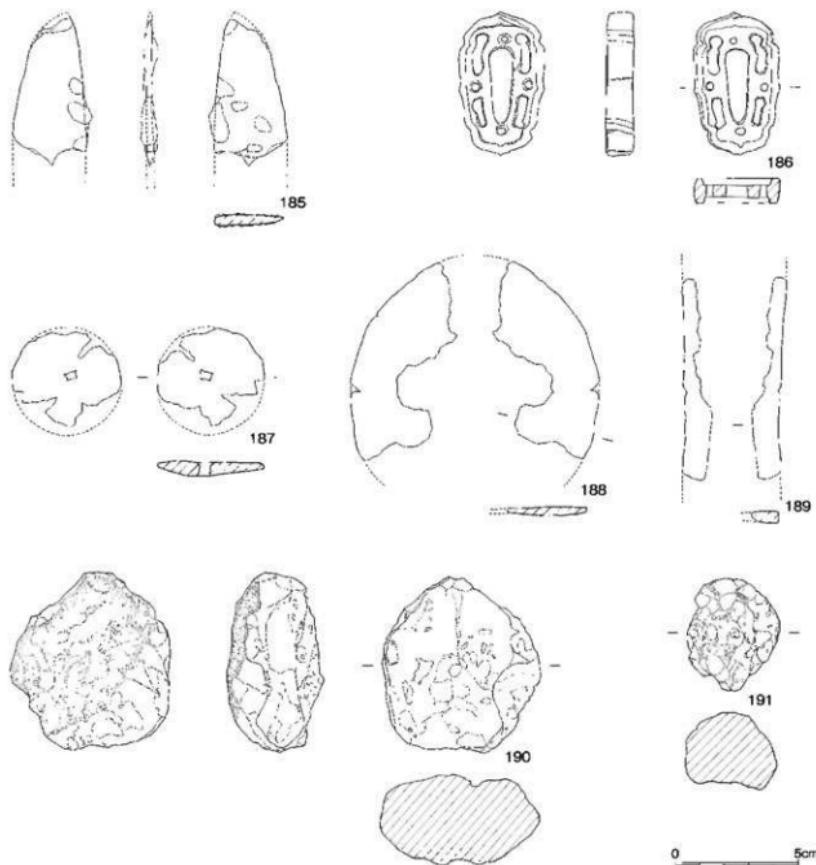
第38図 通横外出土国産陶器・貿易陶磁器実測図 (S=1/3)

石器（第39図180～184） 180は黒曜石製の凹基無茎式の石錐である。181は打製石斧である。主に剥離面を大きく残し、縁辺には比較的丁寧な二次加工が施されている。石材は流紋岩である。182は石製丸鞘である。平面形は楕円形の下部を直線的に切った形状を呈する。表面と側面は非常に丁寧に研磨されているが、裏面は所々に擦痕が残り、研磨されていない部分も見られる。潜り孔は径1.2mmを測り、裏面の3箇所に開けられている。法量は、表面よりも裏面側が若干大きく仕上げられており、表面側が縦21.19mm、横43.98mmであり、裏面側が縦30.32mm、横45.31mm、厚さは8.13～9.21mm、重量24.9gを測る。石材は無斑品質流紋岩またはトカライトであり、色調は暗灰色を呈する。現在の所、県東部（出雲地域）での柵帯の出土は13遺跡15点が報告されている。183は多孔質の軽石である。明瞭な加工痕はないが、表裏は側面に比べるとやや摩滅しているようである。184は砥石である。側辺部が使用されており、よく利用された面は凹レンズ状に痙攣している。



第39図 遺構外出土石器実測図（石錐1/1・丸鞘1/2・その他1/3）

鉄器・鉄滓（第40図185～191） 185は大刀の切先と考えられる。一方に刃部を付け断面は三角形を呈する。残存長6.0cm、幅最大3.2cm、厚さ最大0.6cm、重量12.1gを測る。186は鍔である。四隅に括れをもち、四方には鋭い稜角が作り出されている。内面には丸と棒状の透かし文様が施されており、外輪部は一段厚く仕上げられている。大きさの割に厚く、長さ5.8cm、幅3.5cm、厚さ1.1cm、重量48.5gを測る。磁石には付着しない。時期は平安時代のものと思われる。187は紡錘車と考えられる。円盤部の径は4.35cmを測り、中央には角孔が開けられている。厚さ最大0.6cm、重量11.5gを測る。188は薄い円盤状の不明品であり、正円のものとして復元すると直径約11.4cmとなる。厚さ0.4cm、重量11.6gを測る。189は棒状の不明品である。残存長8.2cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量4.5gを測る。190は楕形鍛冶滓である。底部には砂粒の付着が認められる。磁石には付着しない。181.8gを測る。191は鉄滓である。磁石には付着しない。重量は42.3gを測る。



第40図 遺構外出土鉄器実測図 (S=1/2)

## 第2節 第2遺構面の調査

前述の第1遺構面の床面からは多数の遺物が顔を覗かせていたことから、更に掘削を進めたところ溝4本（SD-01～SD-04）と土坑1個（SK-07）を検出した。これらの溝は複雑に切り合っているようだが、埋土はいずれも暗褐色土層であった。また、それぞれの溝から出土した遺物が接合できた。これらの状況から溝は自然に埋まつたものではなく、ある時期に埋め立てられた整地層と考えられる。このため、遺物は「6. 整地層出土遺物」としてまとめて取り扱った。遺物の中には第1遺構面褐灰色土層から出土したものと接合できるものも数多くみられた。整地層から出土した遺物は土師器・須恵器が主体であり、第1遺構面褐灰色土層から多数出土している土師質土器は細片が数個出土しただけである。また、陶磁器は出土していない。

### 1. SK-07（第41図）

調査区の標高28.60mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は円形を呈し、現状での規模は直径160cm、深さ最大47.8cmを測る。丸みをもった底部より、平滑な壁面が緩やかに立ち上がっている。SD-02と切り合っているが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

### 2. SD-01（第41図）

調査区の標高29.00mを測る位置で検出された溝である。ほぼ南-北方向に伸びるものであり、南側は二股に別れて調査区外へ向け更に続いている。或いは2本の溝が重なっている可能性も考えられる。検出した範囲での規模は長さ8.92m、幅0.68～2.88m、深さ最大37.7cmを測る。溝底部での標高は、南側が高く、北側が低い。

### 3. SD-02（第41図）

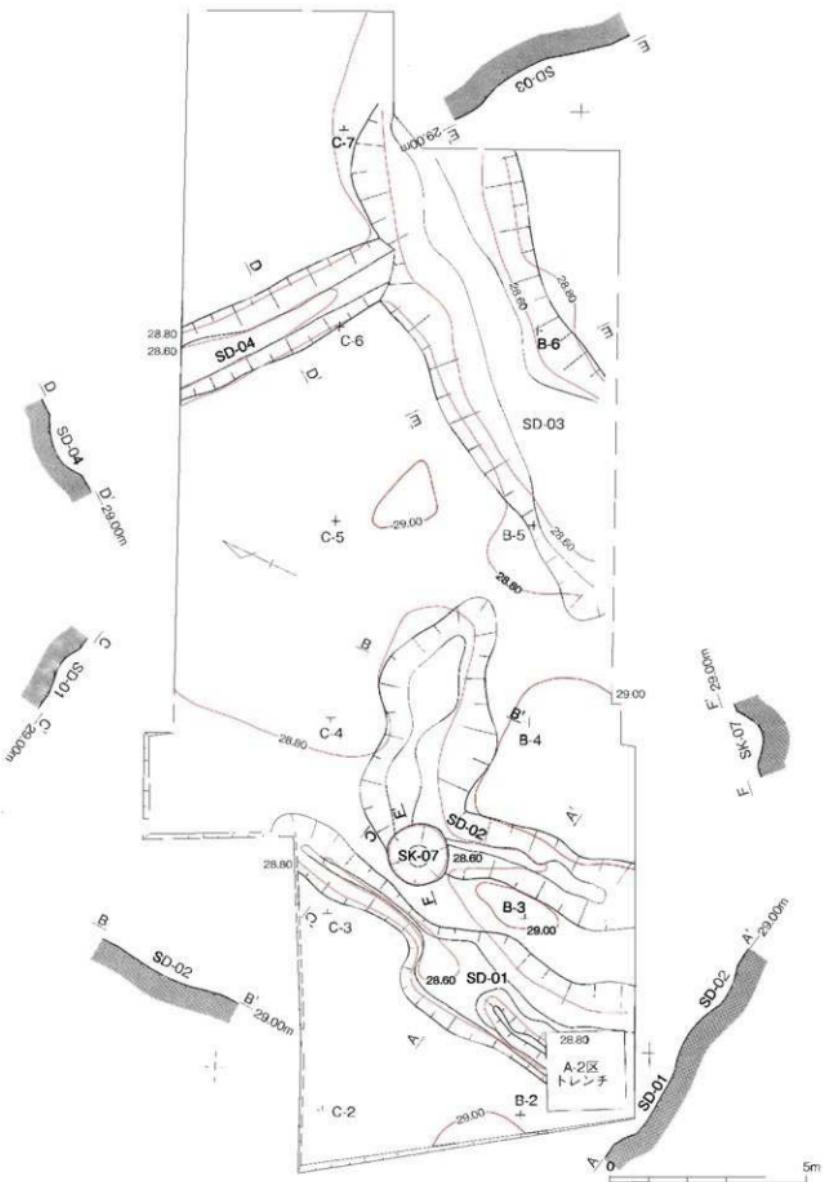
調査区の標高29.00mを測る位置で検出された溝であり、調査区外の南側に向かって更に続いている。SD-01とほぼ平行するように南-北方向に向け伸びた後、中途で直角に近く折れ曲がりSD-03の流れる東側に向きを変えている。或いは、真っ直ぐな2本の溝が直角に重なっている可能性も考えられる。検出した範囲での規模は長さ約12.8m、幅1.58～2.76m、深さ最大32.2cmを測る。溝底部での標高は「く」の字に折れ曲がっている部分が低く、南側と東側が高い。後述のSK-07と切り合っている部分が最も低く、現状ではここに流れ込む格好になっている。SK-07との新旧関係は不明である。

### 4. SD-03（第41図）

調査区の標高28.80mを測る位置で検出された溝であり、調査区外に向かって更に続いている。南西-北東方向に向け伸びるものであり、検出した範囲での規模は長さ14.18m、幅3.43～4.07m、深さ最大41.2cmを測る。溝底部での標高は、南西側が高く、北東側が低い。SD-04と切り合っているが、新旧関係は不明である。

### 5. SD-04（第41図）

調査区の標高28.80mを測る位置で検出された溝であり、調査区外の北西側に向かって更に続いている。北西-南東方向に向け真っ直ぐに伸びるものであり、検出した範囲での規模は長さ6.20m、幅1.53～1.84m、深さ最大29.1cmを測る。溝底部での標高は、南東側が高く、北西側が低い。SD-03と切り合っているが、新旧関係は不明である。

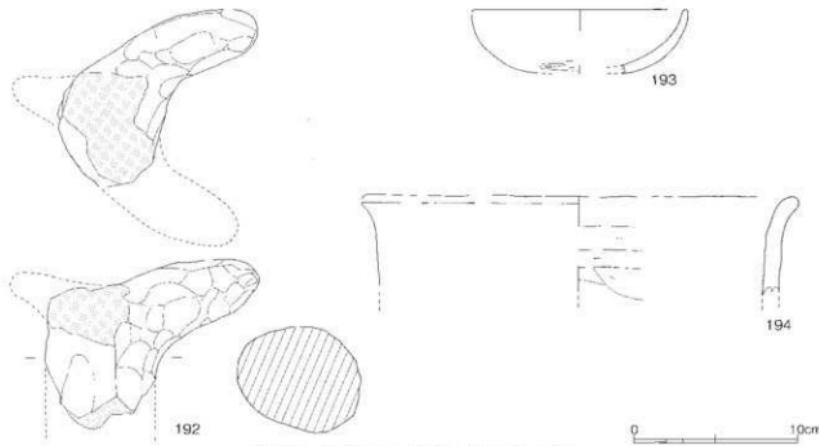


第41図 第2遺構面遺構位置図 (S=1/125)

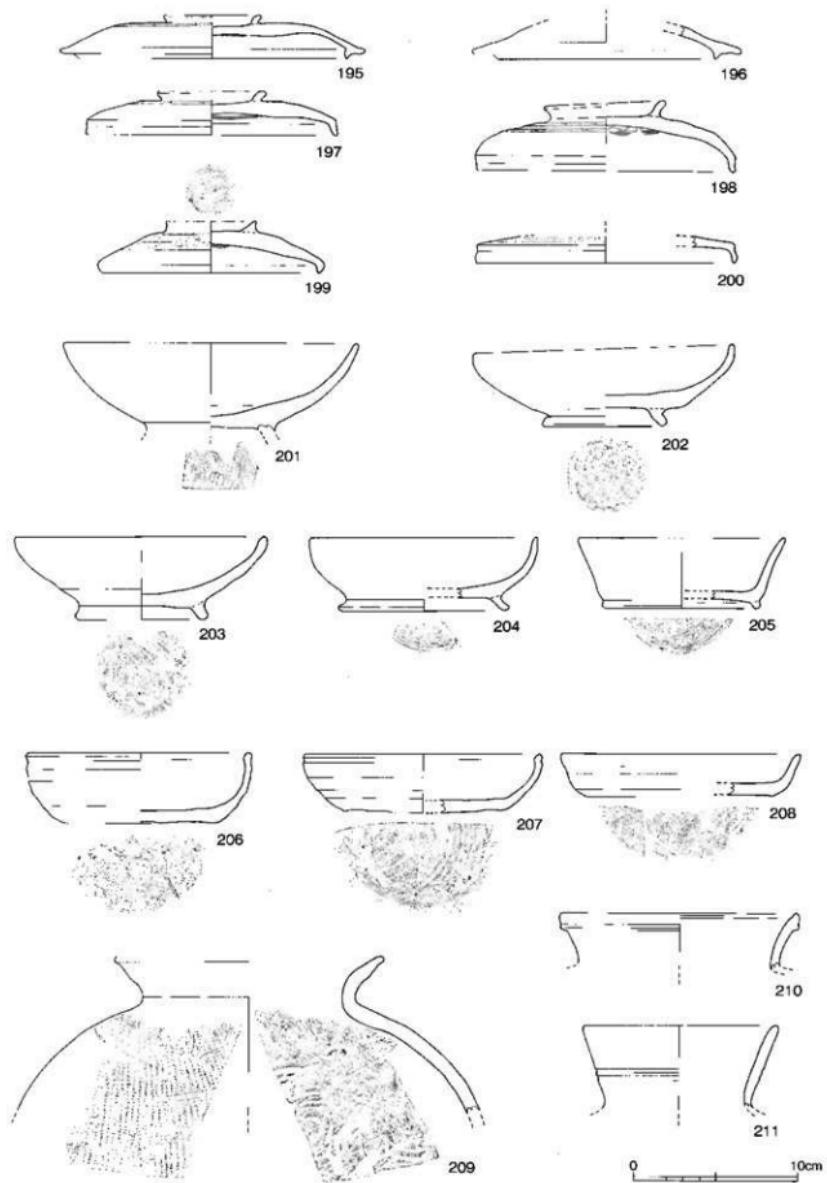
## 6. 整地層出土遺物（第42図～第44図）

**土師器（第42図192～194）** 192は上製支脚である。三叉突起タイプのものであり、表面に強いナデ調整が施されている。193は坏である。浅い楕形を呈し、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。194は器種不明品である。体部が垂直に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。調整は体部外面が横方向のナデ、内面に横方向のヘラケズリが施されている。小片のため径の復元は不正確だが、口径26cm前後のものである。

**須恵器（第43図195～211）** 195・196は口縁端部内面にかえりをもつ坏蓋である。195は天井部に輪状つまみをもつ。つまみ部の内側にはナデが施されており、糸切りをもつものか判らない。時期は高広ⅢA・B期に含まれるものであり、7世紀中頃から8世紀前半代と考えられる。197～200は口縁端部が下垂する坏蓋である。197～199は頂部に輪状つまみをもつ。199の切り離しには静止糸切りが施されているが、197・198は丁寧なナデのため糸切りをもつものは判らない。時期は高広ⅢB期頃のものである。201～204は体部が丸みをもちらがら曲線的に立ち上がり、底部には直立気味か、ハの字状の高台がつく坏身である。坏蓋195～200に伴うものであろう。底部外面の調整は201・202がナデのため不明。203が静止糸切り、204が糸切りである。201・202の高台内にはヘラ記号が施されている。205は体部が直線的に外傾して伸びる坏身であり、底部端に低い高台が貼り付けられている。底部外面の切り離しは糸切りによる。高広Ⅳ・V期に同様の形態のものがあり、8世紀から9世紀代と考えられる。206・207は無高台の坏身である。体部が丸みをもちらがら曲線的に立ち上がり、底部外面に回転糸切りが施されている。高広ⅣA期に相当し、概ね8世紀代と考えられる。208は無高台の皿である。平坦な底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。底部の切り離しは糸切りである。高広Ⅳ・V期に同様の形態のものがあり、8世紀から9世紀代と考えられる。209は壺口縁部の破片、210は小型の壺蓋類口縁部の破片である。211は斜め上方に向け真っ直ぐに立ち上がる壺口縁部の破片であり、口縁部外面に2条の沈線が巡る。

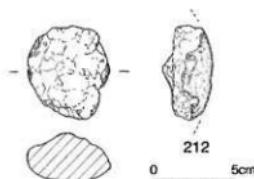


第42図 整地層出土土師器実測図 (S=1/3)



第43図 整地層出土須恵器実測図 (S=1/3)

**鉄滓**（第44図212） 212は楕形鍛冶滓である。平面はほぼ円形を呈し、上面の中央部はやや盛り上がっていいる。底部は丸みをおび、砂粒の付着が認められる。弱いながら磁石に付着するものである。法量は現状で長さ5.8cm、幅5.1cm、厚さ最大3.0cm、重量109.1gを測る。C-4より出土した。



第44図 整地層出土鉄器実測図（S=1/3）

#### [註]

- 註1 底部に糸切りをもつ中世土器を便宜的に土器質土器とした。（P-10）  
註2 島根県教育委員会「渡輪沖遺跡」一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3  
1999年3月（P-10）  
註3 八雲村教育委員会「八雲村コミュニティーセンター建設工事に伴う『恩部遺跡試掘調査終了報告』平成14年（2002）年12月（P-10）  
註4 廣江耕史・丹羽野裕、西尾克己氏のご教示による。（P-19）  
廣江耕史「島根県における中世土器」『松江考古』第8集 松江考古学談話会 1992年  
廣江耕史「出雲地域の中世土器について」『出雲平野の中世土器検討会資料』1998年  
註5 註4と同じ。（P-23）  
註6 西尾克己氏のご教示による。（P-28）  
島根県教育委員会「蔵小路西遺跡」一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2  
1999年3月  
註7 島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」-和田園地造成工事に伴う発掘調査- 1984年3月（P-33）  
註8 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』1994年3月（P-33）  
註9 註4と同じ。（P-36）  
註10 高橋照彦、平尾政季氏のご教示による。（P-38）  
註11 第2回山陰中世土器検討会資料集「縁物陶器の様相-山陰地方を中心として-」  
2002年10月5日・6日山陰中世土器検討会（P-38）  
註12 中世土器研究会編「概説中世の土器・陶磁器」真陽社 1995年（P-38）  
註13 乗岡実「備前焼擂鉢の編年について」第3回中近世備前焼研究会資料 2000年11月 中近世備前焼研究会  
乗岡実「中世備前焼擂鉢・壺の編年案」2002年1月（P-38）  
註14 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』NO.2 1982年（P-38）  
註15 森田勉「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』NO.2 1982年（P-38）  
註16 内田律雄「鳥取県・島根県・山口県の鈎帯・鈎帯をめぐる諸問題」2002年 奈良文化財研究所（P-40）  
註17 三宅博士氏のご教示による。（P-41）

#### [参考文献]

- ・池澤俊一「門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡」島根県教育委員会 1998年
- ・『日本出土銭鑄観』1996年版 兵庫県立埋蔵文化財調査会 1996年5月
- ・日本貿易陶磁研究会中近世大会資料集「中世後期における貿易陶磁器の様相」  
2002年6月29日・30日 日本貿易陶磁研究会
- ・第3回山陰中世土器検討会資料集「中世須恵器の生産と流通 -山陰地方を中心に-」  
2003年10月12日・13日 山陰中世土器検討会

## 第5章 まとめ

今回の押定寺遺跡の調査では、第1遺構面から掘立柱建物跡4棟(SB-01~04)、土坑6個(SK-01~06)と多数のピットを検出した。また、第1遺構面を更に掘り下げた第2遺構面からは土坑1個(SK-07)と溝4本(SD-01~04)を検出している。以下、検出された遺構の時期について若干触れ、まとめとしたい。

第2遺構面を埋め立てた整地層から出土した遺物は土師器、須恵器が主体である。このうち、須恵器は高広ⅢA・B期(7世紀中頃から8世紀前半頃)の蓋壺と高広ⅣA期(8世紀代)の壺身が中心であり、高広Ⅳ・V期(8世紀から9世紀代)の壺身や皿も弱冠存在する。第1遺構面褐灰色土層から多数出土している平安時代の土師質土器(10世紀から12世紀前半頃)は、細片が数個出土しただけである。この細片についても整地層表面からの出土であり、褐灰色土層の下面から出土したものに含めるべきかもしれない。この他、陶磁器は出土していない。よって、この整地層は第1遺構面の褐灰色土層から多数出土している平安時代の土師質土器が使われる以前(8~10世紀頃か)に造成されたものと考えられる。整地層を更に掘り下げた第2遺構面から検出された土坑1個(SK-07)と溝4本(SD-01~04)はこれ以前の遺構となるが、詳細な時期は判らない。

第1遺構面から検出された土坑やピット群は整地層造成後に掘られたものである。復元された4棟の掘立柱建物跡(SB-01~04)のうち、遺構の切り合い関係はSB-01・02・04で認められた。土層の観察から新Ⅱ関係を確定することはできなかったが、SB-04だけは主軸が北に約27度傾いており、同軸のSB-01・02とは別個に考える必要がある。建物跡の柱穴から出土した遺物で注目されるのがSB-01のPT3・4から出土した銭貨である。1068年初鎔の熙寧元寶が土師質土器と一緒に出土しており、建物を建てる前、いわゆる「地鎮め」を行った跡と思われる。このように考えるとSB-01は1068年以降の建物跡といえる。この他、PT9より瓷器系の蓋壺類副部の破片が出土しているが、柱の抜き取り状況が不明なため、柱の埋設時に伴うものか、抜き取り後の混入によるものかの判断はできなかった。1068年以降の遺物で量的に多いのが平安時代の土師質土器(10世紀から12世紀前半頃)と中世4期(15世紀前葉~15世紀中葉)の備前播鉢や甕、上田HD類(14~15世紀頃)に相当する中国青磁、森HD群(15世紀代)に相当する白磁の皿など、14~15世紀頃の中世陶磁器である。よって、SB-01は11世紀後半~12世紀前半頃か、14~15世紀頃の建物跡である可能性が高い。SB-01とSB-03は同軸の建物跡であり、同時期に機能していた可能性が指摘できる。また、SB-01とSB-02切り合い関係にあり、ほぼ同軸であることや南西側の桁行を長く作る特徴も一致していることから建て替えも行われていたと考えられる。

次に、整地層の上に堆積した褐灰色土層から出土した遺物を概観する。ここからは弥生時代後期前半から中世陶磁器に至る非常に時期幅のある遺物が出土している。この中で特徴的な遺物として注目されるのが石製丸軸、刀の鍔、東海系の綠釉陶器皿である。これらは当地域で出土例が少ないばかりか、遺跡の性格を知る上でも重要である。綠釉陶器が9世紀末から10世紀初頭のものであり、整地層造成後の早い段階では官衙的な施設が存在していた可能性が考えられる。しかし、はっきりと9世紀末から10世紀初頭といえる建物跡は確認できなかった。或いは、これらを副葬することができる豪族の墳墓が壊され整地層が造成された可能性や、整地層造成後に墳墓が作られ後世に

擾乱された可能性も捨てきれない。調査地内で墳墓の可能性のある土坑としてSK-04（第19図）があげられる。C-3・4区の標高28.75～29.00mを測る位置で検出された長方形を呈する土坑であり、長さ148cm以上185cm以下、幅78cm、深さ最大20.7cmを測る。土坑内からは平安時代の土師質土器が出土しており、土坑上面からも同時期の土師質土器がまとまって見つかっている（第26図参照。36-138・139・144・146・151・156等）。また、石製丸瓶、刀の鍔、綠釉陶器皿なども近い位置からの出土である。この土坑の位置する場所はSB-02・PT3とSB-04・PT3が掘り込まれた所であり、SK-03とも切り合っている。これらが掘削された際に、土壤内から副葬品が発見されたと考えることもできる。この他に、注目されるのが中国産の天目・青磁・白磁など貿易陶磁が多数出土している点である。これらを入手できる豪族の居館としての機能が想定され、遺跡の南東に位置する禅定寺城跡や南に位置する禅定寺古墓群との関係が注目されるが、今回は調査面積も少なく詳細は不明である。今後の検討課題としたい。

#### [註]

註1 後述する昭和58年度調査地区（調査B区）に隣接する丘陵に存在する五輪塔群である。概観したところ、空風輪4個、火輪6個、水輪1個、地輪2個が確認できた。この他、土中に埋まっているため何処の部材か判らないものも4個あった。これらの石材はいずれも凝灰岩製である。

第2表 桤定寺遺跡出土土器観察表

審査成は「良好・やや良好・良・やや不良・不良」とした。

遺物 番号	持印 番号	品目	器種	出土地点 土・層	胎土焼成	色調(外) 色調(内)	法量(cm)	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備考
1 第5回	I.鉢質 土器	不明	SB-01 PT3-4	微砂粒含む。 密不良好	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	高台径 6cm前後	「ハ」の字状に開く高台をもつ。	風化	残存と一様に 出土。	
4 第9回	須恵器	环身	SB-02 PT15	密やや良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:12.3	休部は内湯気味に立ち上 がり、口縁部外側に比較 的施し、括れ部を現出する。	体部内外面が同質ナ ド。		
5 第9回	須恵器	蓋	SB-02 PT15	1mmの大砂粒 含む。	(外)灰褐色 (内)灰褐色	底径:13.5	平坦な底部より休部が斜 り上方へ傾く直線的に立ち 上がりしている。	小片のため断定でき ないが、表面に糸切り 痕は観察できない。	底部	
9 第10回	上鉢質 土器	不明	SB-03 PT23	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	LH径 12cm前後	「ハ」の字状に立ち上 がる休部がある。	風化	口縁部小片	
10 第11回	十輪器	蓋	SB-04 PT9	1mmの大砂粒 含む。 密やや不良	(外)褐色 (内)褐褐色	口径:21.5	口縁部が外反して立ち上 がり、端部内面が若干僅 か。	体部外側が横方向のハ ケツ、内面の底盤以下に ヘーケツリが施されている。		
11 第11回	土師器	蓋	SB-04 PT4	0.5mmの大砂 粒含む。 密やや良好	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	口径:不明	外反する口縁部をもち、端 部を丸くおさめる。	内外面ヨコナデ	口縁部小片	
12 第11回	上鉢質 土器	蓋・瓶 瓶頭	SB-04 PT4	0.5mmの大砂 粒含む。 密やや良好	(外)灰黃褐色 (内)灰黃褐色	口径:24.4	口縫部が水平気味に強く 外反し、やや厚手。	内外面ヨコナデ		
13 第11回	上鉢質 土器	台付 の环	SB-01 PT2	2mmの大砂粒 含む。 不具	(外)浅黃褐色 (内)灰褐色	口径 9cm前後	口縁部は内湯気味に立ち 上がる。底部の裏側はか ら脚が高台がついている。	風化	口縁部小片	
14 第14回	十輪器	瓶	SK-01	1mmの大砂粒 含む。 密やや良好	(外)灰黃褐色 (内)褐褐色	口径:18.7	瓶頭の張り出しが口縁以上 にないものである。口縁部はヨコ 径(外径)と内径(内径)に同じ。	内面が横方向のハラ ケツ、口縁部はヨコナデ ナダが施されている。	外間に炭化物 と蜜生着	
15 第14回	上鉢器	瓶・蓋	SK-01	1mmの大砂粒 含む。 密やや良好	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	口径 25cm前後	口縁部の内片、底の 不均一な粗製品。	口縁部ヨコナデ	外間に炭化物 と蜜生着	
16 第14回	須恵器	環壺	SK-01	密やや良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	摘み部径: 1.8	瓶頭部は横方向のハラ ケツ、瓶頭部はヨコナデ ナダが施されている。	外面大井井部の横 粗品にヨコナデハラケ ツリ。		
17 第14回	須恵器	蓋	SK-01	密やや良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	-	瓶頭部下に突起が現り、瓶頭 部には沈線が施されている。	内外面同軸ナダ。		
18 第14回	十輪質 土器	無高台 の外	SK-01	1mmの大砂粒 含む。 密やや不良	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	口径:11.5 底径:5.6 高台径:4.1	口縫部に残存している部分は 底盤が丸く曲がり、曲の部分は瓶頭 部に付いている。	口縫部に残存している部分は 底盤が丸く曲がり、曲の部分は瓶頭 部に付いている。	第20回41、第 36回137~139 と同形態	
19 第14回	上鉢質 上器	不明	SK-01	微砂粒含む。	(外)褐色 (内)にびい橙色	口径:11.6	斜め上方に立ち上げる休 部、口縁部が若干脚立ち 部を丸くおさめる。	風化のため壁部が薄 くなっている。	口縁部 内外面	
20 第14回	上鉢質 土器	不明	SK-01	微砂粒含む。 密やや不良	(外)褐色 (内)褐色	口径:15.7	斜め上方に向けやかに 立ち上がる休部をもつ。	内外面同軸ナダ。	口縁部	
21 第14回	十輪質 土器	不明	SK-01	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	底径:5.3	底部の底部。	底部外面同軸糸切り	底部	
22 第14回	上鉢質 上器	不明	SK-01	微砂粒含む。 密不具	(外)浅黃褐色 (内)浅黃褐色	底径:5.4	無高台の底部。	底部外面同軸糸切り	底部	
23 第14回	I.鉢質 土器	不明	SK-01	微砂粒含む。 密やや不良	(外)黑褐色 (内)灰褐色	底径:5.4	無高台の底部。	底部外面同軸糸切り	底部	
24 第14回	I.鉢質 土器	不明	SK-01	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	底径:5.5	無高台の底部。	底部外面に糸切り	底部	
25 第14回	上鉢質 上器	不明	SK-01	0.5mmの大砂 粒含む。 密やや不良	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	高台径:7.6	「ハ」の字状に開く高 台をもつ。	内外面回転ナダ。切 り離しは糸切りか。	底部	
26 第14回	上鉢質 土器	不明	SK-01	微砂粒含む。 密不具	(外)浅黃褐色 (内)浅黃褐色	高台径:9.0	「ハ」の字状に開く高台をも つ。	風化のため器壁が薄 くなっている。	底部	
27 第16回	十輪器	支脚	SK-02	0.5mmの大砂 粒含む。 密やや良好	(外)にびい橙色	-	三方向に突起をもつタイ グ。	強い横方向のナダに より往上げられていい る。		
28 第16回	須恵器	环身	SK-02	密やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	高台径: 10.0	高台が底盤の外縁につ き、休部は斜め上方に向け 立ち上がる。	内外面回転ナダ	底部	
29 第16回	I.鉢質 土器	不明	SK-02	微砂粒含む。 密やや不良	(外)浅黃褐色 (内)褐褐色	底径:5.0	高台がもたらす底盤、底盤 は高台状を呈している。	風化	底部	
30 第18回	須恵器	环身	SK-03	密やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:14.2	「ハ」の字状に伸びる休 部をもち、口縁部で外反す る。	内外面回転ナダ		

遺物 番号	種類 番号	品目	器種	出土施点 上	施上施成	色調(外) 色調(内)	法量(cm)	形態の特徴	調整・手法の特徴	備考
31 第18回	須恵器	环身	SK-03	微妙組合む。 密やや不良	(外)にびい赤褐色 (内)にびい赤褐色	底径10cm 前後	無高台の环。	底部外面には系切り	底部片	
32 第18回	土師質 土器	不明	SK-03	微妙組合む。 密良好	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	口径:14.2	逆「ハ」の字状に伸びる体 部をも、口縁部で外反す。	内外面回転ナデ	培成の悪い須 恵器?口縁部	
33 第18回	土師質 土器	不明	SK-03	微妙組合む。 密不良	(外)にびい橙色 (内)にびい橙色	底径:14.8	無高台の底部。	風化	底部	
34 第18回	土師質 土器	不明	SK-03	微妙組合む。 密良	(外)褐色 (内)灰褐色	底径:15.4	無高台の底部。	系切りの痕跡が僅か に残る。	底部	
35 第18回	土師質 土器	不明	SK-03	微妙組合む。 密良好	(外)にびい粉色 (内)にびい粉色	底径:15.6	無高台の底部。底部は低 い高台状を呈する。	底部外面には系切り	底部	
36 第18回	土師質 土器	不明	SK-03	微妙組合む。 密やや不良	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	底径:16.0	無高台の底部。	系切りの痕跡が僅か に残る。	底部	
37 第18回	土師質 土器	不明	SK-03	微妙組合む。 密不良	(外)褐色 (内)にびい橙色	高台径: 小明	「ハ」の字状に聞く高台部。	風化	底部小片	
38 第18回	土師質 土器	不明	SK-03	微妙組合む。 密やや不良	(外)にびい赤褐色 (内)にびい赤褐色	高台径: 不明	底部に凸出の施路をとど める。	風化	底部小片	
39 第20回	土師器	罐	SK-04	0.5mmの大 き粒合む。 やや良好	(外)灰褐色 (内)にびい褐色	口径: 24cm前後	腹部の押出しにより壁面上 に凹凸があり、口縁部は むちむちと縮れ、外反する。	厚みが不均一な粗製 品。		
40 第20回	須恵器	罐	SK-04	Innenの砂粒 組合む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	底径:13.4	平坦な底部より体部が斜 り上方に向けて真っ直ぐに 伸びる。	底部外回転ナデ。体部 に操作印による平らな 凹凸がみられる。	底部	
41 第20回	土師質 土器	黑高台 の环	SK-04	1mmの大 き粒組合む。 やや良好	(外)にびい褐色 (内)にびい褐色	口径:11.4 底径:15.6 高台径:24.1	上段は灰褐色の底部より腹部 が環状に立ち上がり、体 部より下に垂れ落ちる。	底部の切り進しは展 化のため平明。	第36回137- 139と同形態	
42 第20回	土師質 土器	不明	SK-04	1mmの大 き粒組合む。 不良	(外)浅黄色 (内)浅黄色	口径:11.6	1mmの横の稜片。体部上半 に弱い垂らしきをもつ。	風化	LJ縁部 無高台の环。	
43 第22回	須恵器	环身	SK-05	0.5mm大の砂 粒組合む。 良	(外)灰色 (内)灰色	横み部径: 4.1	輪状構みをもつ。	横み部周辺に回転へ ラケズリ。大井部内凹 ナデ。		
44 第22回	須恵器	环身	SK-05	密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:18.0	端部を下方に僅かに引き 出している。	内外面回転ナデ	口縁部	
45 第22回	須恵器	罐	SK-05	0.5mm大の砂 粒組合む。 やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:18.2	逆「ハ」の字状に人が(周)体部 をも、口縁部で強く外反する。 底部に高台の痕跡がある。	内外面回転ナデ		
46 第22回	土師質 土器	不明	SK-05	微妙組合む。 密良	(外)褐色 (内)褐色	口径:13.6	口縁部が緩く外反する。	内外面回転ナデ	口縁部	
47 第22回	土師質 土器	不明	SK-05	微妙組合む。 密良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:不明	体部は逆「ハ」の字状に大き く開き、口縁部は外方に向 け刺し曲がられている。	内外面回転ナデ	口縁部小片	
48 第22回	土師質 土器	不明	SK-05	微妙組合む。 密やや不良	(外)褐色 (内)褐色	底径:14.8	高台をもたない底部。	底部外面に系切り痕	底部	
49 第22回	土師質 土器	不明	SK-05	微妙組合む。 密やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	底径:15.6	高台をもたない底部。やや 上げ蒸氣味。	底部外面にあ切痕	底部	
51 第24回	土師器	麦小頭	P16	0.5mmの大 き粒組合む。 やや良好	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	口径:不明	外反する口縁部の破 片。	内外面回転ナデ	口縁部小片	
52 第24回	土師器	麦小頭	P19	1mmの大 き粒組合む。 不良	(外)黑褐色 (内)褐色	口径:23cm 前後	外方に向け大きく外反す る。	器壁の厚みが不均一 な粗製品。	外間に炭化物 付着	
53 第24回	土師器	不明	P33	1mm砂面の砂 粒組合む。 良	(外)褐色 (内)褐色	口径:不明	削制はぬき気味に立ち上がり、 口縁部附近にアカシント付 け若干残存する。	器壁の厚みが不均一 な粗製品。	口縁部小片	
54 第24回	土師器	环身	P1	密良	(外)灰色 (内)灰色	横み部径: 6.0	輪状構み部の破片。	切り離しは系切り。		
55 第24回	土師質 土器	不明	P32	1mm砂面の砂 粒組合む。 不良	(外)淡黄色 (内)灰白色	底径:15.5	高台をもたない底部。	底部外面回転ナデ	底部	
56 第24回	土師質 土器	不明	P35	0.5mmの大 き粒組合む。 やや良好	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	底径:17.0	高台をもたない底部。低い 高台状を呈する。	切り離しは系切り	底部	
57 第24回	土師質 土器	不明	P33	0.5mmの大 き粒組合む。 やや良好	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	底径:15.6	高台をもたない底部。低い 高台状を呈する。	底部外面回転ナデ	底部	

遺物 番号	種類 番号	品目	器種	出土地點 層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法寸（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴	備考
58	第24回	土師質 土器	不明	P36	微緻粒含む。 密や不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	高台径: 約4.6cm	高台をもつ底部。所蔵: 角形の高台をもつ。	内外面回転ナデ	底部
59	第24回	土師質 土器	不明	P18	微緻粒含む。 密や不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	高台径:7.6 10cm前後	ハの字形に近い二角形の底 台がついた化粧土器らしい 陶器が、西古からうしじびりるもの かしれな。	風化	底部
60	第24回	土師質 土器	不明	P9	微緻粒含む。 密や不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	高台径: 約4.6cm	ハの字形に広がる長い 高台をもつ。	内外面回転ナデ	底部
61	第25回	生糸 土器	糸	A-2区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒多く含む。 やや不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:22.4 11cm	口縁部が強く彎曲して開 き、底部は土下厚壁すり足 を形成する。	縁部には1条の凹線 が観察できる。	弥生時代後期 前半
62	第25回	生糸 土器	糸	B-2区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒多く含む。 やや不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:14.8 8cm	口縁部がやや外反気味に 立ち、底部は土下厚壁すり足 を形成する。	口縫部外側に浅い凹 線の凹線文が觀察できる。	弥生時代後期 前半
63	第25回	生糸 土器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒多く含む。 不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口径:不明 8cm	単純口縁に斜十種を結び 付け口縁部を形成して いる。	口縫部外側には2條の凹 線文が观察できる。	弥生時代後期 前半
64	第25回	生糸 土器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mmの砂粒 多く含む。 やや不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:19.8 10cm	口縁部が水平に近く大き く開き、底部が下方に拡張さ れている。	底盤部分に凹線文が 施されている。	弥生時代後期 前半
65	第27回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:13.7 8cm	外反する口縁をもつやや 小型の鋤。球形の体部をも つ。	体部内面へラケヅリ、 外面コロナ。	
66	第27回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	2mm前後の砂 粒多く含む。 やや良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:23.4 11cm	口縁部は外反し、撇で開 である。口縁底部を丸くお きめ腰壁させる。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面コロナ。	
67	第27回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	2mm前後の砂 粒多く含む。 やや良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:26.0 12cm	口縁部は外反し、撇で開 である。口縁底部を丸くお きめる。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面コロナ。	
68	第27回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:17.7 10cm	口縁部は外反し、撇で開 である。1mm縁部を丸くお きめる。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面コロナ。	
69	第28回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒多く含む。 やや良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:27.0 12cm	口縁部は外反し、撇で開 である。口縁底部を丸くお きめる。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面コロナ。	
70	第28回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:28.6 12cm	口縁部は外反し、撇で開 である。口縁底部を丸くお きめる。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面コロナ。	
71	第28回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒多く含む。 やや不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:19.0 10cm	外反する口縁をもつ、調節 の強弱が口縁以上に ならない。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面コロナ。	
72	第28回	土師器	糸	B-2・B-3 区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒多く含む。 良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:24.8 11cm	外反する口縁をもつ、調節 の強弱が口縁以上に ならない。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面コロナ。	
73	第28回	土師器	糸	B-1区 褐灰色土層	2mm前後の砂 粒多く含む。 良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:19.6 10cm	外反する口縁をもつ、調節 の強弱が口縁以上に ならない。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面風化。	
74	第28回	土師器	糸	C-3区 褐灰色土層	2mm前後の砂 粒多く含む。 やや不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:16.4 8cm	外反する口縁をもつ、調節 の強弱が口縁以上に ならない。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面風化。	外曲に良化物 付帯
75	第28回	土師器	糸	B-1区 褐灰色土層	2mm前後の砂 粒多く含む。 やや不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:32.6 12cm	外反する口縁をもつ、調節 の強弱が口縁以上に ならない。大型のもの。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面風化。	
76	第28回	土師器	糸	C-3区 褐灰色土層	3mm前後の砂 粒多く含む。 良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:23.4 11cm	外反する口縁をもつ、調節 の強弱が口縁以上に ならない。	体部内曲輪方向のペ ラケヅリ、外面風化。	
77	第29回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	口徑:27.9 12cm 高台:15.1 身幅:9.5	底盤より内側突出に立ち上 り、口縁部で削ぐように、底盤 付近に凹痕がある。	底盤内外面コロナ。 体部内面へラケヅリ、外 面風化方向のペラケ。	
78	第29回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 やや不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	-	牛角状の把手	ナデ	
79	第29回	土師器	糸	C-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 良好	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	-	牛角状の把手	内面ケヅリ、外面ナデ	
80	第29回	土師器	糸	B-4区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 やや不良	(外)に赤褐色 (内)に赤褐色	底盤付近に径6mmの異 孔。	底盤付近に径6mmの異 孔。	コロナ	底部
81	第30回	土師器	糸	B-4区 支脚	人筋の砂粒含 む。	(外)に赤褐色	-	ニ又突起タイプのもの。	外面ナデ。	上端部
82	第30回	土師器	糸	B-4区 支脚	1mm前後の砂 粒含む。	(外)に赤褐色	-	ニ又突起タイプのもの。	外面ナデ。	上端部
83	第30回	土師器	糸	R-2区 褐灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 やや不良	(外)に赤褐色	底盤:12.4 8cm	上げ底を呈する。	外面ナデ。底部ケヅリ か。	底部

遺物 番号	種類 番号	品目	器種	出土地点 上層	胎土成形	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴	備考	
85	第30回	土師器	土製 支脚	C-5区 陶灰色土層	0.5mmの大砂 粒含む。 やや良好。	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	底径:12.6	上げ底を呈する。	外面ナデ、底部ケズリ。 底部	底部	
85	第30回	土師器	土製 支脚	B-4区 陶灰色土層	1mm前後の砂 粒多く含む。 やや良好。	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	底径:11.0	上げ底を呈する。	外面ナデ、底面ケズリ。 底部	底部	
86	第30回	土師器	土製 支脚	B-3・B-4 区 陶灰色土層	1mm前後の砂 粒多く含む。 やや良好。	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	底径:11.0	上げ底を呈する。	外面ナデ、底部ケズリ。 底部	底部	
87	第31回	土師器	甕	B-4区 陶灰色土層	3mmの大砂粒 含む。 やや不良	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	H径:30.8	-	外面ヨコナデ、内面縦 方向のケズリ。 内面に擦痕有。	口徑から腹壁に かけての片手。内面に擦痕有。	
88	第31回	土師器	甕	B-4区 陶灰色土層	3mmの大砂粒 含む。 やや不良	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	-	-	外曲線方向のハケメ、 内面縦方向のケズリ。 底部の擦痕。	底部の擦痕。	
89	第31回	土師器	甕	B-5区 陶灰色土層	1mmの大砂粒 含む。 やや良好。	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	-	-	-部にハケメ。 甕口部分上部 付近の破片。	甕口部分上部 付近の破片。	
90	第31回	土師器	甕	B-4区 陶灰色土層	1mmの大砂粒 多く含む。	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	-	-	ナデ。	甕口部分底部 付近の破片。	
91	第31回	土師器	甕	B-3区 陶灰色土層	1mmの大砂粒 多く含む。 良好	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	-	-	ナデ。	甕は部分上部 付近の破片。	
92	第31回	土師器	瓶底 支脚	C-3区 陶灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 やや不良	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	H径:10cm 口径:7.5cm 底径:4.4cm	体部は圓錐形に立ち上 がり、口部付没で内側し、端 部を内側に折れさせた。	内外曲とも丁寧なナ ダ仕上げである。	内外曲とも丁寧なナ ダ仕上げである。	
93	第31回	土師器	瓶底	陶灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 良質	(外)に赤い黃褐色 (内)に赤い黃褐色	-	3~4mmの間隔で6本の 条溝が螺旋状である。	風化	14世紀前後	
94	第32回	須恵器	环底	B-3区 陶灰色土層	1mmの大砂粒 含む。 やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:12.2 底径:11.7 高さ:3.5 内径:8.4	口縁部内面に返りをも つむ。輪軸摘み。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣A・B期	
95	第32回	須恵器	环底	B-2・3・C- 2・4区 陶灰色土層	2mm以下の砂 粒含む。 やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:14.4 底径:17.1 高さ:3.0 内径:8	口縁部内面に返りをも つむ。輪軸摘み。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣A・B期	
96	第32回	須恵器	环底	B-2・3・C- 3区 陶灰色土層	2mm以下の砂 粒含む。 やや良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:12.6 底径:16.3 高さ:3.5 内径:6.6	口縁部内面に返りをも つむ。輪軸摘み。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣A・B期	
97	第32回	須恵器	环底	B-4・C-2・ 3区 陶灰色土層	3mm以下の砂 粒含む。 良質	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:13.7 底径:16.7 高さ:3.6 内径:6.8	口縁部内面に返りをも つむ。家形の横筋が押し つけられたような形。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣A・B期	
98	第33回	須恵器	环底	B-1・2区 陶灰色土層	2mmの大砂粒 含む。 やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:15.2 底径:16.2 高さ:3.5 内径:6.8	口縁部が下垂し、頂部 に輪軸摘みをもつ。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣B期須	
99	第33回	須恵器	环底	B-1・C-4 区 陶灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 やや不良	(外)陶灰色 (内)に赤い褐色	H径:15.8 底径:12.2 高さ:3.5 内径:6.2	口縁部が下垂し、頂部 に輪軸摘みをもつ。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣B期須	
100	第33回	須恵器	环底	B-2・4・C- 2区 陶灰色土層	1mm前後の砂 粒含む。 やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:14.8 底径:12.0 高さ:3.5 内径:6.0	口縁部が下垂し、頂部 に輪軸摘みをもつ。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣B期須	
101	第33回	須恵器	环底	C-2・3区 陶灰色土層	密や 良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:15.4 底径:12.5 高さ:3.8 内径:6.4	口縁部が下垂し、頂部 に輪軸摘みをもつ。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣B期須	
102	第33回	須恵器	环底	C-2区 陶灰色土層	2mm以下の大砂 粒含む。 良質	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:13.3 底径:12.2 高さ:3.5 内径:5.9	口縁部が下垂し、頂部 に輪軸摘みをもつ。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣B期須	
103	第33回	須恵器	环底	C-2・4区 陶灰色土層	1mmの大砂粒 含む。 やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:14.0 底径:12.0 高さ:3.5 内径:6.4	口縁部が下垂し、頂部 に輪軸摘みをもつ。	輪軸部返り輪軸ヘタ クズリ、内面内井筋ナギダ、天 蓋部の切離は不明。	高広宣B期須	
104	第33回	須恵器	环身	B-1区 陶灰色土層	密や 良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:8.5 底径:6.8 高さ:2.8	内面が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	高広宣B期須
105	第33回	須恵器	环身	B-4・C-3 区 陶灰色土層	2mm以下の大砂 粒含む。 良質	(外)灰白色 (内)陶灰色	H径:16.9 底径:15.5 高さ:5.7	体部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	高広宣B期須
106	第33回	須恵器	环身	B-2区 陶灰色土層	3mm以下の砂 粒含む。 やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:12.4 底径:11.8 高さ:3.5 内径:5.9	体部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	高広宣B期須
107	第33回	須恵器	环身	B-1・2区 陶灰色土層	2mm以下の大砂 粒含む。 良質	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:18.7 底径:16.9 高さ:5.4	体部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	高広宣B期須
108	第33回	須恵器	环身	C-2・3区 陶灰色土層	密や 良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:13.2 底径:11.8 高さ:4.0	体部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がる。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がる。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がる。	高広宣B期須
109	第33回	須恵器	环身	B-3・4・C- 4区 陶灰色土層	密や 良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	H径:14.7 底径:13.5 高さ:5.6	体部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	輪軸部が丸みをもたらす形 で輪軸部を作り出さず、口部 に立ち上がり、底部には はの字形状の内井筋がある。	高広宣B期須

直物 番号	種類 番号	品目	器種	出土点 土 层	断.焼度	色調(外) 色調(内)	法量(cm)	形態の特徴	調整・手法の特徴	備考
110	第33回	須恵器	环身?	B-4区 褐灰色土層	2mm以上の砂粒 含む。 密不良	(外)にびい黄褐色 (内)にびい黄褐色	口径:~ 器高:~ 底径:8.4	体部が丸みをもたらす 圓錐的に立ち上がり、底部にはハーフ状の高台がつく。	底部の切り離しはヘ ラ切りによる。円錐底 部ナフ。	蓋94~103に 伴うものか
111	第33回	須恵器	环身?	B-1区 褐灰色土層	1mm以上の砂粒 含む。 密良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:~ 器高:~ 底径:9.0	体部が丸みをもたらす 圓錐的に立ち上がり、底部にはハーフ状の高台がつく。	底部の切り離しは同 軸系切り。	蓋94~103に 伴うものか
112	第33回	須恵器	环身?	B-1~2区 褐灰色土層	密やや良好	(外)黄褐色 (内)黄褐色	口径:~ 器高:~ 底径:8.7	体部が丸みをもたらす 圓錐的に立ち上がり、底部にはハーフ状の高台がつく。	底部の切り離しは同 軸系切り。	蓋94~103に 伴うものか
113	第33回	須恵器	环身	B-1区 褐灰色土層	2mm以下の砂 粒含む。 密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:12.3 器高:9.1 底径:9.1	体部が弧曲的に外傾して 伸びる。底部端に高い高 度部が斜め付けられている。	底部の切り離しは同 軸系切りによる。	高広N・V周
114	第33回	須恵器	环身	C-3区 褐灰色土層	密良	(外)灰白色 (内)灰白色	口径:12.5 器高:4.6 底径:8.3	無高台。体部が丸みをも たらす圓錐的に立ち上がる。	底部の切り離しは同 軸系切り。	高広吉八期
115	第33回	須恵器	环身	B-3~C-3 区 褐灰色土層	密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:~ 器高:8.3 底径:8.5	無高台。体部が丸みをも たらす圓錐的に立ち上がる。	底部の切り離しは同 軸系切り。	高広吉八期
116	第33回	須恵器	环身?	C-3区 褐灰色土層	2mm以下の砂 粒含む。 密やや良好	(外)黄褐色 (内)黄褐色	口径:~ 器高:7.7 底径:7.4	無高台。体部が丸みをも たらす圓錐的に立ち上がる。	底部の切り離しは同 軸系切り。	高広吉A南か
117	第33回	須恵器	环身?	B-4区 褐灰色土層	密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:~ 器高:7.6 底径:7.6	無高台。上げ高さの底 部より体部が弧曲的に外 傾して伸びる。	底部の切り離しは同 軸系切り。	高広吉A期か
118	第34回	須恵器	蓋	B-3区 褐灰色土層	2mm以下の砂 粒含む。 密良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:17.6 器高:~ 底径:~	底部が丸みをもたらす圓 錐形で外反する。底部 端部に凹凸部がある。	底部外面には凹板部 切が施されている。	高広A・B期に 属する形態あり。
119	第34回	須恵器	高环	B-1区 褐灰色土層	2mm以上の砂 粒含む。 密良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:16.7 器高:~ 底径:13.5	11縁部が内凹溝線に継 ぐに開き、環部付 近で内凹し先端は下に 肥厚され凹面をもつ。	透かしは網窓 でなかった。 受部の底片	透かしは網窓 でなかった。 受部の底片
120	第34回	須恵器	高环	B-4~6,C- 4区 褐灰色土層	0.5mm以下の 砂粒含む。 密やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:25.4 器高:~ 底径:~	11縁部が内凹溝線に継 ぐに開き、環部付 近で内凹し先端は下に 肥厚され凹面をもつ。	内外両面凹ナフ。内 側部の底片	透かしは小網 の底片
121	第34回	須恵器	蓋	B-2~3区 褐灰色土層	密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:18.1 器高:~ 底径:~	脇部が直ぐ張り出し、11縁 部が直ぐ張り出る。	11縫部内外面凹ナフ ・体部内面同心円 式其具、外側タキ。	口縫部
122	第34回	須恵器	漆塗瓶	B-2~C-2 区 褐灰色土層	密良好	(外)兩灰褐色 (内)灰褐色	口径:13.6 器高:~ 底径:~	小窓の裏蓋部、11縁部 を肥厚させ、四面を形成す る。	内外両面凹ナフ。	口縫部
123	第34回	須恵器	蓋	B-4区 褐灰色土層	2mm以上の砂 粒含む。 密やや良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	-	脇部に突起がある。	内外両面凹ナフ。	
124	第34回	須恵器	長颈瓶	B-3~4~5, C-5区 褐灰色土層	密良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	高台径:7.8 底部最大径: 15.3	脇部上方に最大径、口脇部は 脇部からほんの少し上に あがく外反。底部は扁平 である。	面部と脇部に2条の浅 縦溝があり、底部は必ず 切られる切跡がある。	高広B期に 属する切跡。
125	第34回	須恵器	蓋	B-3~4区 褐灰色土層	密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:8.0 器高:~ 底径:~	斜上方に向け直った直ぐに 立ち上がる口縫の痕跡。	内外両面凹ナフ。	
126	第34回	須恵器	蓋	B-2区 褐灰色土層	3mm以下の砂 粒含む。 密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	底径:5.0 高台径:~	脇部に2条の浅溝が あり、表面にV字のへ り跡がある。		底部内面凹ナフ ・
127	第34回	須恵器	漆塗瓶	C-6区 褐灰色土層	2mm以上の砂 粒含む。 密不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	-	外表面格子状のタキ。 内側部はナフ。		小片のため底 部は不明。 脇部
128	第35回	土師質 土器	高台付 蓋	B-5区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やや不良	(外)褐色 (内)褐色	口径:10.5 器高:2.3 底径:5.3	平底な底部より通「ハ」の 字形に大きめに開き、11縁に 向け先細りする。	脇部の切り離しは 未切によく。	
129	第35回	土師質 土器	高台付 蓋	C-4区 褐灰色土層	Imax以下の砂 粒含む。 密良	(外)にびい褐色 (内)褐色	口径:11.0 器高:0.7 底径:~	黒部は浅く横方向に直線 的に開く。	黒化	
130	第35回	土師質 土器	高台付 蓋	C-3区 褐灰色土層	微細粒含む。 密良	(外)にびい橙色 (内)橙色	口径:11.9 器高:0.8 底径:~	黒部は浅く外方向に直線 的に開く。	口縫部内外面凹ナフ 。	
131	第35回	土師質 土器	高台付 蓋	B-4区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密良	(外)にびい黄褐色 (内)黄褐色	口径:11.8 器高:0.9 底径:~	黒部は浅く外方向に直線 的に開く。	口縫部内外面凹ナフ 。	
132	第35回	土師質 土器	高台付 蓋	B-3区 褐灰色土層	2mm以上の砂 粒含む。 密良	(外)にびい黄褐色 (内)黄褐色	口径:11.1 器高:0.8 底径:~	黒部は浅く外方向に直線 的に開く。	口縫部内外面凹ナフ 。	
133	第35回	土師質 土器	高台付 蓋	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やや不良	(外)にびい黄褐色 (内)黄褐色	口径:12.2 器高:6.0 底径:~	上げ高さの底部より体 部が上方へ向け直った直 ぐに伸びる。	内外両面に凹板ナフ による凸凹部。切り離し は圓板切。	
134	第35回	土師質 土器	高台付 蓋	C-3区 褐灰色土層	微細粒含む。 密やや良好	(外)にびい黄褐色 (内)黄褐色	口径:11.3 器高:4.8 底径:~	高い高台部となる底部より体 部が上方へ向け直った直 ぐに伸びる。	内外両面に凹板ナフ による凸凹部。切り離し は圓板切。	
135	第35回	土師質 土器	高台付 蓋	B-4区 褐灰色土層	微細粒含む。 密良	(外)にびい黄褐色 (内)黄褐色	口径:11.3 器高:4.2 底径:~	高い高台部となる底部より体 部が上方へ向け直った直 ぐに伸びる。	内外両面に凹板ナフ による凸凹部。切り離し は圓板切。	

遺物 番号	器名 番号	品目	器種	出土地点 土層	胎土焼成	色調(外) 色調(内)	法徳(cm)	形態の特徴	調整・手法の基準値	備考
136 第35回	十郎賀 土器	無高台 の环	B-3区 褐灰色土層	4mm以上の砂 含む。	(外) 黄褐色 (内) にぶい黄褐色	口径:13.5 器高:4.4 底径:5.8	低い立合状の底部より体部が 斜上へ向かう。底面に伸び、 底部を丸くめる。	内外面に同心輪ナデに ある内凹板。切り廻し は余切り。		
137 第36回	十郎賀 土器	無高台 の环	B-4区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく良好	(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色	口径:11.4 器高:4.0 底径:5.6	底部に凸凹消用に立ち上り、 先端に向かって内凹して、底部 を丸くする。前・側面に	圓転ナデによる凸凹 板は立たない。切 廻しは圓転削り。	第20回41、第 36回138-139 と同形態	
138 第36回	上郎賀 土器	無高台 の环	C-3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく良好	(外) 棕色 (内) にぶい棕褐色	口径:12.1 器高:4.1 底径:5.5	上げ立合状の底部より内凹 して立ち上り、先端へ向か て内凹する。底部を丸くす る。	圓転ナデによる凸凹 板は立たない。切 廻しは圓転削り。	第20回41、第 36回137-139 と同形態	
139 第36回	上郎賀 土器	無高台 の环	C-3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく良好	(外) 棕色 (内) にぶい黄褐色	口径:11.2 器高:4.0 底径:5.5	上げ立合状の底部より内凹 して立ち上り、先端に向か て内凹する。底部を丸くす る。	圓転ナデによる内凹 板は立たない。切 廻しは圓転削り。	第20回41、第 36回137-138 と同形態	
140 第36回	十郎賀 土器	不明	C-5区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく不良	(外) 棕色 (内) にぶい棕褐色	口径:12.1	内溝気味に立ち上がり、口 縁部で僅かに外反する。	内外面削転ナデ。	口縁部	
141 第36回	十郎賀 土器	不明	C-5区 褐灰色土層	密やく良好	(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色	口径:12.2	斜上方へ向かって開き気味に 立ち上がり、口縁部は外方 に向かって先端削る。	内外面削転ナデ。	口縁部	
142 第36回	十郎賀 土器	不明	C-4区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく不良	(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい棕褐色	口径:13.0	内溝気味に立ち上がり、口 縁部で僅かに肥厚する。	内外面削転ナデの内 凹側が悪い。	口縁部	
143 第36回	上郎賀 土器	不明	B-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく不良	(外) 棕色 (内) 棕褐色	口径:17.0	内溝気味に立ち上がり、口 縁部を丸くめる。	内外面削転ナデ。	口縁部	
144 第36回	十郎賀 土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく不良	(外) 棕色 (内) 棕褐色	口径:16.6	内溝気味に立ち上がった 後、斜上方へ向かって削 いて伸びる。	内外面削転ナデの凸 凹側が悪い。	口縁部	
145 第36回	十郎賀 土器	不明	B-3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく不良	(外) 黄白色 (内) 黑褐色	底径:4.1	無高台。上げ立合状の底部より 体部が斜め上方へ向かって伸びる。	内部底部に削転ナデ 版。外側黒化	底部 内黒	
146 第36回	上郎賀 土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく良好	(外) 黄褐色 (内) 黑褐色	底径:6.2	無高台。半円を底面より体 部が開き気味に伸びる。底 部を丸くする。	底部の切り廻しは回 転削り切によると。	底部	
147 第36回	十郎賀 土器	不明	C-4区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく不良	(外) 浅黃褐色 (内) 深黃褐色	底径:6.4	無高台。上げ立合状の底部より 体部が内溝気味に伸びる。底 部を丸くする。	底部の切り廻しは斜 切によると。	底部	
148 第36回	十郎賀 土器	不明	C-3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく良好	(外) にぶい棕褐色 (内) にぶい棕褐色	底径:6.5	無高台。上げ立合状の底部より 体部が内溝気味に伸びる。	底部の切り廻しは斜 切によると。	底部	
149 第36回	上郎賀 土器	不明	B-4区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく良好	(外) 棕褐色 (内) にぶい棕褐色	底径:5.5	無高台。上げ立合状の底部より 体部が内溝気味に伸びる。	底部の切り廻しは斜 切によると。	底部	
150 第36回	上郎賀 土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく良好	(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色	底径:5.4	無高台。上げ立合状の底部より 体部が内溝気味に伸びる。	底部の切り廻しは斜 切によると。	底部	
151 第36回	上郎賀 土器	小明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく良好	(外) にぶい棕褐色 (内) にぶい棕褐色	底径:5.8	無高台。上げ立合状の底部より 体部が内溝気味に伸びる。	底部の切り廻しは回 転削り切によると。	底部	
152 第36回	上郎賀 土器	小明	C-2区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やく不良	(外) 棕褐色 (内) 黑褐色	高台径:17.3 高台高:11.0	高台をもつ底盤。「ハ」の字 状に開く高台。体部は内溝 気味に立ち上がり。	黒化	底部 内黒	
153 第36回	上郎賀 土器	不明	B-3区 褐灰色土層	密やく	(外) にぶい棕褐色 (内) 深黃褐色	高台径:7.8 高台高:11.0	高台をもつ底盤。「ハ」の字 状に開く高台。体部は内溝 気味に立ち上がり。	高台取り付け部分ヨ コナデ。	底部	
154 第36回	上郎賀 土器	不明	B-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく不良	(外) 深黃褐色 (内) 深黃褐色	高台径:8.6 高台高:11.4	高台をもつ底盤。「ハ」の字 状に開く高台。	高台内糸切り後ナデ。	底部	
155 第36回	上郎賀 土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく不良	(外) 棕褐色 (内) 棕褐色	高台径:9.0 高台高:11.0	高台をもつ底盤。「ハ」の字 状に開く高台。体部は内溝 気味に立ち上がり。	黒化	底部	
156 第36回	上郎賀 土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく良好	(外) にぶい棕褐色 (内) にぶい棕褐色	高台径:7.2 高台高:1.3	高台をもつ底盤。「ハ」の字 状に開く高台。体部は内溝 気味に立ち上がり。	体部外側削転ナデ。 糸切り後、高台取り付 け。	底部	
157 第36回	十郎賀 土器	不明	C-4区 褐灰色土層	2mm以上の砂 粒含む。 密やく不良	(外) 棕褐色 (内) 棕褐色	高台径:7.7 高台高:1.3	高台をもつ底盤。「ハ」の字 状に開く高台。体部は内溝 気味に立ち上がり。	体部外側削転ナデ。 糸切り後、高台取り付 け。	底部	
158 第36回	土紹質 土器	小明	B-5区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく不良	(外) 深黃褐色 (内) 深黃褐色	高台径:8.0 高台高:1.8	高台をもつ底盤。「ハ」の字 状に開く高台。糸割りの 長めの高台をもつ。	体部外側削転ナデ。	底部	
159 第36回	上郎賀 土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂 粒含む。 密やく不良	(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色	底径:4.4 脚部高:2.7	白付きの底部。底形に近 い形の脚部。	氧化	底部	
160 第37回	絹地 陶器	黒	C-3区 褐灰色土層	研磨の痕跡良 密やく良好	底色の赤地に銀線 の輪郭。	口径:12.6	絹地部付近が崩壊する。 輪郭部は切り込んでつる タイプの輪郭。	絶縁系。時期は 9世紀末~10 世紀に入れる。		
161 第37回	絹地 陶器	黒	B-5区 褐灰色土層	被覆の痕跡良 密やく良好	底色の赤地に銀線 の輪郭。	底径:5.5	「ハ」の字状に開く両角が 貼付けられている。	160と同一 個体と考えられ る。		

造物 番号	種類 番号	品目	器種	出土地点 上層	黏土塊成	色調(外) 色調(内)	法量(cm)	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備考
162	第37回	造器系 陶器	壺	B-4区 褐灰色土層	1mmの大砂粒 含む。	(外)灰褐色 (内)灰褐色 密良好	LJ径:不明	口縁部は土中にぬり出し、外 側は少し削り内側は立ち上 がつてはゆる二字式口縁。	内外面ヨコナナカ。	13世紀後半頃 と考えられる。
163	第37回	造器系 陶器	壺	A-4区 褐灰色土層	2mmの大砂粒 含む。	(外)灰褐色 (内)灰褐色 密良好	底径23cm 前後	底部を有する。	内外面ヨコナナカ。	162と同一個 体か。
164	第38回	備前	壺	B-5区 褐灰色土層	3mmの大砂粒 含む。	(外)灰褐色 (内)灰褐色 密良好	口径45cm 前後	口縁部が直立に立ち上が り、縁部は丸く折り曲げられ て横状である。	内外面ヨコナナカ。	中世3期。 15世紀前葉～ 中葉。
165	第38回	備前	壺	C-4区 褐灰色土層	3mm人の砂粒 含む。	(外)褐色 (内)褐色 密良好	底径20cm 前後	平底。体部との境は肥厚 する。	内外面ヨコナナカ。	底部
166	第38回	備前	鋤鉢	C-5区 褐灰色土層	1mm人の砂粒 含む。	(外)褐色灰 色 (内)褐色灰 色 密良好	LJ径:28.3	口縁部内外ヨコナ ナカ。無輪で底縁はま っている。	168と同一個 体か。	1684年 13世紀前葉～ 中葉。
167	第38回	備前	鋤鉢	B-5-6区 褐灰色土層	1mm人の砂粒 含む。	(外)褐色灰 色 (内)褐色灰 色 密良好	口径:27.5	口縁部は上下に肥大化 している。	内面に2本1組の条 溝。	166と同一個 体か。 15世紀前葉～ 中葉。
168	第38回	備前	鋤鉢	褐灰色土層	1mmの大砂粒 含む。	(外)褐色灰 色 (内)褐色灰 色 密良好	底径:12.4	平坦な底部より体部が斜 上方へ向け直ぐ立ち上が る。	内面に条溝が削られ ている。	166と同一個 体か。 15世紀前葉～ 中葉。
169	第38回	箱戸・ 美濃	深皿	C-6区 褐灰色土層	微密良好	底部の赤褐色に寸 リーパ黄色の指 痕。	口径:26.0	大きめ開き気味に立ち上が り、口縁部は外にぬり出 され凹面が形成される。	外面上に沈線状の凸凹 痕がある。	口縁部
170	第38回	箱戸・ 美濃	深皿	B-5区 褐灰色土層	微密良好	(外)灰白色 (内)灰白色	底径:12.4	甲板の底部より体部が透 かれて字跡が直線的に立 ち上がる。	底部外縁を切る。体 部外側面輪郭ナ。	底部片
171	第38回	箱戸・ 美濃	深皿	A-4区 褐灰色土層	微密良好	内外面灰白色。内 面の一帯にオリー ブ質の軸瘤。	底径:不明	底部と体部の境にボタン 状の脚が取り付けられて いる。	脚部周辺ナ。	底部片
172	第38回	中国 青磁	碗	C-3区 褐灰色土層	微密良好	(外)にぼい黄 色 (内)にぼい黄 色	口径:16.3	口縁部が外反し端部を丸 くおめる。	浅碧青の素地。二次的 火をかけたのか青磁地 にぼい黄色を呈す。	上田D期。14～ 15世紀前葉のもの と考えられる。
173	第38回	中国 青磁	碗	B-5区 褐灰色土層	微密良好	(外)オリーブ色 (内)オリーブ色	口径:16.4 cm前後	口縁部が外反し端部を丸 くおめる。	青白色の素地にいわ ゆる小波模様が施され ている。	上田D期。14～ 15世紀前葉のもの と考えられる。
174	第38回	中国 青磁	碗	褐灰色土層	微密良好	(外)オリーブ色 (内)オリーブ色	高台径:5.7	直立気味のしっかりした 高台をもつ。	内面見込み部分には 文様が施され、高台 底面は無釉である。	14～15世紀代。
175	第38回	中国 青磁	碗	褐灰色土層	微密良好	(外)灰オリーブ色 (内)灰オリーブ色	高台径:6.0	直立気味のしっかりした 高台をもつ。	内面見込み部分には 文様が施され、高台 底面は無釉である。	14～15世紀代。
176	第38回	中国 青磁	碗	褐灰色土層	微密良好	(外)灰オリーブ色 (内)灰オリーブ色	底径8.2cm 前後	直立気味の純底部。	外面上の底部付近に1 条の沈線。	
177	第38回	中国 白磁	皿	C-6区 褐灰色土層	微密不良	(外)灰白色 (内)灰白色	口径:10.2	丸みをもって立ち上がる口 縁部の破片。	透明釉が施されてい る。	178と同一個 体か。
178	第38回	中国 白磁	皿	褐灰色土層	微密不良	(外)灰白色 (内)灰白色	底径:4.15	高台裏に挟りを入れ、底状 を呈する。	体部と底部を施釉した もので、見込みに斜丁 目状の底模様が残る。	森田D群に相 当する。15世紀代。
179	第38回	中国製 黒釉 陶器	碗	C-6区 褐灰色土層	微密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:12.0	体部は内青灰釉に立ち上 がり、口縁部で屈曲させ瀬 出は外反する。	灰白色的素地に模様 が施されている。	16世纪初頭ま でのもの。
180	第42回	土師器	土製 支撑	B-3区 堅地層	1mm以下の砂 粒含む。	(外)灰褐色 (内)灰褐色 良	-	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	強いナテ渦巻。	
181	第42回	土師器	壺	B-4区 堅地層	1mm以下の砂 粒含む。 やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色 良	口径:13.1	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	底部外側手持ちハラ ケズ。	
182	第42回	土師器	壺	C-3区 堅地層	1mm以下の砂 粒含む。	(外)灰褐色 (内)灰褐色 良	口径:16.3 cm前後	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	体部外側が横方向の ナテ、内面に横方向の ハラケズ。	
183	第42回	土師器	壺	B-3区 堅地層	1mm以下の砂 粒含む。 やや不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色 良	口径:16.6 cm前後	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	口縁端小片
184	第42回	土師器	不明品	C-3区 堅地層	1mm以下の砂 粒含む。	(外)にぼい黄 色 (内)にぼい黄 色 良	口径:26cm 前後	体部が直立に立ち上が り、口縁部で横外反する。	体部外側が横方向の ナテ、内面に横方向の ハラケズ。	高広昌A・B期
185	第43回	須恵器	壺蓋	B-3区 堅地層	0.5mm人の砂 粒含む。 密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:16.3 cm前後	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	高広昌A・B期
186	第43回	須恵器	壺蓋	B-3区 堅地層	3mm以下の砂 粒含む。 密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:13.3 cm最大径:16.4	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	高広昌A・B期
187	第43回	須恵器	壺蓋	B-3・C-3 区 堅地層	1mm以下の砂 粒含む。 密やや良好	(外)灰 色 (内)灰 色	口径:15.4 cm前後	口縁部が下重し、頂部 に輪状模様をもつ。	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	高広昌B期頃
188	第43回	須恵器	壺蓋	B-4区 堅地層	0.5mm人の砂 粒含む。 密やや良好	(外)灰 色 (内)灰 色	口径:15.8 cm前後	口縁部が下重し、頂部 に輪状模様をもつ。	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	高広昌B期頃
189	第43回	須恵器	壺蓋	B-3・C-3 区 堅地層	2mm以下の砂 粒含む。 密やや良好	(外)灰 色 (内)灰 色	口径:15.2 cm前後	口縁部が下重し、頂部 に輪状模様をもつ。	丸みをもつて立ち上がる口 縁部の破片。	高広昌B期頃

遺物番号	押団番号	品目	部種	出土地点 土層	粘土焼成	色調(外) 色調(内)	法量(cm)	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備考
200 第43回 須恵器			H-身	C-3区 整地層	1mm前後の砂 粒含む。 密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:16.0	下垂するU線。	大井部外画面回転ヘリ ケズり。	高広吉B期頃
201 第43回 須恵器			H-身	B-3-4区 整地層	1mm前後の砂 粒含む。 密良好	(外)黄褐色 (内)黄褐色	口径:18.0	体部が丸みをもたらす 直線的に立ち上がり、底部 に両折がつく。	高台外画面はナデ、 ハラ記章あり。底切り かどうかは不明。	高広吉～200に 伴うものか
202 第43回 須恵器			B-3-4,C- 4区 整地層	微細粒含む。 密や良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色		口径:15.9 器高:4.8 高台径:10.35	体部が丸みをもたらす曲 線的に立ち上がり、底部 にハラ字状の凸合がつく。	高台外画面はナデ、 ハラ記章あり。底切り かどうかは不明。	高広吉～200に 伴うものか
203 第43回 須恵器			H-身	C-4区 整地層	2mm以下の砂 粒含む。 密や不良	(外)灰褐色 (内)黄褐色	口径:15.4 器高:5.1 高台径:8.1	体部が丸みをもたらす曲 線的に立ち上がり、底部 にハラ字状の凸合がつく。	高台外画面に静止余 地有。	高広吉～200に 伴うものか
204 第43回 須恵器			H-身	C-4区 整地層	1mm前後の砂 粒含む。 密や不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:13.8 器高:4.5 高台径:10.35	体部が丸みをもたらす曲 線的に立ち上がり、底部 にハラ字状の凸合がつく。	高台外画面に底切り 裏。	高広吉～200に 伴うものか
205 第43回 須恵器			H-身	C-3区 整地層	2mm以下の砂 粒含む。 密良	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:12.6 器高:4.3 高台径:9.6	体部が直線的に外翻して 伸びる。底部端に低い高 台が残り付けられている。	底部外画面の切り離し は底切引による。	高広吉～V期
206 第43回 須恵器			C-4区 整地層	1mm前後の砂 粒含む。 密や不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色		口径:12.4 器高:4.3 底径:9.5	無高台の珍身。底部が丸 みをもたらす曲線的に立 ち上がり。口縁部が活潑。	底面外画面に底切引 が施されている。	高広吉A期
207 第43回 須恵器			B-3区 整地層	密や不良	(外)オリーブ灰褐色 (内)オリーブ灰褐色		口径:14.3 器高:6.6 底径:9.5	無高台の珍身。底部が丸 みをもたらす曲線的に立 ち上がり。口縁部が活潑。	底部外画面に静止余切 引が施されている。	高広吉A期
208 第43回 須恵器			B-3区 整地層	密不良	(外)灰褐色 (内)灰褐色		口径:14.6 器高:7.2 底径:11.2	平底の珍身。底部が丸 みをもたらす曲線的に立 ち上がり。口縁部が活潑。	底部外画面に底切引 が施されている。	高広吉A-B期 に何種の形態 がある。
209 第43回 須恵器	走		B-3,C-4 整地層	1mm前後の砂 粒含む。 密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色		口径:16.4	野部が強く張り出し、口縫 は外反する。	口縫部外画面西側ナデ。 底部外画面心地良鏡。 外張タクミ。	口縫部
210 第43回 須恵器	走		C-3区 整地層	1mm前後の砂 粒含む。 密良好	(外)灰褐色 (内)黄褐色		口径:14.6	小型の壺蓋類。口縫部を 肥厚させ、四面を形成す る。	外画面回転ナデ。	口縫部
211 第43回 須恵器	車		C-3区 整地層	密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色		口径:11.9	斜面上に向け真っ直ぐに 立ち上がる口縫の破片。	口縫部外画面に2条の 横線。	

第3表 指定寺跡出土金属製品・鉄滓觀察表

遺物番号	押団番号	品目	法 量				備 考	
			出土地点 土層	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
2 第5回		錢貨	SB01. PT 3・4	錢徑 2.35mm		錢厚 1.30mm	残存重量 1.4	無東元寶
6 第9回		鐵滓	SB02. PT 1	3.2	2.4	1.6	17.3	磁石に付着する。
7 第9回		鐵滓	SB02. PT 2	3.4	2.2	1.65	9.5	磁石に付着しない。
50 第22回		鐵滓	SK05	5.1	3.8	2.5	50.5	磁石に付着しない。
185 第40回		人刀	C-3区 褐灰色土層	6.0	3.2	0.6	12.1	
186 第40回		鐔	C-4区 褐灰色土層	5.8	3.5	1.1	48.5	磁石に付着しない。
187 第40回		劫鍊車?	C-3区 褐灰色土層	4.35	-	0.6	11.5	
188 第40回		不明品	C-4区 褐灰色土層	8.5	3.0	0.4	11.6	復元直徑11.4cm前後
189 第40回		不明品	C-4区 褐灰色土層	8.2	1.1	0.5	4.5	
190 第40回		輪形釗治淨	B-3区 褐灰色土層	7.0	6.4	3.9	181.8	磁石に付着しない。底部に少 数の付着が認められる。
191 第40回		鐵滓	C-5区 褐灰色土層	4.6	3.7	3.2	42.3	磁石に付着しない。
212 第44回		輪形釗治淨	C-4区 整地層	5.8	5.1	3.0	109.1	磁石に付着する。底部に少 数の付着が認められる。

第4表 梵定寺遺跡出土石器観察表

遺物番号	拂岡番号	品目	石材	出土地点	法量			備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
180	第39図	石歯	黒曜石	C-4区 褐色灰色土層	残存長 2.3	6.0	2.2	0.8 四基無茎式
181	第39図	打製石斧	流紋岩	C-6区 褐色灰色土層	残存長 10.2	刃部幅 4.9	2.4	134.5
182	第39図	石製丸柄	無品質流紋岩 またはトカライト	B-4区 褐色灰色土層	表面幅 21.19mm 裏面幅 30.32mm	表面幅 43.96mm 裏面幅 45.31mm	8.13~9.21mm	24.9 3箇所に滑り孔。
183	第39図	不明品	燧石	C-3区 褐色灰色土層	8.3	5.1	2.9	32.7 表裏が使用により滑らか。
184	第39図	砥石	凝灰岩	C-2・3区 褐色灰色土層	14.7	7.7	7.5	1250 使用部分が埋む。

第5表 梵定寺遺跡遺跡出土木器観察表

遺物番号	拂岡番号	品目	樹種	出土地点	法量			備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
3	第5図	柱根	不明	SB-01, PT12	残存長 51.3	9.6	8.5	丸太材なのか、角材なのか不明。
8	第9図	柱根	不明	SB-02, PT41	残存長 23.7	9.8	8.4	丸太材なのか、角材のか不明。

第6表 平成10年度梵定寺遺跡出土中世陶器一覧表

青磁碗									青磁直壺											
達B0	達B1	達B2	達B3	達B4	雷C1	雷C2	雷C3	龍D	龍E	景	不明その他	龍IV	絞花A	絞花B	竈	不明				
												破片 11								
4				7				券符底の碗 1												
白磁皿				青花碗				青花皿												
A	B	C	D	E1	E2	不明	その他	B	C	D	E	華南	不明	B1	C	華南C	B2	E	不明	その他
						8		5										1		
朝鮮工窯									東南アジア					国産品・その他				備考		
天目	褐釉	その他の中国製品	中国製品合計	範皿	瓶	不明														
4	2		42		1															
														中世復古器 5 十輪器 振鉢 2 綠釉陶器 5 瀬戸灰釉折絆深腹 7 瀬戸灰釉天目 1 瀬戸灰釉皿 3 肥前系陶器 5 肥前系陶器(岸駿系) 2 備前小豆 3 備前小搖鉢 17 備前青花瓶 128 益器系青花瓶 15				その他不明陶器・近現代の陶磁器も出土		

第7表 禅定寺遺跡土坑一覧表

名称 番号		検出地点		平面形	規模(cm) (上縁長軸×下縁・深さ最大)	出土遺物	性格	備考
SK-01	第13回	B-5区		形の崩れた 隅丸方形	133×118×35.0	上師器×36・須恵器×9・上師 質土器×52	不明	
SK-02	第15回	C-5区	正な円形		215×190×88.5	上師器×6・須恵器×13・上師 質土器×4	不明	土坑を取り囲むように5 つのビットを検出
SK-03	第17回	C-4区	円形		80.0× 20.7	上師器×24・須恵器×6・上師 質土器×23・蛭石×1	不明	SK-03(新)・SK-04(古)
SK-04	第19回	C-3-4区	長方形		148以上×78×20.7	上師器×28・須恵器×8・上師 質土器×10	上構基?	SK-03(新)・SK-04(古)
SK-05	第21回	C-3区	楕円形		162×98×20.9	上師器×40・須恵器×13・上 師質土器×44・鐵滓×1	不明	
SK-06	第23回	B-C-7区	形の崩れた 楕円形		97×78×15.0		不明	
SK-07	第41回	第2遺構面 B-3区	円形		160× 47.8		不明	第2遺構面

第8表 SB01ビット一覧

名前	直徑 最大	直徑 最小	深さ 最大	出土遺物	遺物 検出番号	備考	名前	直徑 最大	直徑 最小	深さ 最大	出土遺物	遺物 検出番号	備考
PT1	39	29	38.7				PT12	43	-	46.8	柱×1		第5回3
PT2	27	26	30.3	縄文土器×1			PT13	30	-	24.7			
PT3	39	-	36.5	須恵器×2・土師質土器 ×2・銛頭×1	第5回1・ 第5回2	地脚跡か	PT14	26	26	20.7			
PT4	39	-	26.0				PT15	27	27	23.0			張り出し
PT5	31	26	27.5				PT16	27	26	21.5			張り出し
PT6	31	30	41.1	土師器×1			PT17	36	-	30.7	須恵器×1・土師器×15		張り出し
PT7	33	30.5	11.9				PT18	28	-	16.7			張り出し
PT8	43	42	51.4	石器×1			PT19	39	35	49.2			張り出し
PT9	47	44	62.4	須恵器×1・尖底器×1									
PT10	27	-	20.0										
PT11	32	-	40.9										

第9表 SB01各ビット間距離一覧表

単位(cm)

建物桁行	PT1-PT2 308(10.2)	PT12-PT9 310(10.2)	PT12-PT10 320(10.6)	PT11-PT12 330(10.9)	PT2-PT3 245(8.1)	PT2-PT4 242(8.0)	PT9-PT8 240(7.9)
	PT10-PT8 225(7.4)	PT11-PT8 215(7.1)	PT3-PT5 243(8.0)	PT4-PT5 245(8.1)	PT8-PT7 241(8.0)		
建物梁間	PT1-PT14 195(6.4)	PT1-PT13 224(7.4)	PT5-PT6 240(7.9)	PT6-PT7 158(5.2)	PT4-PT7 165(5.4)	PT13-PT12 190(6.3)	
建物～張り出し L部まで	PT1-PT15 123(4.1)	PT2 PT16 119(3.9)	PT3-PT17 132(4.4)	PT3-PT18 133(4.4)	PT4-PT17 124(4.1)	PT4-PT18 125(4.1)	PT5-PT19 121(4.0)
張り出し部分 桁行	PT15-PT16 315(10.4)	PT16-PT17 255(8.4)	PT16-PT18 243(8.0)	PT17-PT19 240(7.9)	PT18-PT19 253(8.3)		

※右( )内の単位は尺。1尺=30.3cmで計算。

第10表 SB02ピット一覧

名称	直径 最大	直径 最小	深さ 最大	出土遺物	遺物 種類番号	備考	名称	直径 最大	直径 最小	深さ 最大	出土遺物	遺物 種類番号	備考
PT1	63	47	20.7	上飾器×4・須恵器×4・ 鉄滓×1	第9図6		PT22	35	33	28.8			張り出し
PT2	-	33	38.0	上飾器×6・鉄滓×1	第9図7		PT23	30	28	17.3			張り出し
PT3	-	-	-	SK-04と切り 合う。未検出			PT24	30	28	44.0			張り出し
PT4	36	35	40.2	土師質土器×1			PT25	21	20	14.6			張り出し
PT5	32	30	76.5	上飾器×4・須恵器×1			PT26	53	49	24.0			張り出し
PT6	41	32	51.0				PT27	29	26	21.8			張り出し
PT7	32	29	58.4				PT28	22	22	36.5	須恵器×3・土師器×1		張り出し?
PT8	33	33	43.4				PT29	28	25	35.3			張り出し?
PT9	38	30	40.8	須恵器×1			PT30	18	18	22.0			張り出し?
PT10	34	33	30.8				PT31	31	26	46.7	須恵器×2		張り出し?
PT11	41	39	40.5	I飾器×5・須恵器×1			PT32	30	26	34.0			張り出し?
PT12	36	36	33.2	土師質土器×1			PT33	24	22	18.0			張り出し?
PT13	39	33	27.5			張り出し	PT34	23	20	5.1			張り出し?
PT14	36	30	14.5			張り出し	PT35	29	26	19.8			張り出し?
PT15	53	-	39.2	須恵器×2・上飾器×15	第9図4-5	張り出し	PT36	28	26	18.1			張り出し?
PT16	31	25	34.3			張り出し	PT37	33	32	45.8			張り出し?
PT17	34	29	53.0	須恵器×3・七輪器×1・ 土師質土器×1		張り出し	PT38	27	27	20.6			張り出し?
PT18	34	-	56.8			張り出し	PT39	37	37	54.2			張り出し?
PT19	17	16	24.6			張り出し	PT40	28	26	31.1			張り出し?
PT20	33	28	30.1			張り出し	PT41	28	27	65.6	柱×1	第9図8	張り出し?
PT21	26	26	49.5			張り出し	PT42	41	37	33.6			張り出し?

第11表 SB02各ピット間距離一覧表

単位(cm)

建物桁行	PT1-PT2	PT10-PT11	PT9-PT8	PT2-PT3	PT11-PT12	PT8-PT7	PT3-PT4
	435(14.4)	421(13.9)	440(14.5)	(320)(10.6)	325(10.7)	322(10.6)	(317)(10.5)
	PT12-PT5 326(10.8)	PT7-PT6 328(10.8)					
	PT1-PT10 220(7.3)	PT2-PT11 260(8.6)	PT3-PT12 (246)(8.1)	PT4-PT5 263(8.7)	PT10-PT9 228(7.5)	PT11-PT8 230(7.6)	PT12-PT7 232(7.7)
建物梁間	PT5-PT6 228(7.5)						
建物～張り出し部まで	PT1-PT13 130(4.3)	PT2-PT14 125(4.1)	PT3-PT15 (121)(4.0)	PT4-PT16 110(3.6)	PT4-PT19 132(4.4)	PT6-PT20 100(3.3)	PT6-PT22 110(3.6)
	PT7-PT23 110(3.6)	PT8-PT24 112(3.7)	PT9-PT25 125(4.1)	PT10-PT27 325(10.7)			
張り出し部桁行	PT13-PT14 420(13.9)	PT25-PT24 440(14.5)	PT14-PT15 315(10.4)	PT24-PT23 325(10.7)	PT15-PT16 337(11.1)	PT23-PT22 324(10.7)	PT25-PT26 286(9.4)
	PT16-PT17 75(2.5)	PT16-PT18 90(3.0)	PT22-PT21 115(3.8)				
張り出し部梁間	PT19-PT18 98(3.2)	PT19-PT17 120(4.0)	PT20-PT21 110(3.6)	PT26-PT27 335(11.1)			

※右( )内の単位は尺。1尺=30.3cmで計算。

第12表 SB03ピット一覧

名 称	直 径 最大	直 径 最 小	深 さ 最 大	出 土 遺 物	遺 物 種 别番 号	備 考	名 称	直 径 最 大	直 径 最 小	深 さ 最 大	出 土 遺 物	遺 物 種 别番 号	備 考
PT1	37	37	27.0	須恵器×1・土師器×2			PT13	30	-	38.8 ×2	土師器×2・土師質土器		
PT2	42	39	36.5	土師器×4			PT14	24	-	31.0			
PT3	34	34	27.2	土師質土器×1			PT15	26	-	42.1			
PT4	35	34	23.2				PT16	30	25	34.2			
PT5	34	33	32.9				PT17	30	26	36.2 ×1	土師器×1・土師質土器		
PT6	37	33	19.1				PT18	32	-	30.4			
PT7	20	16	21.5				PT19	38	-	33.5			
PT8	14	-	17.3				PT20	33	27	42.3			
PT9	20	20	17.3				PT21	22	20	39.7	須恵器×1・土師器×2・ 土師質土器×1		
PT10	23	22	19.0				PT22	27	19	25.2			
PT11	24	-	33.3				PT23	26	24	29.7	土師質土器×2	第10図9	
PT12	27	27	26.2	土師質土器×1									

第13表 SB03各ピット間距離一覧表

単位(cm)

建物桁行	PT1-PT2 226(7.5)	PT17-PT18 225(7.4)	PT17-PT19 210(6.9)	PT16-PT14 195(6.4)	PT16-PT15 205(6.8)	PT16-PT13 215(7.1)	PT2-PT3 265(8.7)
	PT18-PT20 260(8.6)	PT18-PT21 253(8.3)	PT19-PT20 280(9.2)	PT19-PT21 273(9.0)	PT14-PT11 278(9.2)	PT14-PT12 263(8.7)	PT15-PT11 265(8.7)
	PT15-PT12 253(8.3)	PT13-PT11 257(8.5)	PT13-PT12 242(8.0)	PT3-PT4 247(8.2)	PT3-PT5 250(8.3)	PT20-PT22 245(8.1)	PT20-PT23 247(8.2)
	PT21-PT22 257(8.5)	PT21-PT23 260(8.6)	PT11-PT10 240(7.9)	PT12-PT10 253(8.3)	PT4-PT6 222(7.3)	PT5-PT6 215(7.1)	PT22-PT7 228(7.5)
	PT22-PT8 238(7.9)	PT23-PT7 222(7.3)	PT23-PT8 234(7.7)	PT10-PT9 232(7.7)			
建物梁間	PT1-PT17 175(5.8)	PT2-PT18 175(5.8)	PT2-PT19 162(5.3)	PT3-PT20 170(5.6)	PT3-PT21 190(6.3)	PT4-PT23 194(6.4)	PT4-PT22 175(5.8)
	PT5-PT23 165(5.4)	PT5-PT22 150(5.0)	PT6-PT7 155(5.1)	PT6-PT8 155(5.1)	PT17-PT16 190(6.3)	PT18-PT14 181(6.0)	PT18-PT15 175(5.8)
	PT18-PT13 175(5.8)	PT19-PT14 190(6.3)	PT19-PT15 190(6.3)	PT19-PT13 186(6.1)	PT20-PT12 182(6.0)	PT20-PT11 195(6.4)	PT21-PT12 162(5.3)
	PT21-PT11 177(5.8)	PT22-PT10 192(6.3)	PT23-PT10 176(5.8)	PT7-PT9 195(6.4)	PT8-PT9 197(6.5)		

※右( )内の単位は尺。1尺=30.3cmで計算。

第14表 SB04ピット一覧

名称	直径 最大	直径 最小	深さ 最大	出土遺物	遺物 種別番号	備考	名称	直径 最大	直径 最小	深さ 最大	出土遺物	遺物 種別番号	備考
PT1	32	-	15.3				PT13	39	39	30.2	須恵器×1・七輪器×2・土師質土器×2		
PT2	31	-	38.8	須恵器×5・土師器×4・土師質土器×8	第11回13		PT14	-	-	-			張り出し
PT3	-	-	-		SK-04と切り合ふ。木棲出		PT15	28	25	31.3	須恵器×1・土師器×1		
PT4	40	35	38.8	土師器×13	第11回 J1+12		PT16	29	20	36.6			張り出し
PT5	48	-	43.7	土師器×3・須恵器×1			PT17	22	22	19.9			張り出し
PT6	24	-	14.2	土師質土器×3			PT18	23	21	24.0	土師器×3		張り出し
PT7	23	22	40.3				PT19	15	15	20.0			張り出し
PT8	41	-	26.8				PT20	38	34	22.6			張り出し
PT9	40	-	33.6	土師器×1	第11回10		PT21	19	18	8.9			張り出し
PT10	33	28	26.2				PT22	15	14	26.7			張り出し
PT11	27	26	38.6	須恵器×1・土師器×1・土師質土器×1			PT23	29	29	42.5	土師器×7		SB-04?
PT12	26	25	39.3	土師器×4・土師質土器×2									

第15表 SB04各ピット間距離一覧表

単位(cm)

建物桁行	PT1-PT3 (226)(7.5)	PT2-PT3 (215)(7.1)	PT14-PT13 (225)(7.4)	PT3-PT4 (245)(8.1)	PT13-PT12 250(8.3)	PT4-PT5 240(7.9)	PT12-PT11 245(8.1)
	PT5-PT6 230(7.6)	PT5-PT7 238(7.9)	PT11-PT10 217(7.2)				
建物架間	PT6-PT8 240(7.9)	PT6-PT9 246(8.1)	PT7-PT8 230(7.6)	PT7-PT9 235(7.8)	PT1-PT15 218(7.2)	PT2-PT15 214(7.1)	PT8-PT10 186(6.1)
	PT9-PT10 176(5.8)	PT15-PT14 (240)(7.9)					
建物～張り出し部まで	PT1-PT16 161(5.3)	PT2-PT16 166(5.5)	PT3-PT17 (190)(6.3)	PT4-PT18 181(6.0)	PT4-PT19 190(6.3)	PT5-PT20 205(6.8)	PT6-PT21 200(6.6)
	PT6-PT22 190(6.3)	PT7-PT21 210(6.9)	PT7-PT22 198(6.5)				
張り出し部桁行	PT16-PT17 235(7.8)	PT17-PT18 241(8.0)	PT17-PT19 245(8.1)	PT18-PT20 239(7.9)	PT19-PT20 235(7.8)	PT20-PT21 213(7.0)	PT20-PT22 225(7.4)
P23からの梁間	PT5-PT23 232(7.7)	PT23-PT11 213(7.0)					

※右( )内の単位は尺。1尺=30.3cmで計算。

第16表 挖立柱建物以外の遺物出土ピット一覧表

単位(cm)

ピット番号	区	直徑 最大			直徑 最小			深さ 最大			出土遺物	遺物 番号	ピット番号	区	直徑 最大			直徑 最小			出土遺物	遺物 番号			
		P1	A-B2	36	32	57.7	P2	B2	29	-	33.5	土師質土器×1	P21	B5	22	22	22.0	上師器×8	P22	B5	21	19	20.3	土師器×1	P23
P3	B2	29	-	26	35.6	土師器×3	P4	B2	23	23	26.5	須恵器×1	P24	B5	20	20	26.8	土師質土器×2	P25	B5-6	22	20	33.2	土師質土器×7	P26
P5	C2	22	-	21	11.7	上師器×2	P6	C2	25	24	18.7	上師質土器×1	P27	B-C5	29	29	39.7	上師器×1	P28	C5	-	30	25.6	上師器×1	P29
P7	C2	35	-	28	47.4	土師器×4	P8	C2	20	19	17.9	土師器×1	P30	C5	30	29	13.4	須恵器×2・土師器×1・土師質土器×3	P31	C5	29	25	40.8	土師器×2・土師質土器×2	P32
P9	B3	22	-	21	29.6	土師器×3・土師質土器×1	P10	B4	32	31	15.5	須恵器×1	P33	C5	22	19	38.8	土師器×3・土師質土器×3	P34	C5	28	22	27.8	土師器×2・土師質土器×1	P35
P11	B4	27	-	16	27.9	土師器×3・土師質土器×1	P12	B4	27	27	16.5	土師器×3	P36	B6	29	28	15.8	土師質土器×1	P37	C6	22	22	21.4	土師器×1	P38
P13	B4	33	-	27	42.5	土師器×2・須恵器×2	P14	B4	16	15	33.0	上師器×4	P39	C6	33	28	29.0	土師器×1	P40	C6	22	20	12.9	須恵器×1	P41
P15	B4	17	-	26.1	上師器×2・土師質土器×1	P16	B4-5	39	29	13.0	上師器×1・上師質土器×1	P42	C6	21	21	41.0	土師質土器×1	P43	C6	22	22	21.4	土師器×1	P44	
P17	C4	20	16	37.0	上師器×3	P18	C4	48	36	40.4	須恵器×2・土師器×1・土師質土器×4	P45	C6	22	20	12.9	須恵器×1	P46	C6	22	22	21.4	土師器×1	P47	
P19	C4	29	-	28	46.5	土師器×1	P20	B5	21	19	15.4	土師器×1・土師質土器×1	P48	C6	33	28	29.0	土師器×1	P49	C6	22	20	12.9	須恵器×1	P50

## 第6章 自然科学的分析

### 禅定寺遺跡出土木製品の樹種調査結果

株吉田生物研究所 汐見 真  
京都造形芸術大学 岡田 文男

1. 資料 資料は出土した木製品2点である。
2. 方法 刃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、プレパラートを作成する。このプレパラートを顕微鏡で観察して樹種を同定する。
3. 結果 樹種同定結果の表と顕微鏡写真を示し、以下に主な解剖学的特徴を記す。

#### 第5図3（柱根） ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

環孔材である。木口では円形ないし梢円形で大体単独の大導管（～500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔隙部を形成している。孔隙外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小導管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では導管は單穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の單列放射組織がみられ、軸方向要素として導管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維がみられる。

以上の組織的特徴からクリと同定した。

#### 第9図8（柱根） ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

環孔材である。木口では円形ないし梢円形で大体単独の大導管（～500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔隙部を形成している。孔隙外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小導管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では導管は單穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の單列放射組織がみられ、軸方向要素として導管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維がみられる。

以上の組織的特徴からクリと同定した。

#### 【参考文献】

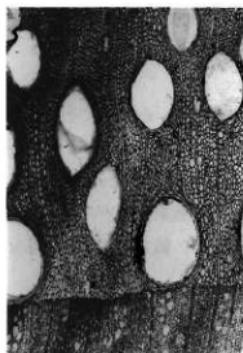
- 島地謙・伊藤隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版 1988年  
島地謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社 1982年  
伊藤隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記録Ⅰ～IV」京都大学本質研究所 1995年～  
北村資料・村田源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社 1979年  
【使用顕微鏡】

Nikon MICROFLEEX UFX-DX Type115

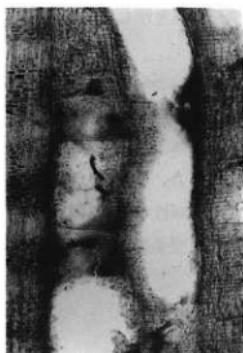
押定寺遺跡出土木製品樹種同定表

資料番号	報告書掲載番号	品名	樹種
188	第5図3	柱根	ブナ科クリ属クリ
32	第9図8	柱根	ブナ科クリ属クリ

第5図3 (柱根) ブナ科クリ属クリ



木口×40

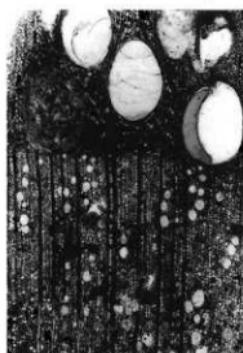


柱目×40

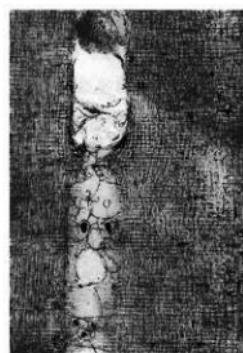


板目×40

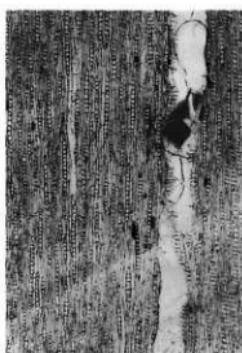
第9図8 (柱根) ブナ科クリ属クリ



木口×40



柱目×40



板目×40

## 第7章 追補

昭和58（1983）年度八雲幼稚園移転新築  
工事に伴う禅定寺遺跡発掘調査概要報告



## 例　　言

1. 本章は、八雲村の依頼を受けて八雲村教育委員会が昭和58（1983）年度に実施した八雲村幼稚園移転新築工事予定地内の埋蔵文化財発掘調査の概要を取りまとめたものである。

報告書の作成にあたっては、松江市と合併する以前の平成15年度に作成し、印刷については合併後の平成18年度に行った。従って、本文の一部に合併前の内容の記述があることをお断りしておくる。

2. 本章で扱う遺跡の所在地及び調査面積は次のとおりである。

押定寺遺跡　島根県松江市八雲町東岩坂110番地外9筆

本調査面積　A区　約300m<sup>2</sup>

B・C区　約540m<sup>2</sup>

3. 現地調査期間は次のとおりである。

確認調査　昭和58年10月18日～12月10日

本調査　昭和59年1月12日～3月9日

4. 調査組織は以下のとおりである。

### 【昭和58年度】現地調査

調査主体　八雲村教育委員会　教育長　小松正雄

調査指導者　村上勇（現：広島県立美術館）

調査担当者　宮本徳昭（社会教育係）

作業員　石原栄一、石原貞子、石原茂子、石原常子、石原文夫、石原文雄、石原美智子  
石原幸夫、稻田秀夫、岩田悟郎、曾田 稔、為石重徳、外谷幸子、三好澄江

### 【平成15年度】報告書作成

調査主体　八雲村教育委員会　教育長　泉和夫

事務局　三好淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者　川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員　田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

遺物整理　高尾万里子

5. 本章の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表す。（順不同、敬称略。所属は平成15年当時）

広江耕史（島根県教育庁文化財課）、西尼克己・林建亮・池淵俊一・守岡正司（島根県埋蔵文化財発掘調査センター）

6. 本章の編集と執筆は、昭和58年度調査の記録を基に上記の協力者の助言を得ながら川上が行った。よって、掘立柱建物跡については現地を確認したわけではなく、図上で復元したものである。従って、建物跡の軒数等については不正確といわざるを得ない。

7. 本書で使用した方位は磁北を示す。

8. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SB…掘立柱建物跡　P…ピット　SK…土坑　SD…溝　T…トレンチ

SX…性格不明遺構

9. 本遺跡出土遺物及び調査記録は松江市教育委員会で保管している。



## 第1節 調査に至る経緯

八雲村では、村北部を中心に昭和48年以降、民間の住宅団地の開発が相次いだ。これに伴い昭和30年以降減少していた本村の人口は、住宅団地の開発が始まってから毎年100人以上の増加が続いており、今後も県都松江市のベットタウンとして増加の傾向を示している。同時に、児童数も年々増加し、既存の教育施設は既に手狭な状態となっている。今後、益々児童数の増加が見込まれております、施設及び環境面の改善が急務となっている。

これに対処するため、八雲村では小学校の増築工事、中学校・学校給食センターの移転改築工事等が計画された。今回はその第1番目として、八雲幼稚園の移転新築工事を実施することとなった。建設予定場所としては八雲保育所の隣接地にあたる水田・畑地並びに山林部分が選定された。

協議を受けた八雲村教育委員会では、ひとまず開発予定地内の分布調査を実施することとした。建設予定地周辺は、禪定寺古墳群・禪定寺横穴墓群・禪定寺遺跡が存在しており、遺跡の密集地帯として周知されている場所であった。今回の分布調査においては、古墳・横穴等の構造は確認できず、畠地及び水田の耕作土層巾からも遺物等は発見されなかった。しかし、立地や字名から禪定寺遺跡が開発予定地内まで広がっていると考えられることから範囲確認調査の必要を決定し、その旨を八雲村に回答した。

八雲村は、昭和58年10月6日付けで文化財保護法第57条の3の手続きをし、それを受けた八雲村教育委員会も同日付けで文化財保護法第98条の2第1項の手続きを行った。この後、予想以上に遺跡の範囲が広がっていたことから調査期間の延長が必要となり、昭和59年1月24日に発掘調査期間延長の内容変更通知を提出している。

## 第2節 調査の経過

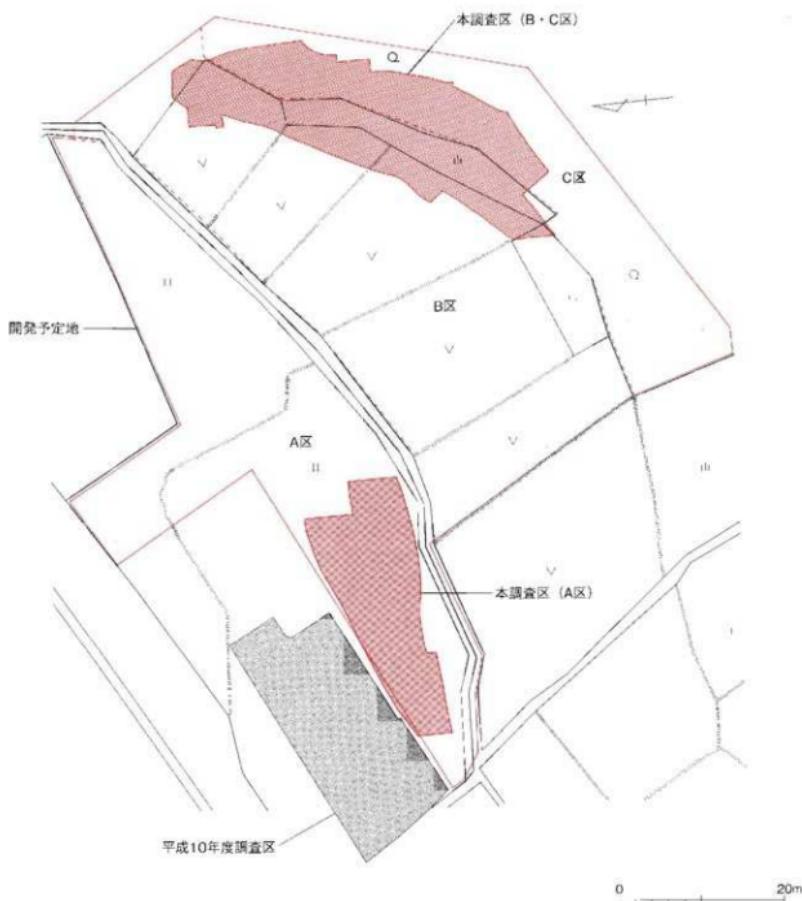
調査はまず、遺跡の範囲と性格を把握し、本調査に備える意味での試掘調査を実施している。工事用基準杭を利用して直線を設け、これと直交するように10×10mのグリッドを組み、グリッド毎に4×4mトレンチ31本を設定した。この後、昭和58年10月18日から掘削作業に取りかかり、必要が認められれば随時トレンチの拡幅を行っている。範囲確認調査が進展していくにつれ、構造・遺物が予想以上に遺存しており、発掘調査期間の延長が必要となった。村との協議で、発掘調査を最優先に実施しながら、遺構の検出されなかったトレンチ周辺については工法を変更して工事に入るとなった。随時遺構の精査・写真撮影を行い、12月10日に試掘調査を終了した。試掘調査の結果、開発予定地の約4分の1にあたる800m<sup>2</sup>の範囲で遺物の散布と柱穴等の遺構が確認されたため、引き続き八雲村教育委員会が主体となり本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は試掘調査結果を基に調査区をA区・B区・C区の3箇所に分け実施している。昭和59年1月12日から表土層を重機により除去することから始め、これと併行して1月14日より手掘りによる掘削作業を開始した。随時遺構の精査、写真撮影を行い、3月9日に全体写真の撮影と撤収作業を行い現地での調査を終了した。

### 第3節 遺跡の概要

今回調査を行った押定寺遺跡は、水田、畑地、及び丘陵斜面に位置している。現地調査では便宜的に水田をA区、畑地をB区、丘陵斜面をC区の3つに分け実施している。レベルは水田に位置するA区が最も低く標高28.25~28.75mを測る。B区は標高31.00m前後、C区が標高35.50m前後である。以下、検出された遺構について区毎に概略を記す。

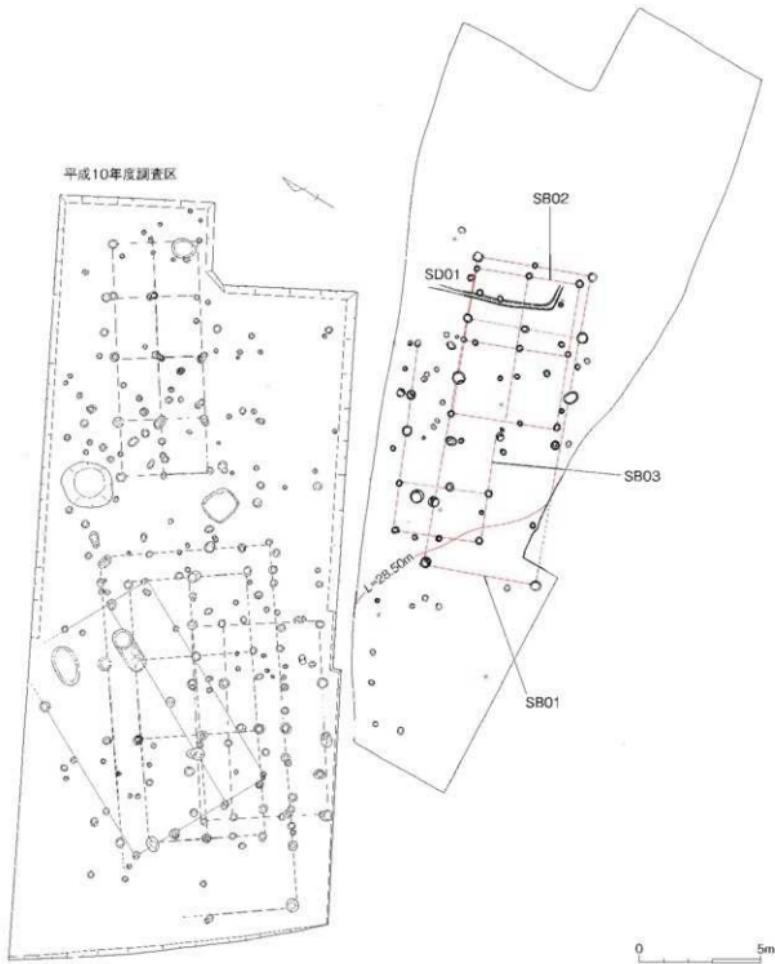
なお、出土遺物については確認調査時に試掘トレンチから出土したものか、本調査時に出土したものか判断できなかったため、区毎に一括して取り扱っている。



第45図 調査区配置図 (1:600)

## 1. A区の調査

A区は標高標高28.25~28.75mを測る水田中に位置する。この場所は第4章で取り扱った平成10年度調査区の隣接地にある。遺構としては溝状遺構1本(SD01)と76個のピットが検出されており、ピットの中から掘立柱建物跡3棟(SB01~03)を復元することができた。ピット内からは上師質土器・中国青磁片などが出土しており、柱根や河原石の根石をもつものもある。また、遺構外からは須恵器・土師器・備前描鉢・中国青磁が出土している。



第46図 A区遺構位置図 (1/200)

### 1. SB01 (第48図)

調査区の標高28.25~28.75mを測る場所に、南西-北東に向か等間隔に並ぶピット6個 (P1~P6) があり、これと対応するピットを選び出してSB01とした。南西側の梁間中央の柱と南東側の桁行の柱を欠いているが、N-70.5°-Eを主軸とする梁間2間×桁行5間の建物跡として復元した。梁間2間×桁行4間の建物跡としても復元できることから、建物跡が重複している可能性も考えられる。梁間2間×桁行5間として復元した場合の規模は、梁間長4.55と4.70m、桁行長12.80と12.90mである。柱間距離は、梁間が2.30~2.40m、桁行が2.50~2.65mを測る。ピットは円形または楕円形を呈し、現状での規模は長軸径で21~59cm、深さ最大20~51cmを測る。SB02・03と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。出土遺物としてはP2より土師器、P6より須恵器、P1~P4・P11の底部より根石と考えられる河原石が出土している。

### 2. SB02 (第49図)

SB01と床面を共有するように柱の並びがあり、SB02とした。北西側の梁間中央の柱を欠いているが、梁間2間×桁行2間の総柱となる可能性もある。規模は梁間長4.15と4.30m、桁行長6.00と6.10mを測る。柱間距離は梁間が2.05~2.10m、桁行が2.97~3.13mを測る。ピットの現状での規模は長軸径で22~32cm、深さ最大26~34cmを測る。SB01・03と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。標高は28.25~28.75mを測り、主軸はN-69°-Eである。

### 3. SB03 (第50図)

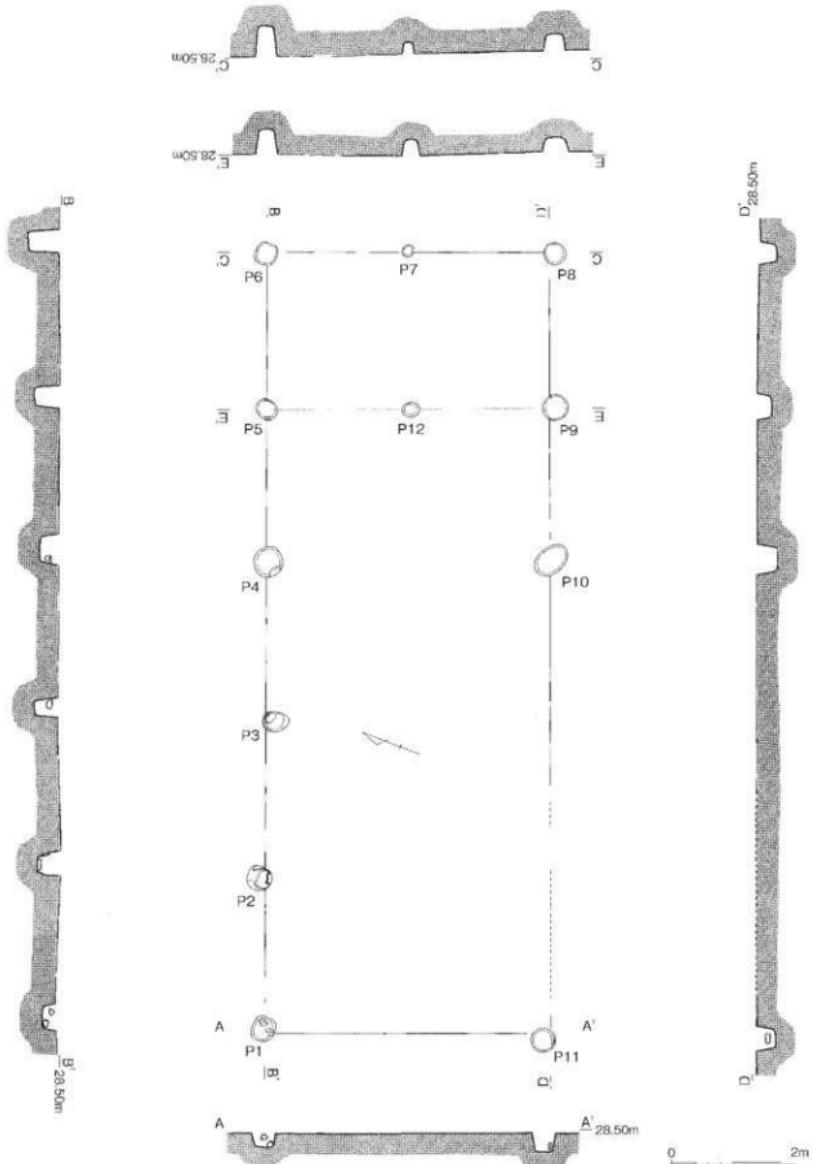
調査区の標高28.25~28.75mを測る場所に、南西-北東に向か一直線に並ぶピット5個 (PT1~PT5) があり、これとほぼ対応するピットを選び出してSB03とした。南西側の梁間と北西側の桁行の柱を欠いているため、杭例とすべきものかもしれない。梁間2間×桁行3間、或いは梁間2間×桁行4間としても復元できるものであり、梁間2間×桁行4間として復元した場合の規模は、梁間長7.70m、桁行長3.40mを測る。柱間距離は梁間側が1.60~1.80m、桁行側が1.48~2.40mを測る。ピットの現状での規模は長軸径で26~38cm、深さ最大16~54cmを測る。SB01・02と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。主軸はN-68°-Eである。出土遺物としてはP8・9の底部より根石と考えられる河原石が出土している。

### 4. A区出土遺物 (第47図)

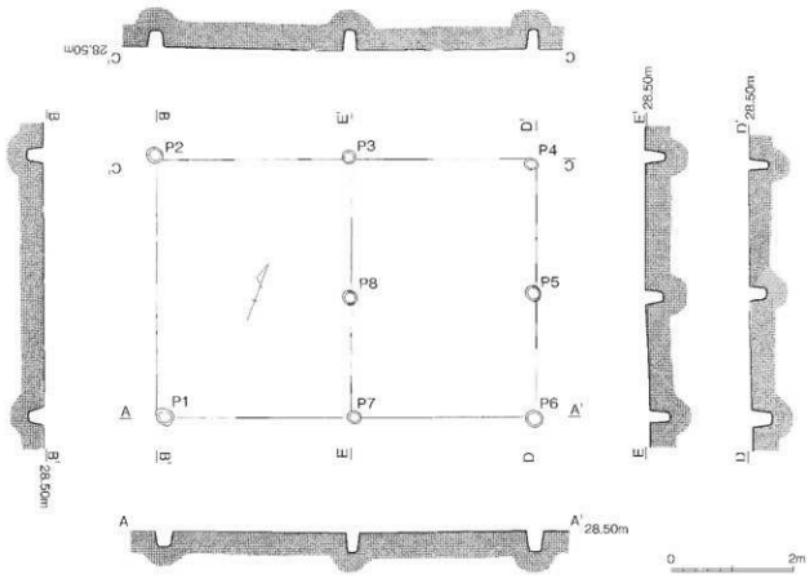
A区からは土師器・土師質土器・中国青磁・柱根などが出土したという記録が残っているが、現在A区出土遺物として確認できるものは須恵器76点、備前焼鉢2点、瓷器系瓶壺類胴部の破片1点だけである。この内、実測可能な須恵器2点を掲載した。1は壺底部の破片である。やや丸みをもつ底部より体部が内渦気味に立ち上がっている。底部外面には「ハ」の字を開くしっかりとした高台が貼り付けられており、高台端部に凹面をもつ。調整は内面の底部から体部にかけて回転ナデによる凹凸痕が顯著である。底径は9.4cmを測る。2は口縁端部が下垂する壺蓋口縁部の破片である。調整は内外面回転ナデである。口径は14.3cmを測る。



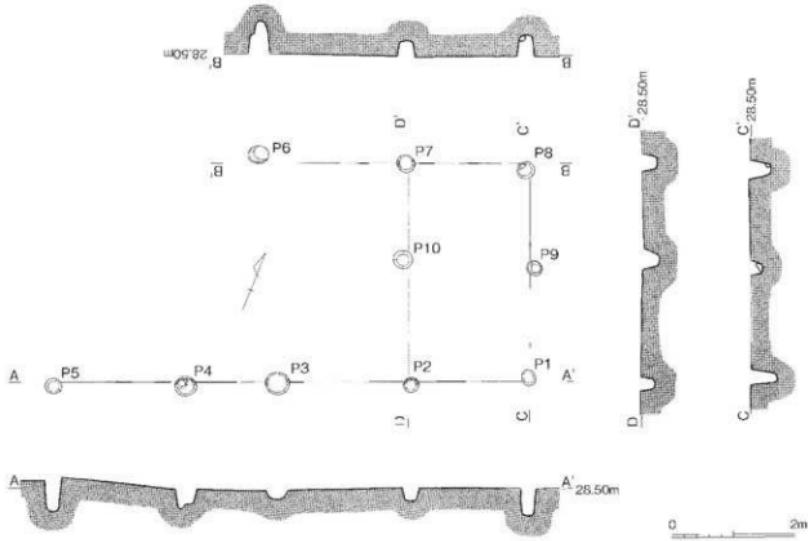
第47図 A区出土遺物実測図 (S=1/3)



第48図 SB01実測図 (S=1/80)



第49図 SB02実測図 (S=1/80)



第50図 SB03実測図 (S=1/80)

## 2. B・C区の調査

現地調査では平坦な畠地部分を便宜的にB区、北西向きの緩斜面をC区として調査を実施している。しかし、B区のうち本調査を実施したのはC区に隣接した南東部分だけであり、ここから検出された遺構はC区と一連のものと考えられるため、ここでは一括して取り扱うこととした。

B・C区からは5つの加工段が見つかっており、その平坦面から溝8本（SD02～09）、土坑2個（SK01・02）、性格不明遺構2個（SX01・02）とピット231個を検出している。検出した多数の柱穴から24棟（SB04～27）の掘立柱建物跡を復元したが、これらは谷側にあたる部分が消失しており、建物の全容を窺えるものは殆どなかった。また、加工段の斜面からも土坑3個（SK03～05）とピット4個が検出されている。以下、各加工段ごとに遺構の概要を記す。

### 1. 第1加工段

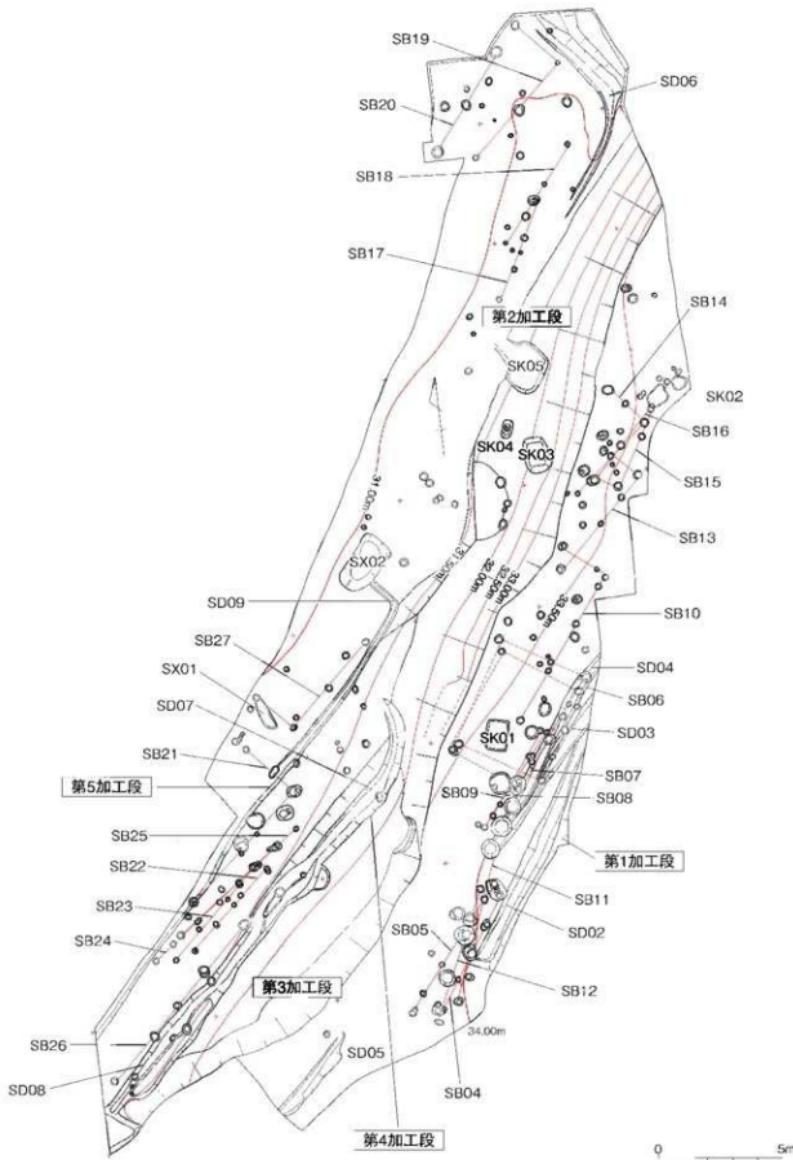
調査区の最高所を南西から北東に向けて横断する加工段であり、標高33.00～34.50mを測る場所に位置する。今回は加工斜面の下に作られた平坦部の調査だけを行っている。平坦部の規模は現状で長さ約40m、幅約5.4mを測る。標高は33.75m前後であり、南東側が高く北西側が低い。この平坦面からは溝4本（SD02～05）、土坑2個（SK01・02）とピット120個を検出しており、ピットの中から掘立柱建物跡13棟（SB04～16）を復元した。

**溝SD02～05（第51図～第54図）** 第1加工段平坦面の標高33.75～34.25mを測る位置で溝4本が検出された。この内SD02～04は複雑に切り合っているが、新旧関係は判らない。これらの溝は掘立柱建物跡に伴う壁帶溝と考えられ、主軸から推定するとSD02に伴う建物はSB04・05・06、SD03はSB07・08、SD04はSB09・10と考えられる。SD05については平坦面の南西に単独で位置しており、ピットも1個しか検出されていない。規模と主軸はSD02が長さ10.68m以上・幅42.5～63.5cm・深さ最大17cm・主軸N-31.5°-E、SD03が長さ7.7m以上・幅26～60cm・深さ最大14cm・主軸N-40.5°-E、SD04が長さ8.89m以上・幅34～60cm・深さ最大11cm・主軸N-36°-E、SD05が長さ4.1m以上・幅35～65cm・深さ最大10cm・主軸N-45°-Eを測る。

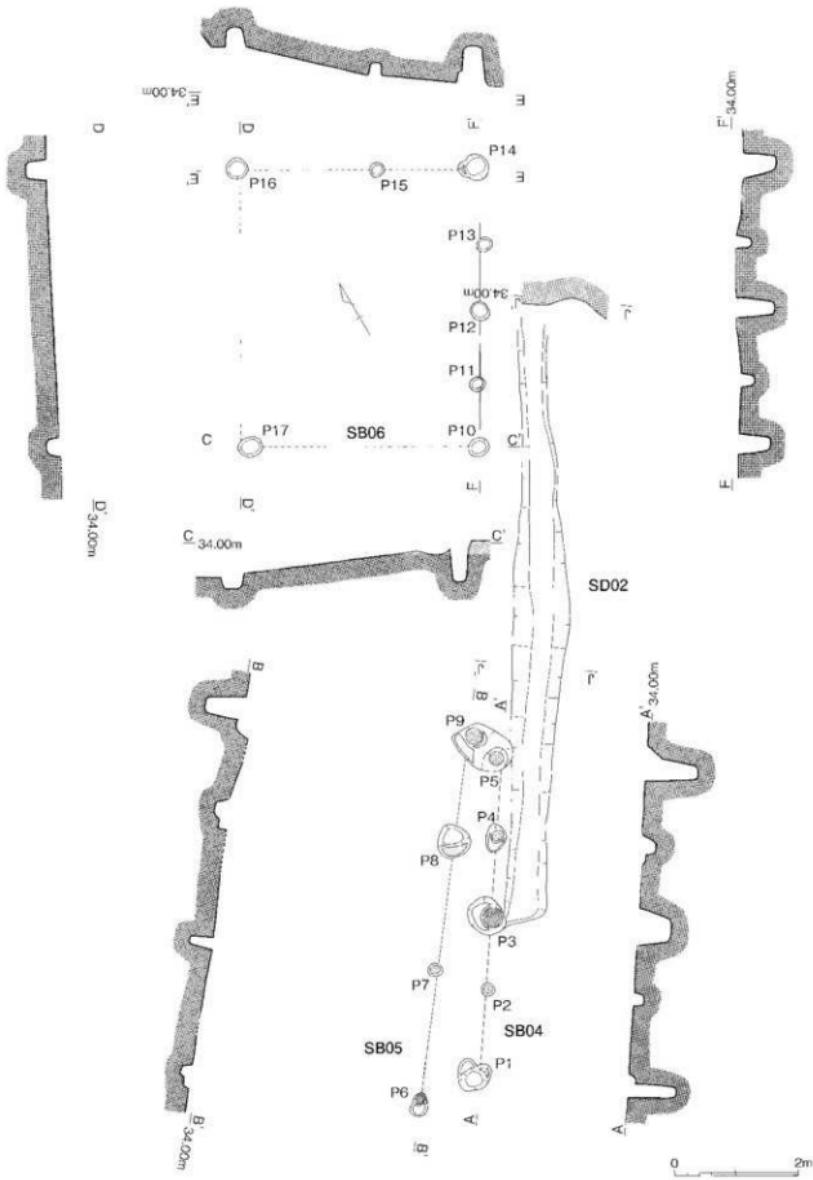
**SB04（第52図）** 第1加工段の標高33.75～34.25mを測る場所に、南西～北東に向等間隔に並ぶピット5個（P1～5）があり、SB04とした。桁行4間の建物として復元できるものであり、長さは5.15m、柱間距離は1.20～1.35mである。ピットの規模は長軸径で23～55cm、深さ最大11～86cmを測る。主軸はN-34°-Eであり、SD02とほぼ同方向に伸びるものである。

**SB05（第52図）** 第1加工段の標高33.75～34.25mを測る場所に、南西～北東に向等間隔に並ぶピット4個（P6～9）があり、SB05とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは6.0m、柱間距離は1.85～2.1mである。ピットの規模は長軸径で22～53cm、深さ最大12～65cmを測る。主軸はN-37.5°-Eであり、SD02とほぼ同方向に伸びるものである。

**SB06（第52図）** 第1加工段の標高33.25～34.25mを測る場所に、南西～北東に向等間隔に並ぶピット5個（P10～14）とこれに直交するピットがあり、SB06とした。桁行4間×梁間2間の建物として復元できるものであり、長さは梁間3.8m、桁行4.6m、柱間距離は桁行1.05～1.25mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で24～45cm、深さ最大21～67cmを測る。主軸はN-30.5°-Eであり、SD02とほぼ同方向に伸びるものである。



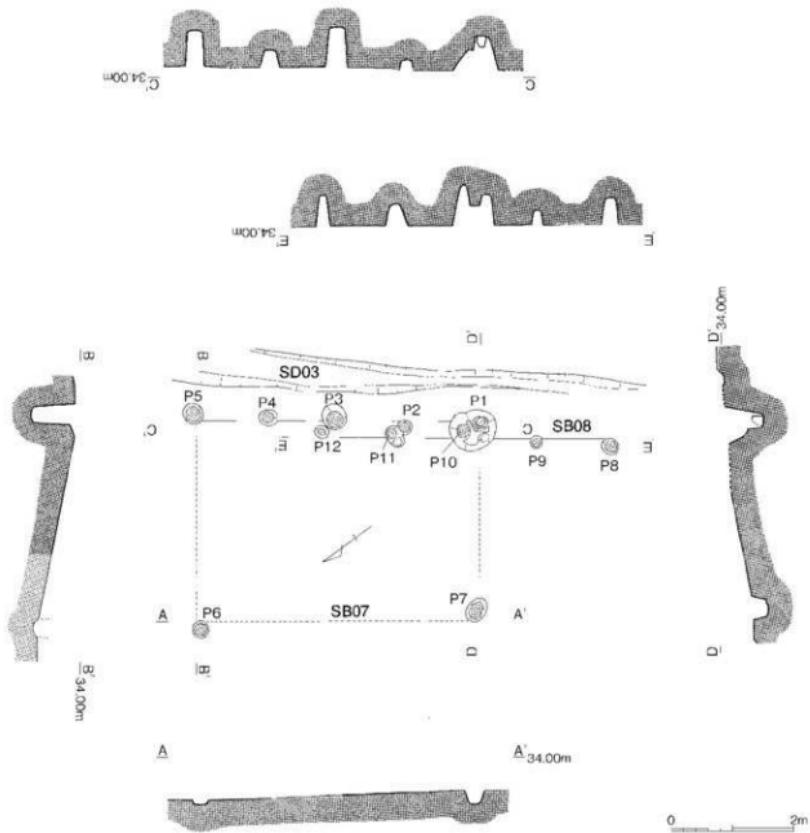
第51図 B+C区遺構位置図 (S=1/200)



第52図 第1加工段SD02、SB04・05・06実測図 (S=1/80)

**SB07 (第53図)** 第1加工段の標高33.25~34.00mを測る場所に、南西-北東に向け等間隔に並ぶピット5個 (P1~P5) とこれに直交するピット2個 (P6・P7) があり、SB07とした。桁行4間×梁間1間の建物として復元できるものであり、長さは梁間3.2と3.5m、桁行4.45と4.65m、柱間距離は桁行1.10~1.25mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で25~43cm、深さ最大9~67cmを測る。主軸はN-36°-Eであり、SD03とはば同方向に伸びるものである。遺物としてはP1より根石と考えられる河原石が出土している。

**SB08 (第53図)** 第1加工段の標高33.75~34.00mを測る場所に、南西-北東に向け等間隔に並ぶピット5個 (P8~P12) があり、SB08とした。桁行4間の建物として復元できるものであり、長さは4.7m、柱間距離は1.15~1.20mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で21~59cm、深さ最大17~67cmを測る。主軸はN-39.5°-Eであり、SD03とはば同方向に伸びるものである。



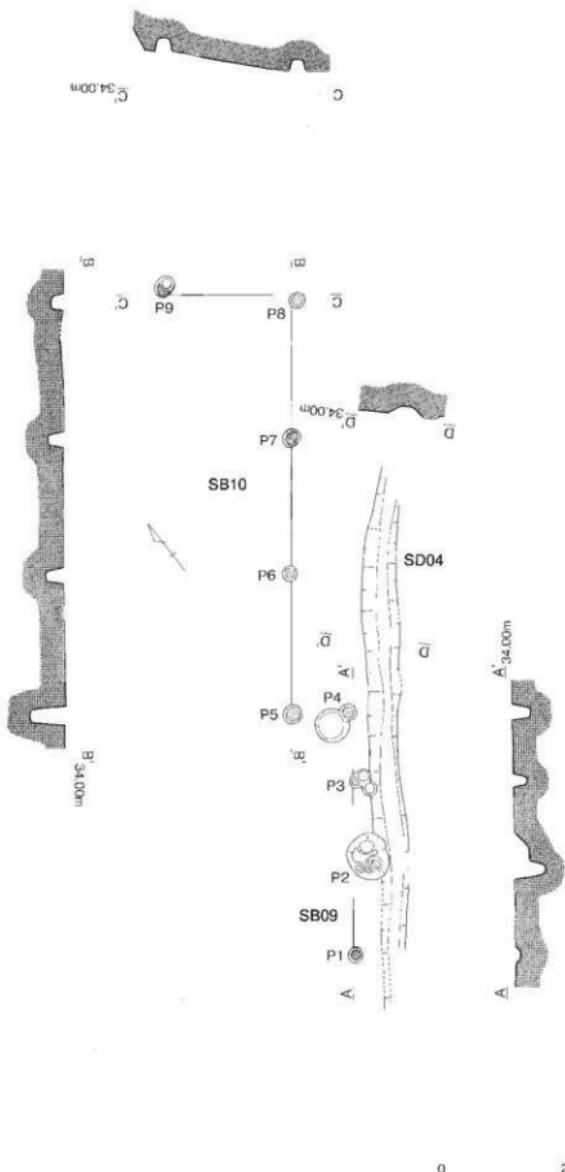
第53図 SD03、SB07・08実測図 (S=1/80)

### SB09 (第54図)

第1加工段の標高33.75~34.00mを測る場所に、南西-北東に向け等間隔に並ぶピット4個(P1~P4)があり、SB09とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは4.0m、柱間距離は1.15~1.45mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で23~28cm、深さ最大9~51cmを測る。主軸はN-36°-Eであり、SD04とほぼ同方向に伸びるものである。

### SB10 (第54図)

第1加工段の標高33.25~34.00mを測る場所に、南西-北東に向け等間隔に並ぶピット4個(P5~P8)とこれに直交するピット1個(P9)があり、SB10とした。桁行3間、梁間1間の建物として復元でき、長さは梁間2.2m、桁行6.8m、桁行側の柱間距離は2.25~2.30mを測る。ピットは円形または楕円形を呈しており、規模は長軸径で26~33cm、深さ最大20~59cmを測る。主軸はN-38°-Eであり、SD04とほぼ同方向に伸びるものである。



第54図 SD04、SB09・10実測図 (S=1/80)

**SB11 (第55図)** 第1加工段の標高33.75~34.25mを測る場所に、南南西~北北東に向け等間隔に並ぶピット4個(P1~P4)があり、SB11とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは6.4m、柱間距離は2.1~2.25mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で34~80cm、深さ最大11~60cmを測る。

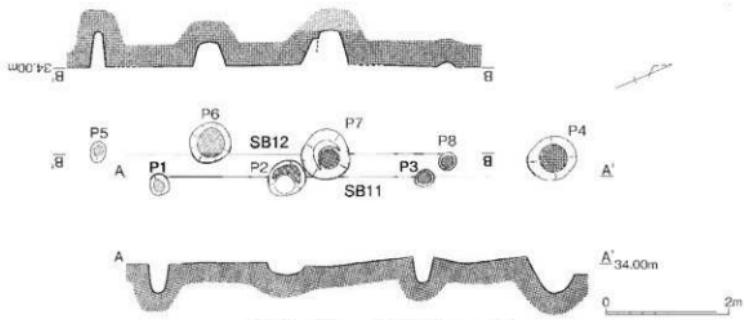
**SB12 (第55図)** 第1加工段の標高33.75~34.25mを測る場所に、南南西~北北東に向け等間隔に並ぶピット4個(P5~P8)があり、SB12とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは5.65m、柱間距離は1.85~1.95mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で30~65cm、深さ最大9~57cmを測る。主軸はN-23°-Eである。

**SB13 (第56図)** 第1加工段の標高33.25~33.75mを測る場所に、南西~北東に向け等間隔に並ぶピット3個(P1~P3)とこれに直交するピット1個(P4)があり、SB13とした。桁行2間×梁間1間の建物として復元できるものであり、長さは梁間1.7m、桁行5m、柱間距離は桁行2.5mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で24~38cm、深さ最大8~39cmを測る。主軸はN-45.5°-Eであり、SB14とはほぼ同方向を向くものである。

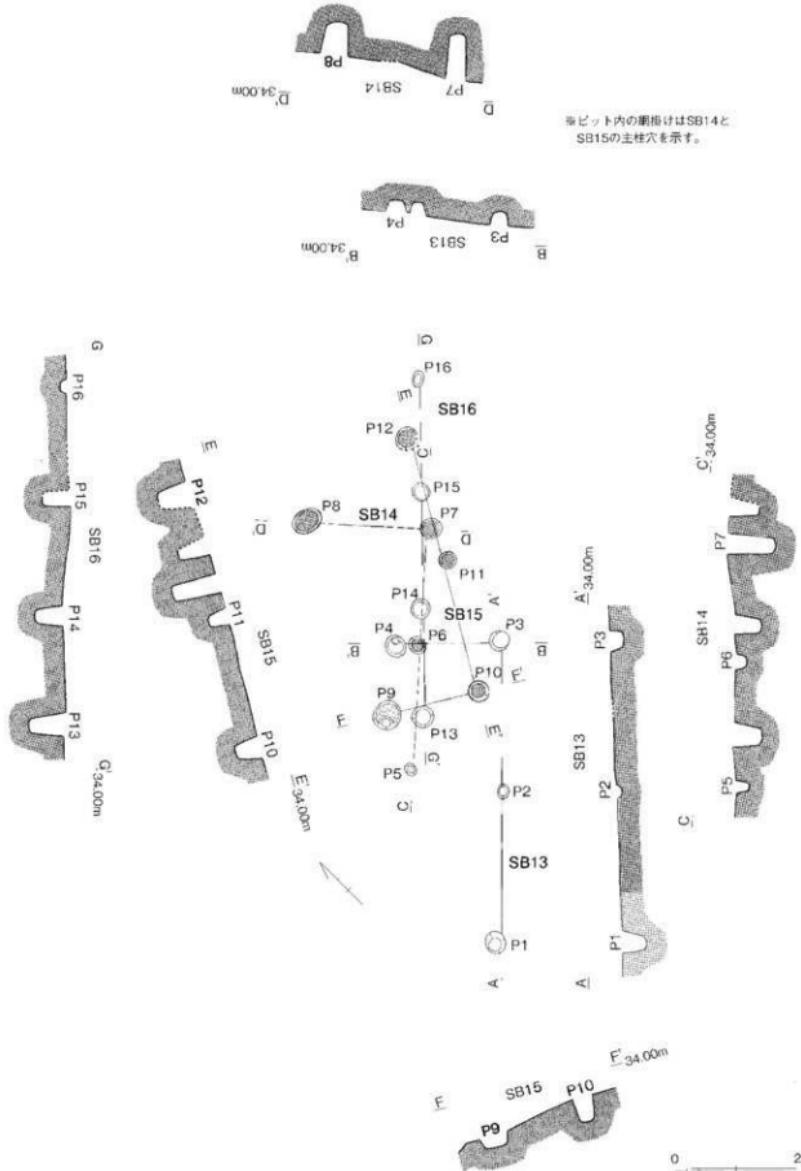
**SB14 (第56図)** 第1加工段の標高33.25~33.75mを測る場所に、南西~北東に向け等間隔に並ぶピット3個(P5~P7)とこれに直交するピット1個(P8)があり、SB14とした。桁行2間×梁間1間の建物として復元できるものであり、長さは梁間2.0m、桁行3.95m、柱間距離は桁行1.95~2.05mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で22~49cm、深さ最大17~78cmを測る。主軸はN-48.5°-Eであり、SB13とはほぼ同方向を向くものである。

**SB15 (第56図)** 第1加工段の標高33.25~33.75mを測る場所に、南西~北東に向け等間隔に並ぶピット3個(P10~P12)とこれに直交するピット1個(P9)があり、SB15とした。桁行2間×梁間1間の建物として復元できるものであり、長さは梁間1.55m、桁行4.30m、柱間距離は桁行2.15~2.20mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で29~49cm、深さ最大21~48cmを測る。主軸はN-31°-Eである。

**SB16 (第56図)** 第1加工段の標高33.25~33.75mを測る場所に、南西~北東に向け等間隔に並ぶピット4個(P13~16)があり、SB16とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは5.5m、柱間距離は1.80~1.90mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で28~36cm、深さ最大12~60cmを測る。主軸はN-45°-Eである。



第55図 SB11・12実測図 (S=1/80)

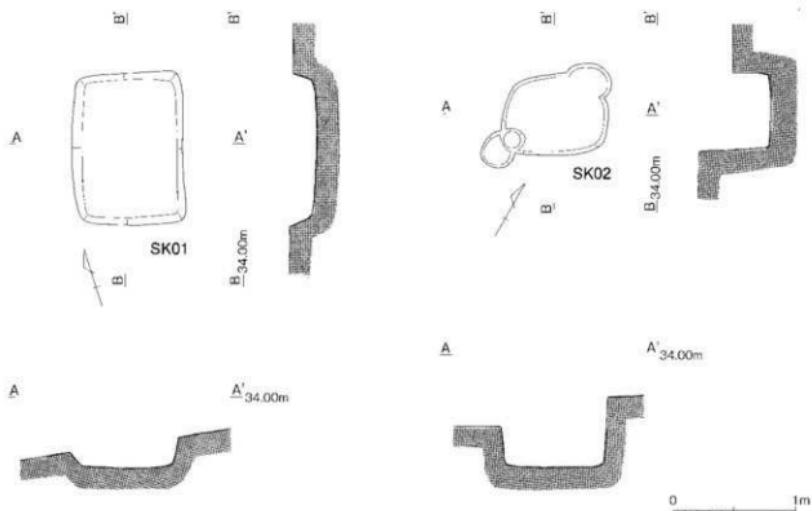


第56図 SB13~16実測図 (S=1/80)

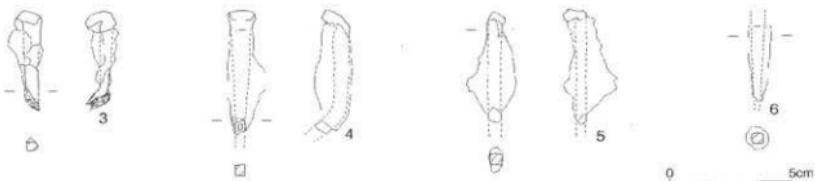
**SK01（第57図）** 第1加工段平坦面の標高33.25~33.75mを測る位置で検出された土壙である。平面形は長方形を呈し、主軸はN-18°-Eである。規模は長辺1.24m、短辺0.89m、深さ最大25.0cmを測る。遺物としては埋土中より鉄製角釘4点が出土している。深さの浅い点が気になるが、座棺墓の可能性が考えられる。

**SK01出土遺物（第58図）** 3~6は鉄製角釘である。3は完形であり、頭部は折り曲げられ、先端部分は先細りに仕上げられている。折れ曲がっているため引き延ばしての計測はできないが、本来は全長約4cm程度のものと考えられる。先端付近には木質が残存している。4・5は頭部の破片であり、頭部は折り曲げられている。4は残存長5.0cm、5が4.7cmを測る。6は先端部分の破片であり、先細りに仕上げられている。残存長3.1cmを測る。全体に木質が残る。

**SK02（第57図）** 第1加工段平坦面の標高33.25~33.75mを測る位置で検出された焼土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、長辺0.86m、短辺0.68m、深さ最大57cmを測る。平坦な底部より壁は垂直に近く立ち上がっており、壁面は熱を受け赤変している。SB16のP15、SB15のP12と切り合っており、調査日誌にはこれらのピットよりも古いという記載がある。



第57図 SK01・02実測図 (S=1/40)



第58図 SK01出土遺物実測図 (S=1/2)

## 2. 第2加工段

調査区のほぼ中央を南西から北東に向けて横断する加工段であり、南東側の斜面は第3加工段の斜面へと続く。また、第4加工段・第5加工段の斜面とも切り合っているが、いずれも新旧関係は判らない。北東側の斜面は平面「L」字状にカットしており、屈曲して南西側へ伸びている。斜面の下には平坦面が作られており、溝1本(SD06)と多数のピットを検出した。平坦面での標高は30.50～31.25mであり、第1加工段平坦面との比高差は約2.75mを測る。斜面からも性格不明の土坑3個(SK03～05)を検出しているが、この加工段に伴うものではないと考えられるため、「6. その他の遺構」の項で取り扱った。

**溝SD06(第59図)** 第2加工段平坦面の標高30.50～31.25mを測る場所から検出されたものであり、南西から北東のN-37°-Eに向けて伸び、中途で「く」の字に屈曲してN-40°-Wの南西側へ向きを変える。加工段の斜面に沿って巡るものであり、現状での規模は長さ約9.5m、幅23～70cm、深さ最大35cmを測る。建物跡に付随する壁帶溝と考えられ、溝の西側からは掘立柱建物跡4棟(SB17～20)を復元した。

**SB17(第59図)** 第2加工段の標高30.75～31.25mを測る場所に、南南西-北北東に向か等間隔に並ぶピット4個(P1～P4)があり、SB17とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは4.3m、柱間距離は1.35～1.6mである。ピットは円形または梢円形を呈しており、現状での規模は長軸径で22～34cm、深さ最大25～39cmを測る。主軸はN-27.5°-Eである。

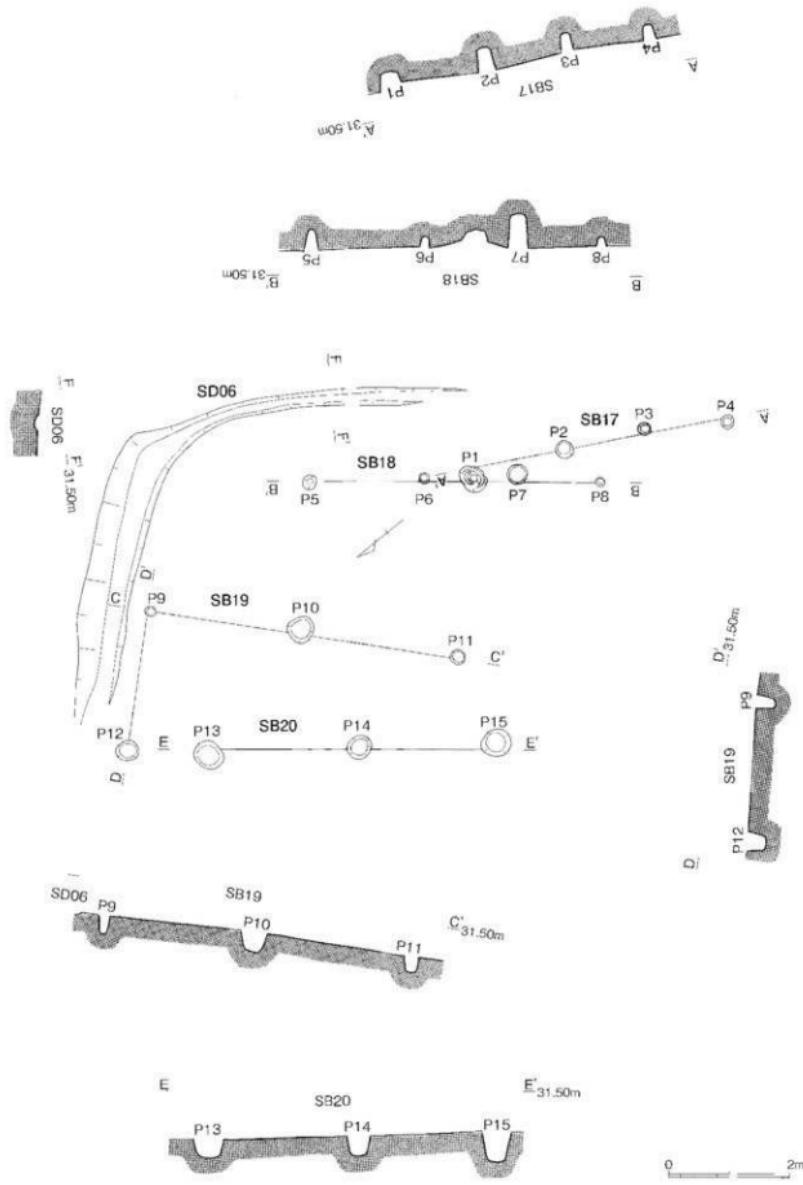
**SB18(第59図)** 第2加工段の標高30.75～31.25mを測る場所に、南西-北東に向か等間隔に並ぶピット4個(P5～P8)があり、SB18とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは4.75m、柱間距離は1.40～1.85mである。ピットは円形または梢円形を呈しており、現状での規模は長軸径で17～33cm、深さ最大15～57cmを測る。主軸はN-39°-Eであり、SD06の南西-北東の軸とはほぼ同方向に伸びるものである。

**SB19(第59図)** 第2加工段の標高30.50～31.00mを測る場所に、南西-北東に向か等間隔に並ぶピット3個(P9～P11)とこれに直交するピット1個(P12)があり、SB19とした。桁行2間×梁間1間の建物として復元できるものであり、長さは梁間2.30m、桁行5.1m、柱間距離は桁行2.50～2.60mである。ピットは円形または梢円形を呈しており、現状での規模は長軸径で19～45cm、深さ最大26～32cmを測る。主軸はN-48°-Eであり、SD-05とはほぼ同方向に伸びるものである。

**SB20(第59図)** 第2加工段の標高30.50～31.00mを測る場所に、南西-北東に向か等間隔に並ぶピット3個(P13～P15)があり、SB20とした。桁行2間の建物として復元できるものであり、長さは4.72m、柱間距離は2.25～2.50mである。ピットは円形または梢円形を呈しており、現状での規模は長軸径で42～50cm、深さ最大28～50cmを測る。主軸はN-39°-Eである。

## 3. 第3加工段

調査区のほぼ中央を南西から北東に向けて伸びる加工段であり、北東側の斜面は第2加工段の斜面と繋がっている。図面を観察する限りでは斜面下に長さ18.1m、幅2.25mを測る平坦面が作られている。しかし、記録写真やレベルからは平坦面と呼ぶには若干傾斜がきつく起伏もある。ピット等の遺構も検出されていないことから、本来は第4加工段の加工斜面であったものが浸食や開墾により崩れたものと思われる。



第59図 第2加工段SD06、SB17~20実測図 (S=1/80)

#### 4. 第4加工段

調査区の南西側で検出された加工段であり、南西-北東方向へ向け伸びている。斜面の下には平坦面が作り出されており、検出した範囲での規模は長さ約20m、幅2.0~2.45mを測る。この平坦面からは溝2本（SD07・08）、掘立柱建物跡6棟（SB21~26）と多数のピットが検出された。第4加工段の加工斜面と第2加工段の加工斜面とは切り合っている。また、第5加工段によって平坦面が削られているようだが、いずれも新旧関係は不明である。平坦面での標高は31.00~31.75mを測り、第1加工段平坦面との比高差は約2.5m、第2・第5加工段との比高差は約0.25mを測る。

**溝SD07・08（第60・61図）** 第4加工段の平坦面からは2本の溝が検出された。加工斜面と平行に南西-北東方向に伸びるものであり、北東側は斜面下方にあたる北西に向け屈曲している。その主軸はSD07がN-48.5°-E、SD08がN-47.5°-Eであり、ほぼ一直線となっている。規模はSD07が長さ約11m、幅50~92cm、深さ最大15cm、SD08が長さ約10.2m、幅55~80cm、深さ最大12cmを測る。位置関係から推定するとSD07に伴う建物がSB21、SD08に伴うものがSB26と考えられる。SB22~25についてはどちらとも判断しがたい。

**SB21（第60図）** 第4加工段の標高31.00~31.50mを測る場所に、南西-北東に向等間隔に並ぶピット3個（P1~P3）とこれに直交するピット3個（P4~6）があり、SB21とした。桁行2間×梁間2間の建物として復元できるものであり、長さは梁間2.60m、或いは3.20m、桁行6.0m、柱間距離は桁行3.0mである。ピットの規模は長軸径で28~60cm、深さ最大13~57cmを測る。主軸はN-48.5°-Eであり、SD07とはほぼ同方向に伸びるものである。

**SB22（第60図）** 第4加工段の標高31.25~31.75mを測る場所に、南西-北東に向等間隔に並ぶピット4個（P7~P10）があり、SB22とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは4.45m、柱間距離は1.40~1.50mである。ピットの規模は長軸径で22~32cm、深さ最大15~34cmを測る。主軸はN-48°-Eであり、SD07・08とはほぼ同方向に伸びるものである。

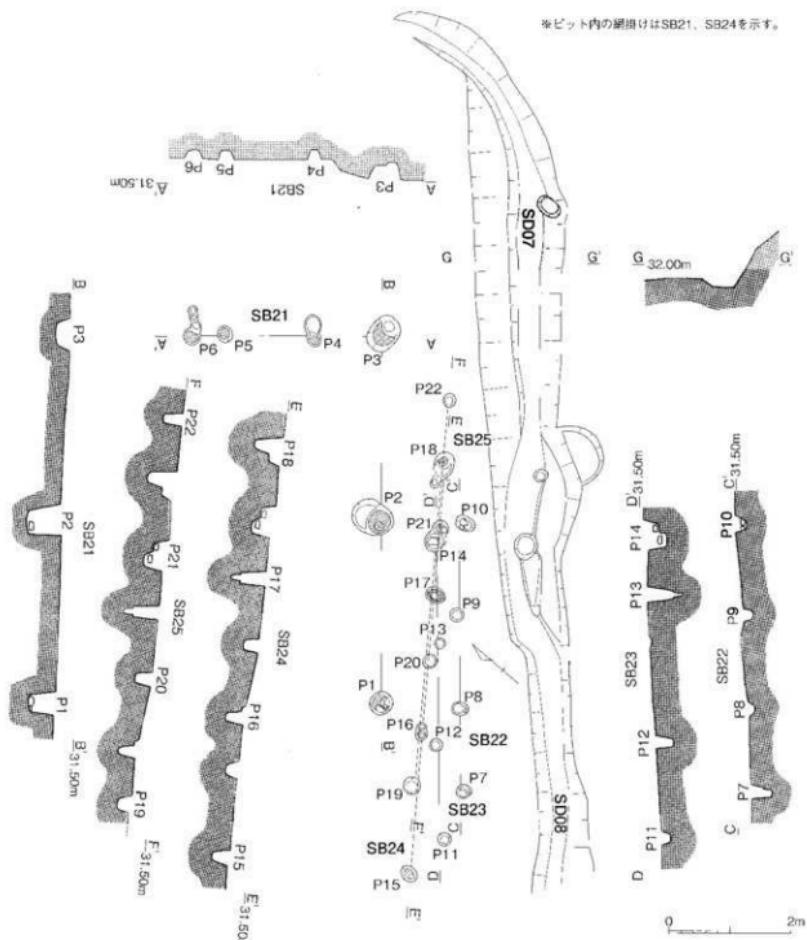
**SB23（第60図）** 第4加工段の標高31.00~31.50mを測る場所に、南西-北東に向等間隔に並ぶピット4個（P11~P14）があり、SB23とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは4.9m、柱間距離は1.55~1.65mである。ピットの規模は長軸径で18~38cm、深さ最大5~32cmを測る。主軸はN-48°-Eであり、SD07・08とはほぼ同方向に伸びるものである。

**SB24（第60図）** 第4加工段の標高31.00~31.50mを測る場所に、南西-北東に向等間隔に並ぶピット4個（P15~P18）があり、SB24とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは6.8m、柱間距離は2.20~2.30mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で20~34cm、深さ最大29~60cmを測る。主軸はN-54.5°-Eである。

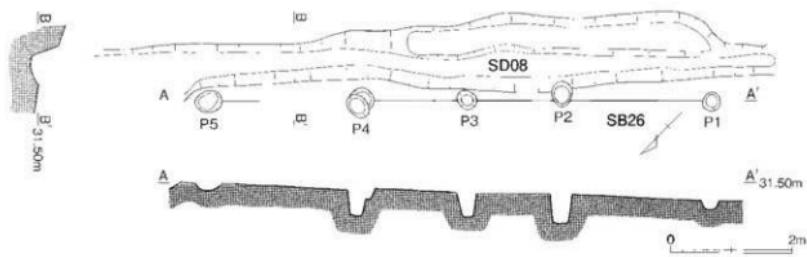
**SB25（第60図）** 第4加工段の標高31.00~31.50mを測る場所に、南西-北東に向等間隔に並ぶピット4個（P19~P22）があり、SB25とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは6.36m、柱間距離は2.10~2.16mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で21~28cm、深さ最大23~32cmを測る。主軸はN-54.5°-Eである。

**SB26（第61図）** 第4加工段の標高31.00~31.50mを測る場所に、南西-北東に向等間隔に並ぶピット5個（P1~P5）があり、SB26とした。桁行4間の建物として復元できるものであり、長さは8.26m、柱間距離は1.60~2.50mである。ピットの規模は長軸径で31~45cm、深さ最大14~50cmを測る。主軸はN-46.5°-Eであり、SD08とはほぼ同方向に伸びるものである。

半ピット内の網掛けはSB21、SB24を示す。



第60図 SD07、SB21～25実測図 (S=1/80)



第61図 SD08、SB26実測図 (S=1/80)

## 5. 第5加工段

第4加工段の北西側に位置する加工段であり、南西から北東方向に向け伸びている。斜面下には平坦面が作り出されており、ここから溝1本(SD09)、性格不明造構2個(SX01・02)と多数のピットを検出した。第2加工段の加工斜面と第4加工段の平坦面と切り合っているが、新旧関係は判らない。平坦面での標高は30.75～31.25mを測り、第2加工段の平坦面とはほぼ同レベルに位置している。第4加工段の平坦面とは比高差約25cmを測る。

**溝SD09(第62図)** 第5加工段平坦面の標高31.00～31.25mを測る位置で検出されたものであり、南西から北東のN-45.5°-Eに向けて伸び、北東側ではほぼ直角に折れ曲がり斜面下方となるN-42°-Wの南東側へ向きを変える。加工段の斜面と平行に伸びるものであり、規模は長さ約9.50m、幅20～47cm、深さ最大17cmを測る。溝の西側で掘立柱建物跡1棟(SB23)を復元した。

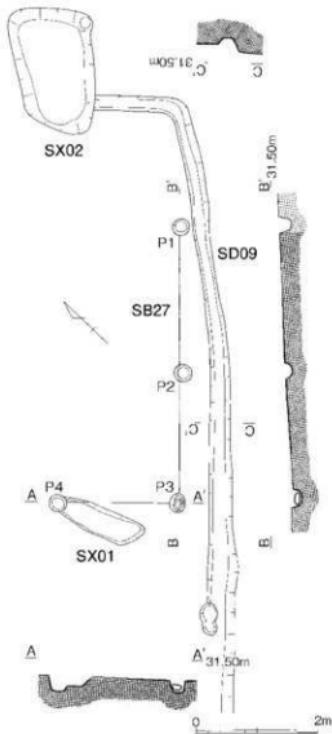
**SB27(第62図)** 第5加工段の標高31.00～31.25mを測る場所に、南西-北東に向け等間隔に並ぶピット3個(P1～P3)とこれに直交するピット1個(P4)があり、SB27とした。桁行2間×梁間1間の建物として復元できるものであり、長さは梁間1.95m、桁行4.55m、柱間距離は桁行2.15～2.40mである。ピットの規模は長軸径で29～30cm、深さ最大13～26cmを測る。主軸はN-46°-Eであり、SD09とはほぼ同方向に伸びるものである。

## 6. その他の遺構

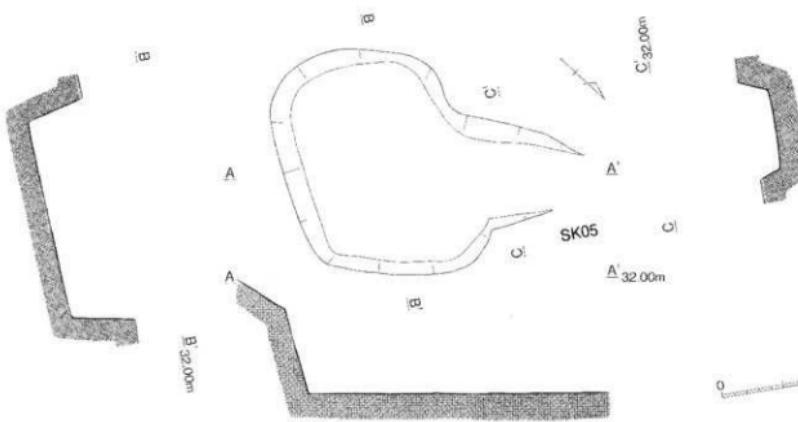
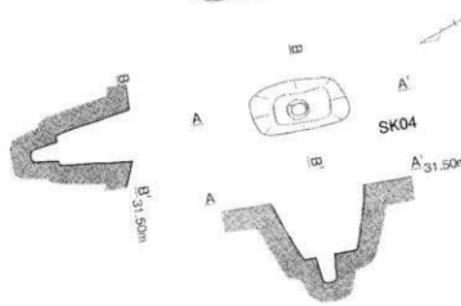
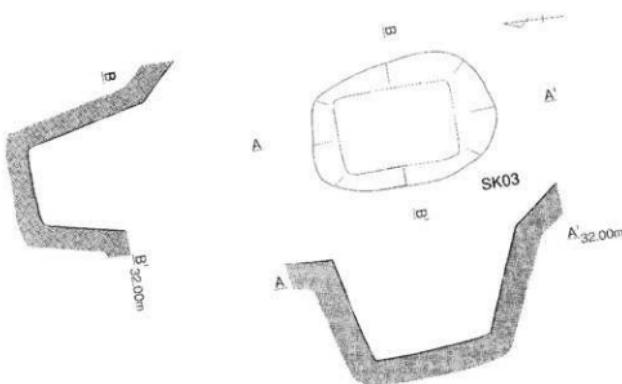
**SK03(第63図)** 第2加工段の標高31.75～32.50mを測る加工斜面から検出された土坑である。平面形は上部が隅丸の長方形、底部が長方形を呈し、上縁の長軸1.48m、短軸1.02m、底部の長辺0.95m、短辺0.65m、深さは最大で1.04mを測る。底部中央に小ピットがないものの、形態等から落とし穴かSK01と同様の座墳墓と考えられる。

**SK04(第63図)** 第2加工段の標高31.50～32.00mを測る加工斜面から検出された土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、上縁の長軸0.76m、短軸0.40m、深さ最大63cmを測る。底部中央には直径16cm、深さ最大23cmを測る小ピットが開けられていることから落とし穴かもしれない。

**SK05(第63図)** 第2加工段の標高31.25～32.00mを測る加工斜面から検出された土坑である。長方形の長辺中央部に溝状の施設が付随する。写真を見る限りでは、天井部が崩れた横穴墓の羨道から玄室部分といった印象を受ける。横穴墓とした場合、羨道は現状で長さ0.9m、幅0.51～0.65mを測る。玄室はやや歪な長方形を呈し、長辺193cm、短辺143cmを測る。開口方向は北西方向のN-41°-Wである。



第62図 SD09、SB27実測図 (S=1/80)



第63図 SK03~05実測図 ( $S=1/40$ )

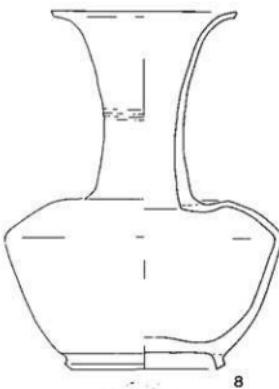
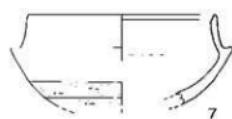
## 7. B・C区出土遺物（第64・65図）

7～9は須恵器である。7は受け部をもつ壺身であり、口縁端部内面に段を有する。調整は底部外側が丁寧な回転ヘラケズリ、その他には回転ナデが施されている。法量は口径11.5cm、受部径12.5cm、最大径13.5cmを測る。C区より出土した。時期は大谷編年の出雲2期と考えられる。8は長頸瓶である。底部は平底で高台が貼り付けられ、胴部は上方に最大径をもつ。口頸部は胴部から僅かに窄んで立ち上がった後、大きく外反する。頸部外面に2条の沈線が施されており、底部の切り離しは回転糸切りである。法量は口径11.3cm、底径8.9cm、器高22.0cmを測る。C区より出土した。時期は高広III B期に相当し、7世紀末から8世紀前葉頃と考えられる。9は大甕口縁の破片である。斜め上方に向かって立ち上がり、端部は外方に折り曲げられている。外面は沈線で区画され、区画面には波状文が施されている。口径47.0cmを測る。B区より出土した。

10～15は土師質土器底部の破片である。10～13は無高台のものであり、いずれもB区より出土している。底部の切り離しは10が静止糸切り、他のものは風化が著しく不明である。底径は10が5.4cm、11が7.4cm、12が9.5cm、13が不明である。14・15は高台をもつものであり、C区より出土している。高台端部を欠くため、径を復元することはできなかった。16～18は国産陶器であり、いずれもB区より出土している。16は壺器系の壺口縁部の破片である。口縁端部が上下に拡張されたいわゆる「N字状口縁」をもつものであり、常滑焼の編年では6a型式に比定されている。時期は13世紀頃と考えられる。17は越前焼の描鉢である。体部は斜上方に真っ直ぐに立ち上がり、口縁部を内湾させた後、端部を僅かに外反させる。口縁部内面に1条の沈線をもち、ここより下に6本1組みの条溝が刻まれている。口径32.5cmを測る。時期は戦国から桃山時代（15～16世紀か）のものと考えられる。18は備前焼の描鉢である。平坦な底部より体部が斜め上方に向かって伸び、内面には7本1組の条溝が放射状に刻まれている。底径16.3cmを測る。

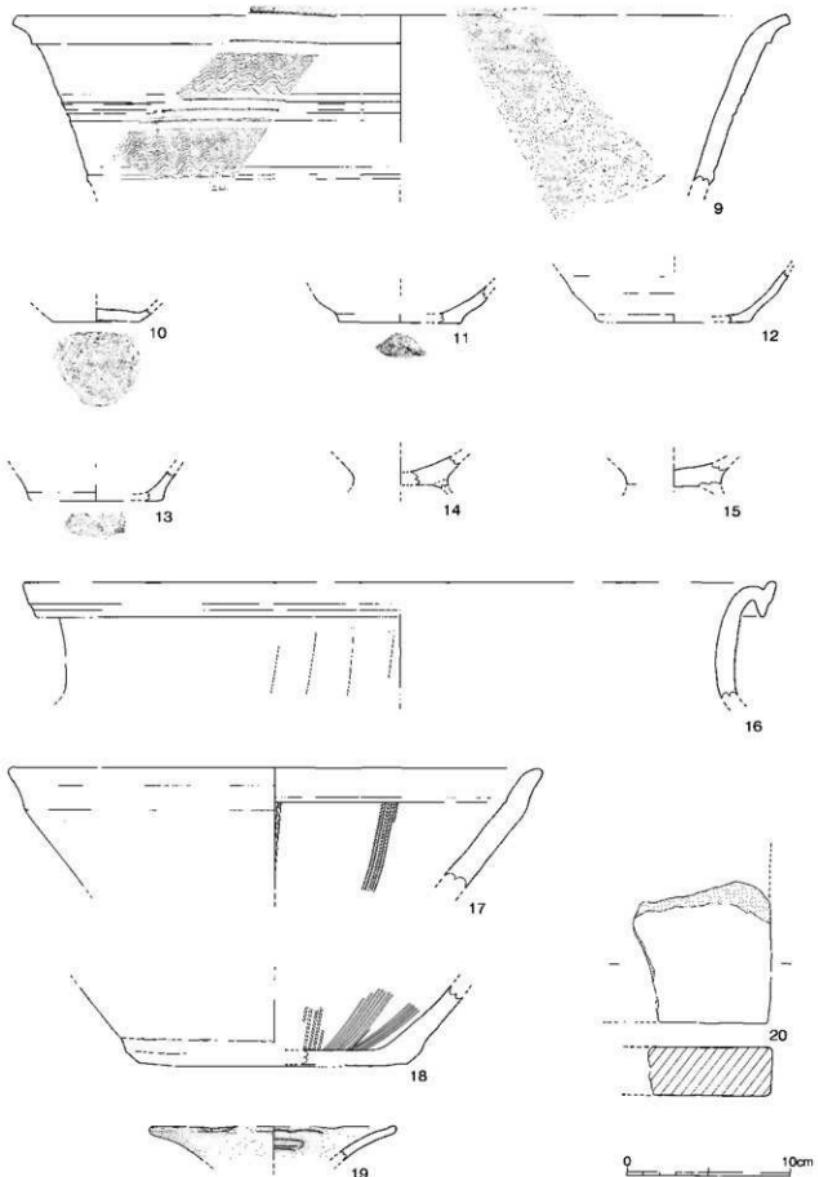
19是中国青磁の稜花皿である。体部が大きく開き気味に立ち上がり、口縁付近で更に開く。波状の口縁をもち、内面には文様が描かれている。口径は小片のため不明である。B区より出土した。時期は15～16世紀。

20は素焼きの壇である。平面は方形を呈し、厚さは3.0cmを測る。焼成不良のため表面が風化しており調整は不明である。色調は灰白色を呈し、胎土に0.2～0.7cmの砂粒を多く含む。



0 10cm

第64図 B・C区遺構外出土遺物実測図  
(S=1/3)



第65図 B・C区造構外出土遺物実測図 (S=1/3)

### 3. 出土地点不明遺物（第66～68図）

ここでは、昭和58年度の発掘調査で出土した遺物のうち、どの調査区から出土したものか判らない遺物を取り扱う。

**土師器（第66図21・22）** 21・22は口縁が外反する甕である。風化のため外側の調整は判らないが、内面の頸部以下に縱方向のヘラケズリが観察できる。口径は21が26.4cm、22が23.2cmを測る。

**中世須恵器（第66図23）** 23は甕底部である。平坦な底部より体部が斜上方に向け立ち上がり、内面底部付近には指頭圧痕が巡る。切り離しは静止糸切りである。底径25.6cmを測る。

**土師質土器（第66図24～26）** 24は皿である。体部と底部の境が強いナデにより段をなし、体部は逆「ハ」の字状に短く立ち上がっている。底部の切り離しは糸切りである。口径7.5cm、底径4.0cm、器高2.2cmを測る。25は口縁部の破片である。斜め上方に向け直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。口径13.2cmを測る。26は無高台の底部片である。底径は5.2cmを測り、切り離しには回転糸切りが施されている。

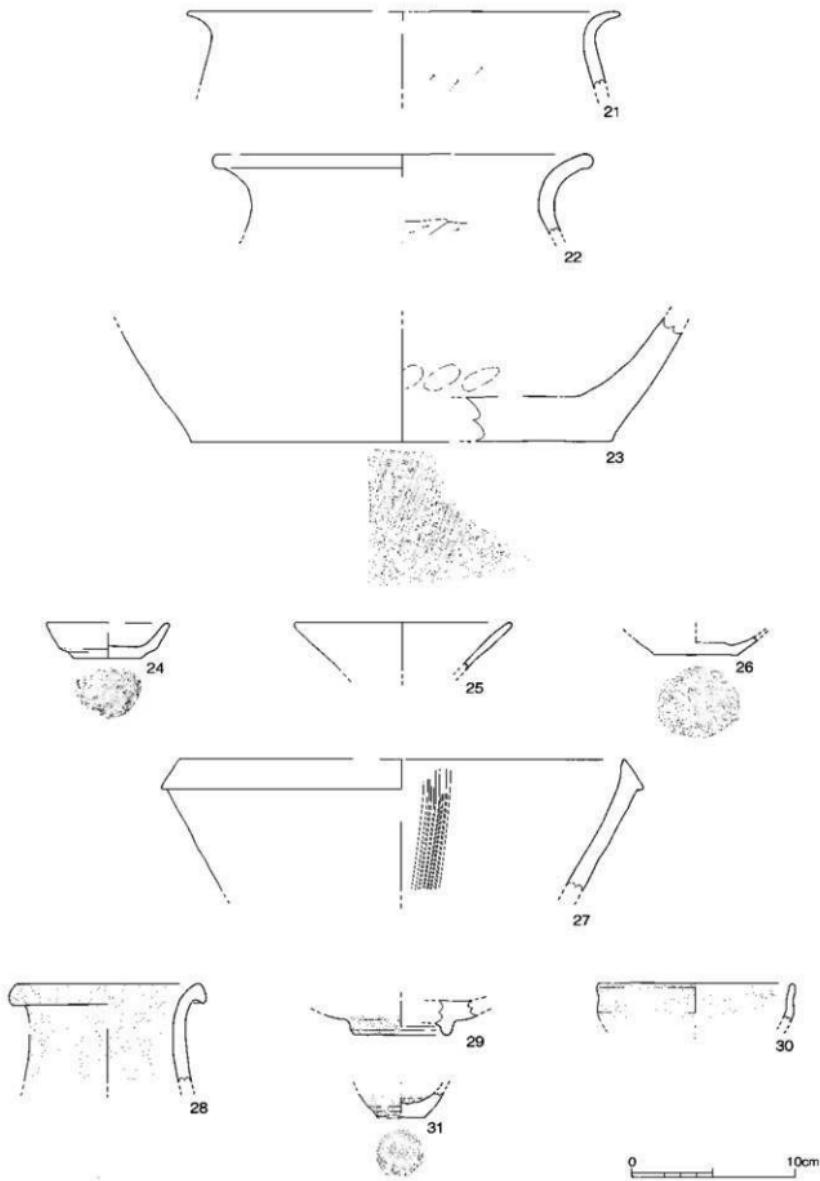
**国産陶器（第66図27）** 27は備前焼の擂鉢である。体部は斜上方に向け立ち上がり、端部は肥厚され面をもつ。内面には7条1組の条溝が刻まれている。中世3期。14世紀中葉～15世紀前葉。

**貿易陶磁（第66図28～31）** 28は中国白磁の四耳壺か、水注と考えられる。口縁部は口縁に向けやすっぽんで立ち上がり、口縁部で外反し、端部は外方に折り返されている。口径11.2cmを測る。11世紀後半から12世紀頃と考えられる。29は中国青磁碗の底部の破片である。しっかりとした高台をもつもので、豊付けと高台内面は無釉である。底径5.8cmを測る。14～15世紀頃のものと考えられる。30は中国製黒釉陶器碗である。体部は内済気味に立ち上り、口縁部に括れをもつ。口径11.8cmを測る。16世紀初頭までのもの。31は中国南方産の瓶である。平坦な底部より体部はやや丸みをもって立ち上がっており、底部外側に回転糸切り痕を残す。にぶい橙色の素地に黒褐色の釉が施されているが、底部は無釉である。底径2.9cmを測る。16世紀代のものと考えられる。

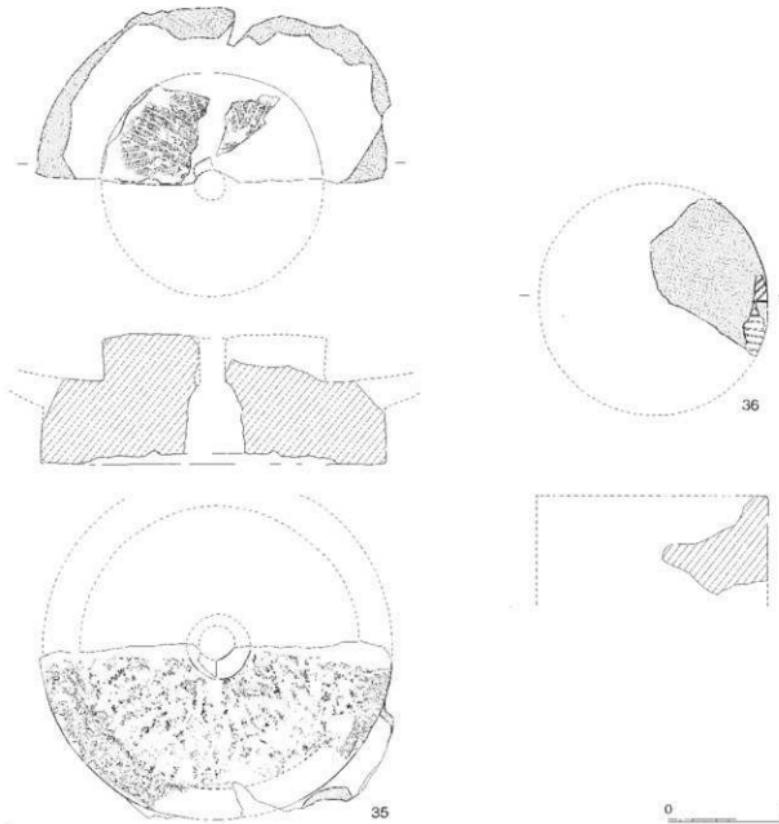
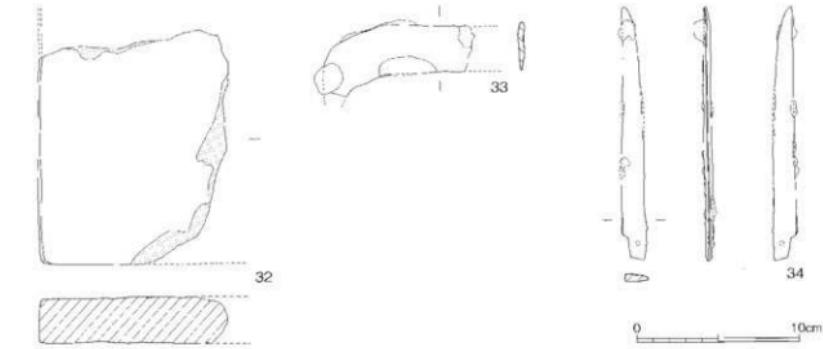
**埴（第67図32）** 32は素焼の埴である。平面は方形を呈し、厚さは2.7～2.8cmを測る。表面は風化しており、調整は不明である。色調は灰白色を呈し、胎土に0.2～0.7cmの砂粒を多く含む。

**鉄器（第67図33・34）** 33は鎌である。先端付近で刃部・棟とともに大きく曲がる。残存長8.7cm、幅3.0cm、厚さ最大0.3cmを測る。34は刀子である。刀身関は両関で、刀身長14.2cm、刀身幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。茎は長さ1.35cmで、茎尻の幅1.1cm、厚さ0.3cmを測り、断面は方形を呈する。

**石器（第67図35・36）** 35は挽臼であり、茶臼の下臼と考えられる。高台内を除く外面部は丁寧に研磨されており、所々に擦痕が観察できる。臼部上面の溝は単位あたり8本以上の条溝が7～8mm間隔で刻まれている。全体に摩滅しており、深さは0.5～1mm程度である。臼部直徑は18.3cm、高さ3.7cmを測る。受鉢は大部分が欠損しており、口縁部の形態や直徑は判らない。浅い皿状と考えられ、現状での深さは最大で1.1cmを測る。高台は高さ4.7cm、直徑28.5cmを測るものであり、高台内には幅3.3cmを測る豊付け状の平坦部が巡る。その内側は鑿で荒く削られ1.1cmの深さに掘り窪められている。中央部には直徑5cmの穴が穿たれ、心孔に通じている。36も石製挽臼である。直徑18.7cmを測り、35とほぼ同じであるが、高さが7.2cm以上もあり、同一個体ではない。恐らく35に伴う上臼の破片と考えられる。側面は丁寧に研磨されており、下面の条溝は6～8.8mm間隔で刻まれている。小片のため単位あたりの本数は確定できなが、現状では9本観察できる。



第66図 出土地点不明遺物実測図 (S=1/3)



第67図 出土地点不明遺物実測図（埴1/3・鉄器1/3・石器1/4）

## 第4節 まとめ

昭和58年度に行った押定寺遺跡の調査は、水田中のA区と丘陵及び平坦部のB・C区の2つに分け本調査が行われている。ここでは若干の補足説明を加え、まとめとしたい。

A区からは溝状遺構1本（SD01）、掘立柱建物跡3棟（SB01～03）と多数のピットが検出されている。建物跡の覆土からは須恵器・土師器・備前焼鉢・中国青磁が出土し、ピット内からは土師質土器・中国青磁片などが出上したという。しかし、遺物の出土状況など判然とせず、遺構の時期等は不明といわざるを得ない。但し、この調査区は平成10年度調査区に隣接する水田中に位置しており、第4・5章の掘立柱建物跡等と不可分の関係にあったと考えられる。なお、平成10年度調査区と同様に整地層上に掘立柱建物跡が建っていたと考えられるが、詳細は不明である。

次に、B・C区からは5つの加工段（第1～第5加工段）が検出され、これらの平坦面からは溝8本（SD02～09）、土坑2個（SK01・02）、性格不明遺構2個（SX01・02）とピット234個が検出している。検出した多数の柱穴から24棟（SB04～27）の掘立柱建物跡を復元したが、これら加工段や加工段平坦面から検出された遺構の時期や切り合いの新旧関係は不明である。各加工段から検出された遺構の内訳は次のとおりである。

第17表 B・C区各加工段検出遺構一覧表

加工段	調（壁帶溝）	掘立柱建物跡		土坑		ピット	出土遺物
第1加工段	1本 平出部	SD02	SB04・05・06	13棟	SK01・02	2個 多数	第20表調査C区出土遺物
		SD03	SB07・08				
		SD04	SB・09・10				
		SD05	SB11・12・13・14・15・16				
		加工斜面					
第2加工段	平坦部 1本	SD06	SB17・18・19・20	4棟		多数	第19表調査B区出土遺物
	加工斜面				SK03・04・05	3個	第20表調査C区出土遺物
第3加工段	平出部						第20表調査C区出土遺物
	加工斜面						第20表調査C区出土遺物
第4加工段	平坦部 2本	SD07	SB21	6棟	SX01・02	2個	第19表調査B区出土遺物
		SD08	SB26				
第5加工段	平坦部 1本	SD09	SB27	1棟	SX01・02	2個	第19表調査B区出土遺物
	加工斜面						

出土遺物の中には試掘調査で出土した遺物も含まれている。

遺構のうち加工段と溝、及び掘立柱建物跡は密接な関係にあるようである。基本的に丘陵斜面を断面「L」字状にカットして平坦面を作り出し、壁際には壁帶溝が巡っている。掘立柱建物跡は、この加工段及び壁帶溝と平行に桁行を配置しているが、斜面下側となる桁行と梁間のピットは殆ど検出されていない。山陰地域においてこのような掘立柱建物の構築手法は弥生時代から比較的よくみられるものであり、各小地域ごとに竪穴住居と掘立柱建物の割合に時期差が存在することが指摘されている。B・C区からは竪穴住居は検出されておらず、掘立柱建物のみによって構成されている。古墳時代では、掘立柱建物が居住用の主要な建物になるのは7～8世紀に入ってからであることが指摘されている。<sup>註10</sup>出土した遺物は量的には高広ⅢA・B期（7世紀中頃から8世紀前半頃）の須恵器蓋壺と高広ⅣA期（8世紀代）の壺身が中心であるが、土師質土器や中世陶磁器の割合も高い。現時点では7世紀以降の集落跡としておきたい。

第18表 昭和58年度禅定寺遺跡発掘調査A区遺物数量表

弥生土器	土師器	須恵器	中世須恵器	土師質上器	土製品	中国青磁	中国白磁	中国青花
		76						
中国天日	中国褐釉	国産陶磁器 (中近世)	不明陶磁器、 近代陶磁器等	堆	合計			
		3			79			

第19表 昭和58年度禅定寺遺跡発掘調査B区遺物数量表

弥生土器	土師器	須恵器	中世須恵器	土師質上器	土製品	中国青磁	中国白磁	中国青花
		2	5	107		4	0	1
中国天日	中国褐釉	国産陶磁器 (中近世)	不明陶磁器、 近代陶磁器等	堆	合計			
1			5	9	1	135		

第20表 昭和58年度禅定寺遺跡発掘調査C区遺物数量表

弥生土器	土師器	須恵器	中世須恵器	土師質土器	土製品	中国青磁	中国白磁	中国青花
		3	37	27				
中国天日	中国褐釉	国産陶磁器 (中近世)	不明陶磁器、 近代陶磁器等	堆	合計			
			4	2		73		

第21表 昭和58年度禅定寺遺跡発掘調査出土土地点不明遺物数量表

弥生土器	土師器	須恵器	中世須恵器	土師質上器	土製品	中国青磁	中国白磁	中国青花
		1	21	22	1	63	1	7
中国天日	中国褐釉	国産陶磁器 (中近世)	不明陶磁器、 近代陶磁器等	堆	合計			
2	3		48	14	2	193		

第22表 昭和58年度禅定寺遺跡出土中世陶磁器一覧表

青磁碗										青磁皿等									
蓮B0	蕉B1	蓮B2	蕉B3	蕉B4	雷C1	雷C2	雷C3	龍D	龍E	景	不明	其他	龍IV	梅花A	後花B	景	不明		
										破片 5				1					
										盤 1									
										蓮弁文 3									
白磁皿										青花碗									
A	B	C	D	E1	E2	不明	其他	B	C	D	E	華南	不明	B1	C	華南C	R2	E	不明
																		1	

天日	褐釉	その他の中国製品	中国製品合計	朝鮮土器			東南アジア	国産品・その他	備考
				碗	瓶	小明			
3 (黒釉2・ 褐釉1)		白磁四耳盃または水 注 3 中世前半(12世紀代) の白磁破片 2 器種不明褐釉陶器 2 褐釉茶入 1	23					堆 5 備前掛鉢 15 備前直壺類 16 越前掛鉢 2 壺器系甕 15 肥前系陶器(砂目) 1 肥前系陶器(灰釉碗) 1 肥前系陶器(鉢) 2 肥前系磁器(廣東碗) 1 肥前系磁器(陶胎) 1 肥前系磁器(その他) 6 中世須恵器 1	その他不明 陶磁器・近 現代の陶磁 器等 25

## [註]

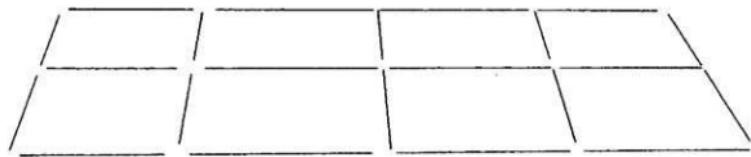
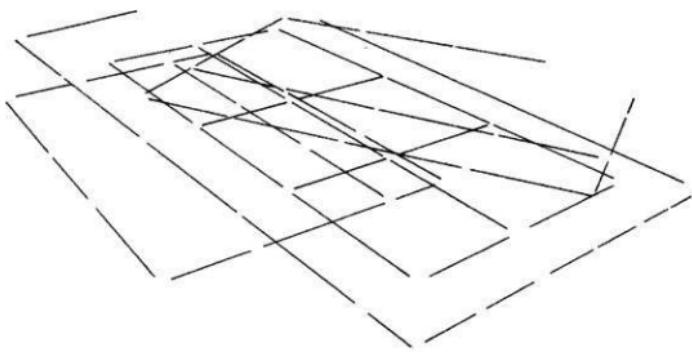
- 註1 底部に糸切りをもつ中世土師器を便宜的に土師質土器とした。(P-71)
- 註2 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』 1994年3月 (P-89)
- 註3 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』 -和田団地造成工事に伴う発掘調査- 1984年3月 (P-89)
- 註4 中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年 (P-89)
- 註5 越前古陶とその再現 -九右衛門窯の記録- 半成6年8月 出光美術館 (P-89)
- 註6 小原貴樹「米子半野出土の中世陶磁器」「松江考古第8号」1992年12月 松江考古学談話会 (P-89)
- 註7 貿易陶磁研究集会四国会資料集「城館出土の貿易陶磁器」 -織豊前夜の西国大名と貿易- 2000年6月 日本貿易陶磁研究会 (P-89)
- 註8 乘岡実「備前焼擂鉢の編年について」第3回中近世備前焼研究会資料 2000年11月 中近世備前焼研究会 乘岡実『中世備前焼擂鉢・甕の編年案』2002年1月 (P-91)
- 註9 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究」NO.2 1982年 (P-91)
- 註10 島根県教育委員会『柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡』  
一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IV 1996年8月 (P-94)

## [参考文献]

- ・岡田善治「会見町・浅井上居原敷跡の陶磁器」「松江考古第8号」1992年12月 松江考古学談話会
- ・島根県教育委員会「才ノ岬遺跡」一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II 1993年3月
- ・八重樫忠郎「平泉出土の輸入陶磁」貿易陶磁研究NO.16 1996年
- ・「石台遺跡」-馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告- 島根県教育委員会 1986年3月

# 図 版



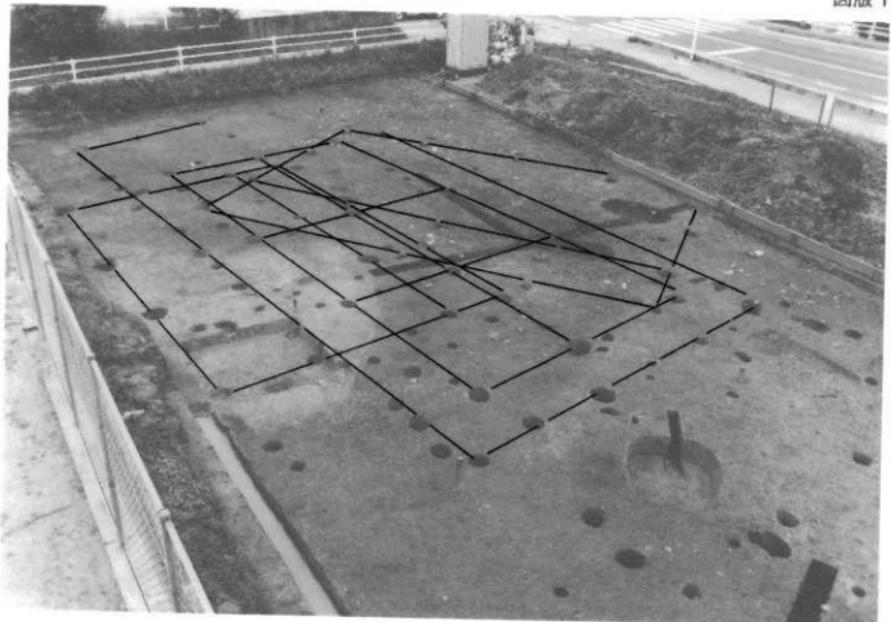




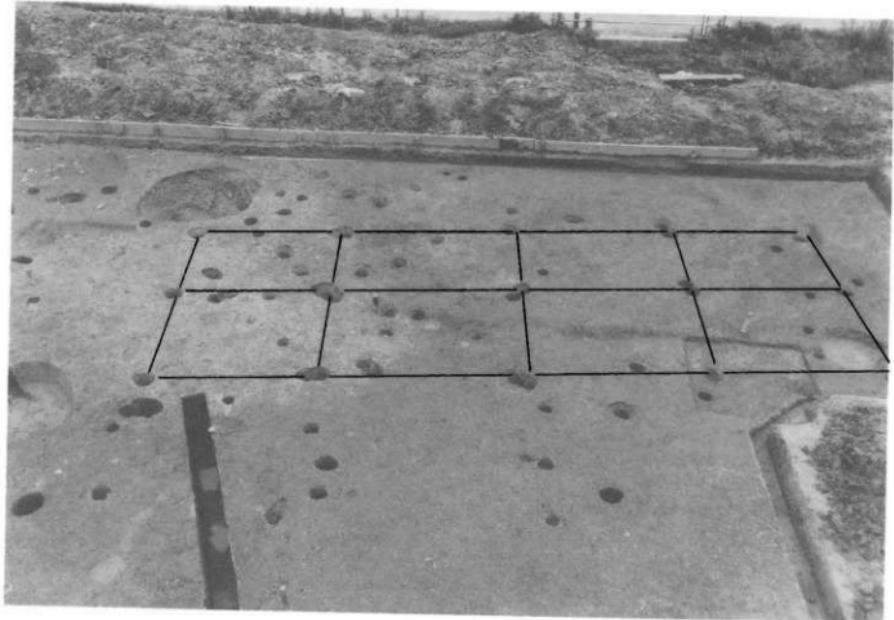
SB-01・02・04全景（東から）



SB-03全景（南東から）



SB-01・02・04全景（東から）



SB-03全景（南東から）

図版 2



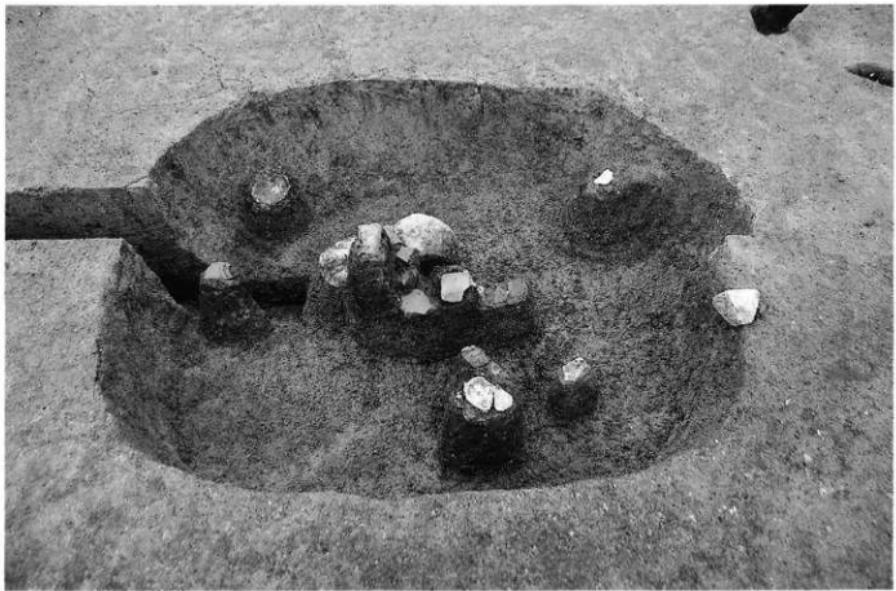
発掘調査前の禅定寺遺跡（東から）



発掘調査後の禅定寺遺跡（北東から）

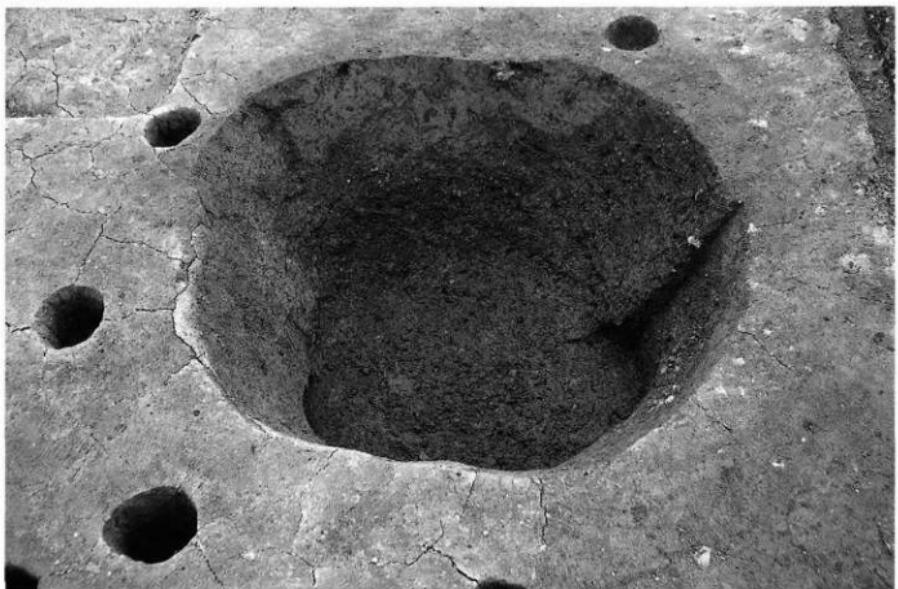


SK-01全景（北北東から）



SK-01遺物出土状況（南から）

図版 4



SK-02全景（北東から）



SK-03全景（東から）



SK-03遺物出土状況（東から）



SK-04全景（北東から）

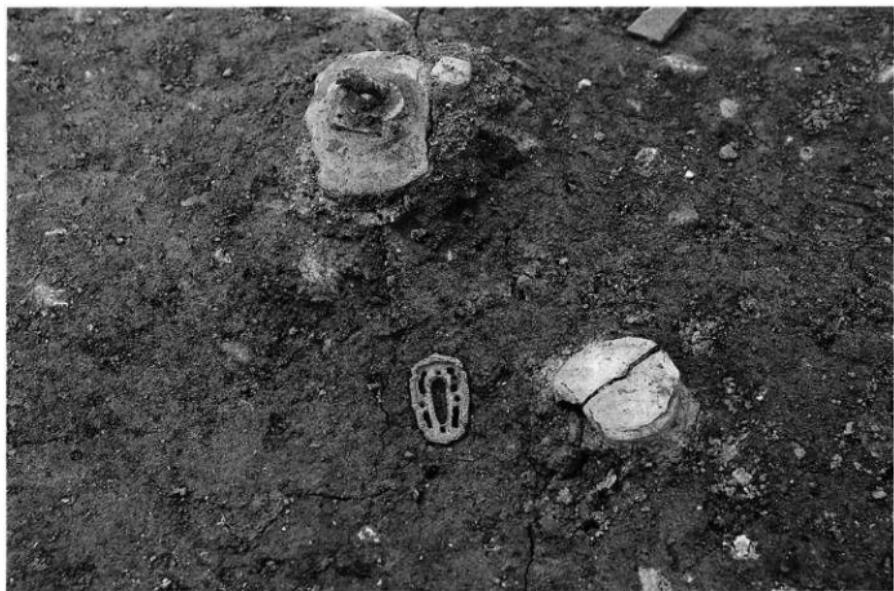
図版 6



SK-05全景（北西から）



B-3・4区遺構外遺物出土状況（南西から）



遺構外遺物出土状況（鉢40-186・土師質土器35-129）



遺構外遺物出土状況（甌29-77）

図版 8



遺構外遺物出土状況（石製丸瓶39-182・須恵器33-105）



第2 遺構面全景（北北東から）



SD-03・04全景（北西から）



SD-01・02、SK-07全景（北から）

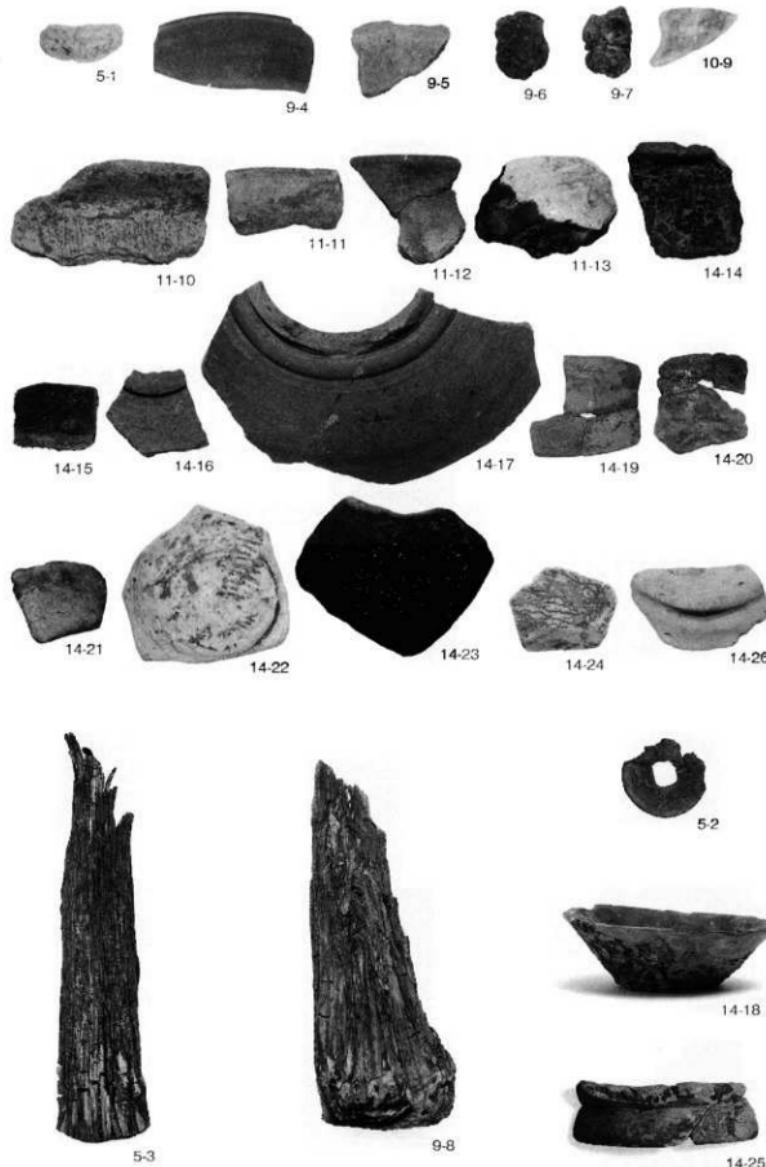
図版 10



発掘作業風景

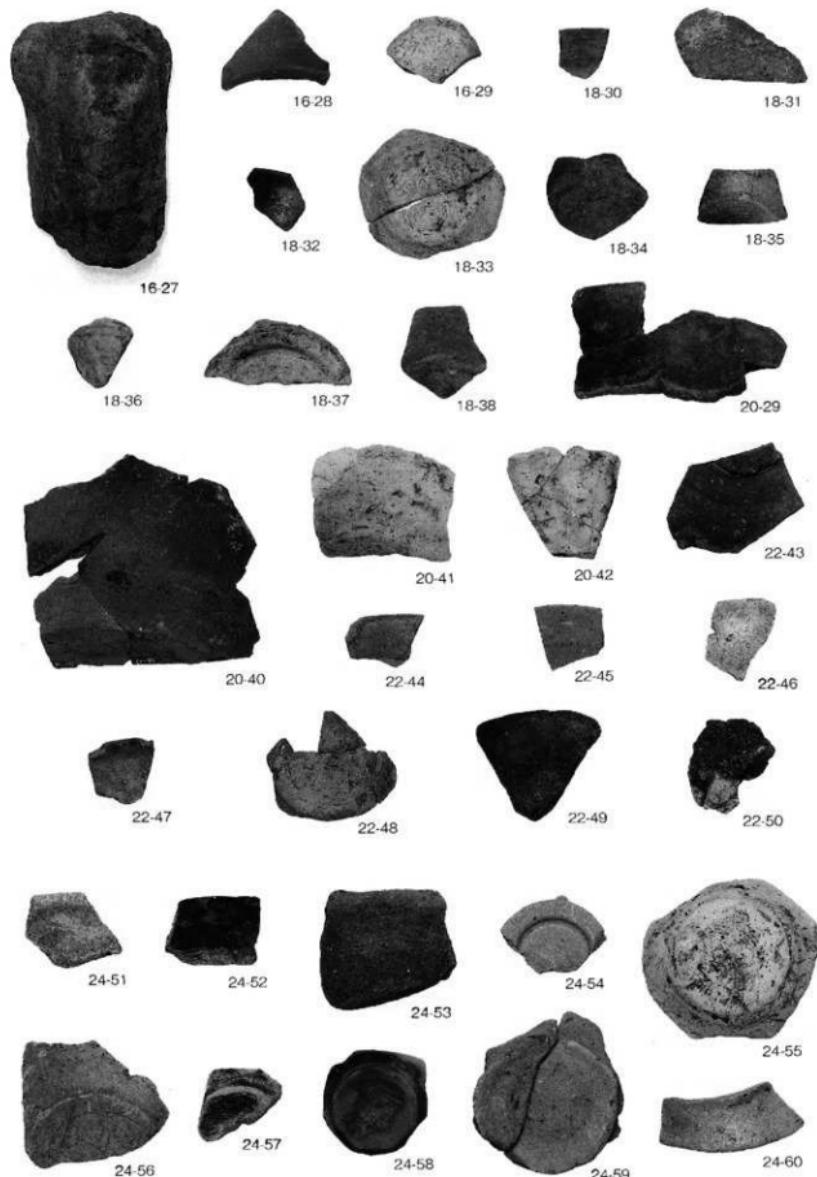


現在の禅定寺遺跡（児童福祉センターを西から望む）

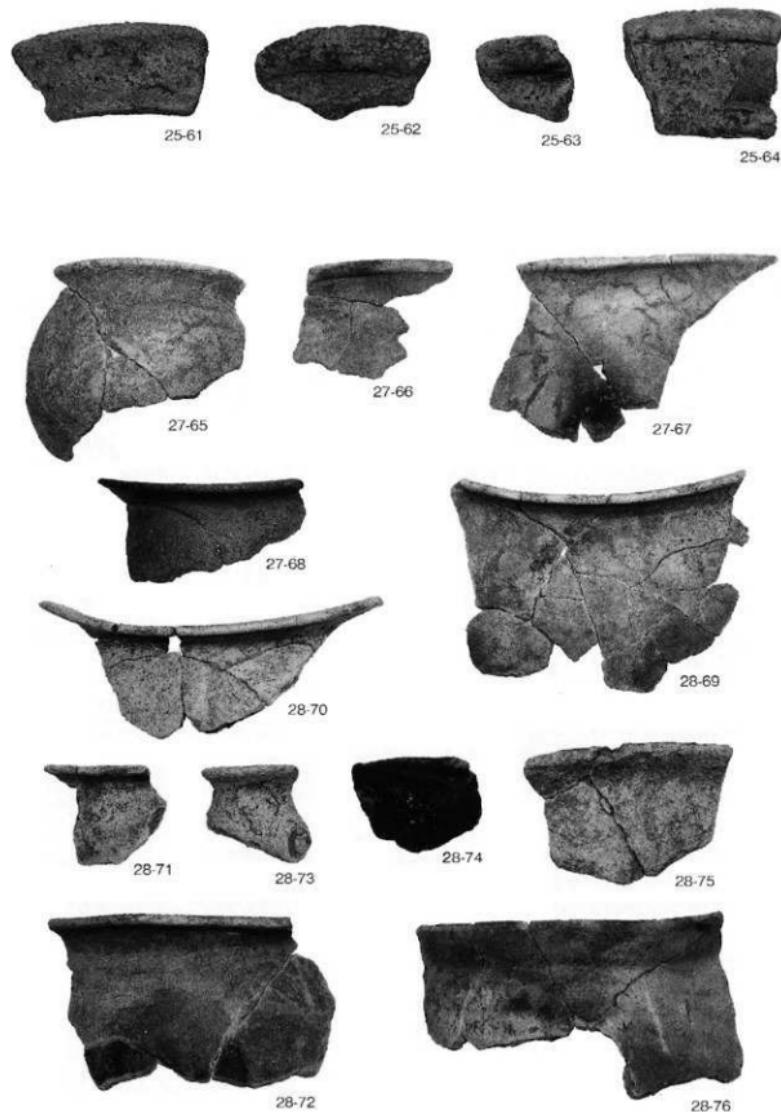


SB-01~04、SK-01出土遺物

図版 12

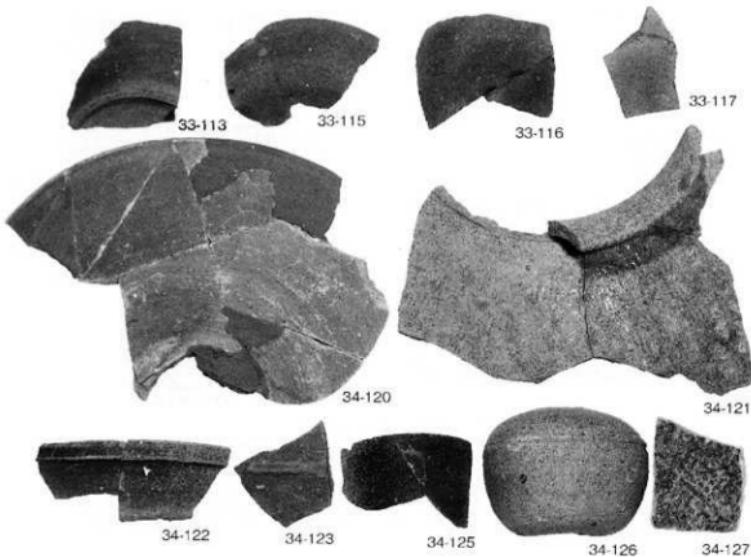


SK-02~05、ピット内出土遺物



遺構外出土 弥生土器・土師器

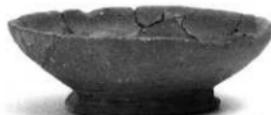




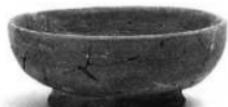
図版 16



33-104



33-105



33-106



33-107



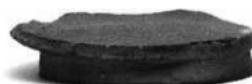
33-108



33-109



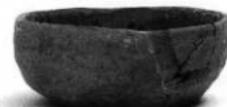
33-110



33-111



33-112



33-114



33-118

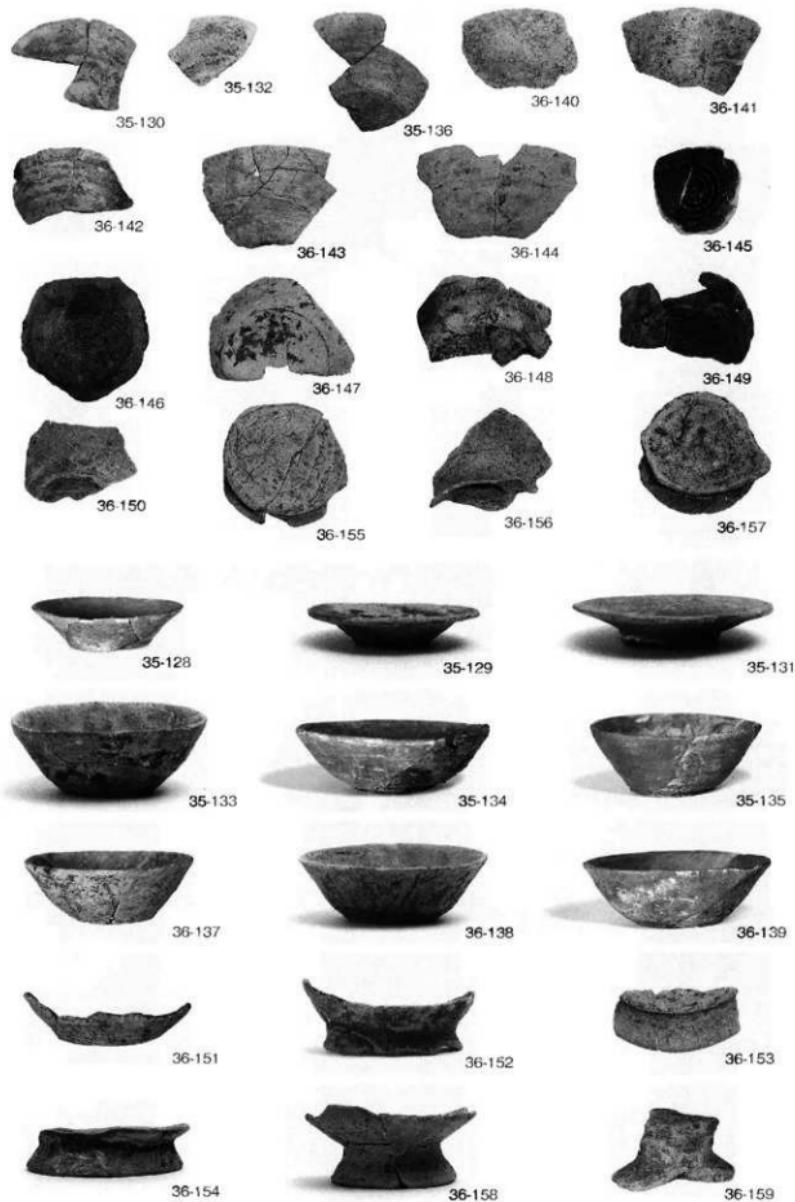


34-124



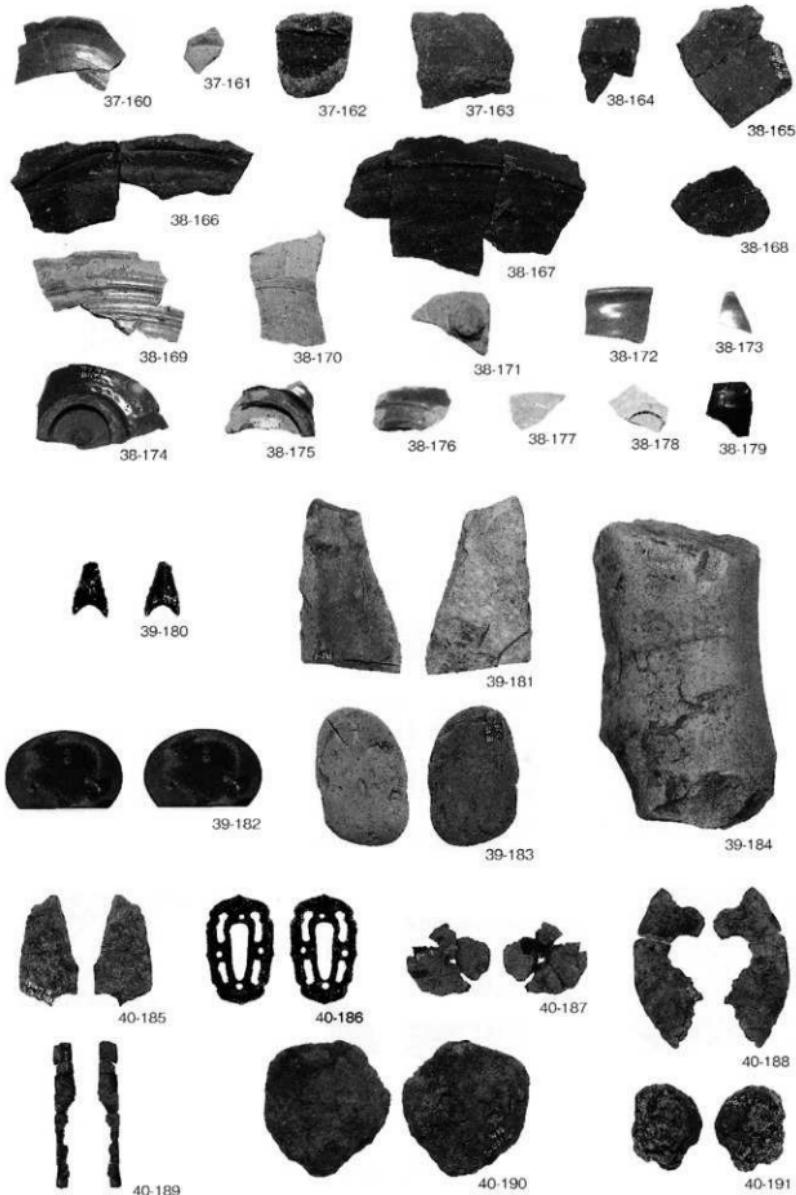
34-119

遺構外出土 須恵器



遺構外出土 土師質土器

図版 18



遺構外出土 陶磁器・石器・鉄器



整理層出土遺物

図版 20 (昭和58年度調査区)



発掘調査地全景（南西から）



A区調査後全景（南西から）

図版 21 (昭和58年度調査区)



B・C区調査後全景（南西から）

図版 22 (昭和58年度調査区)



第1加工段全景（南から）



第2加工段全景（南西から）